燐光 ＜シーズン1＞

舞茸亭金瑠璃

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦い続けろ、その身を焼き尽くすまで。愛し続けろ、その身が灰になるまで。

雪花の空に燐光を燃やしながら――

＊エルツ大陸では竜族を始祖に持つ国家「サフィルス王国」「ルベウス帝国」、頭部に鉱物の角を有する種族が多く住まう「リゥスイ連合」の三国が存在した。

共通歴２６８年４月、ルベウス帝国皇帝オルヒの死をきっかけに、幼い次期皇帝の補佐を担っていた「議会」が設立。彼らは政権を掌握すると、利己的な理由で隣国サフィルス王国王都へと侵攻。

サフィルス王都は陥落し、女王オディリアと第二王女アルテミジアは惨死。第一王女の顛末は今も分かっていない。

それから十年後――

サフィルス山間部の小さな村に、サフィルス国宝〝炎の紋章〟を持つ娘の姿があった。

娘の名はユーディト、かつて従騎士と共に王都を逃げ延びたサフィルス第一王女その人である。

共通歴２７８年、秋。

止まっていた歴史の針は動き出そうとしていた。

続きのシーズン２はコチラ↓【ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２１３１５４／】

こちらの作品群はいわゆる「僕の考えたファイアーエムブレム」になります。

小説の内容として以下の内容を含みます。苦手な方は閲覧の続行を推奨しません。

・殺人、戦闘、暴力、死亡描写などのショッキングな描写

・性描写に関する間接的表現

・異性愛・同性愛に関する描写

※※※当作品をダシにして、本家シリーズや本家キャラクターを批判することは絶対におやめください。そういった趣旨の作品ではありません。※※※

長々とした注意書きを読んでくださってありがとうございます。

シリーズを知ってる方も知らない方も、本編をお楽しみいただければ幸いです。

※ｐｉｘｉｖとの同時投稿です。設定資料集などもあります。

誤字修正とかの都合上、ハーメルンは一週間遅れでの更新となります。

リンクはコチラ↓【ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／ｍｅｍｂｅｒ_ｉｌｌｕｓｔ．ｐｈｐ?ｍｏｄｅ=ｍｅｄｉｕｍ&ｉｌｌｕｓｔ_ｉｄ=７３７２４４０４】

目次

序章 introduction 1
1章 phantom quartz 20
1幕 24
2幕 30
3幕 35
4幕 42
5幕 46
6幕 50
2章
1幕 54
2幕 60
3幕／幕間 65
4幕 71
5幕 74
6幕／幕間 79
7幕 84
8幕 90
3章
1幕 94
2幕 100
3幕 106
4幕 112

5幕 121
2幕／幕間 126
3幕／幕間 130
6幕 134
7幕 144
7幕幕間 147
garden quartz 150

序章

introduction

エルツ大陸　年代史

■最古の記録

現存する最古の記録の段階で、エルツ大陸には「竜族」「人間」「鉱人」の三種類の陸棲人型種族が存在したと記されている。それ以前のもの、人型種族の発生理由などは不明。

■共通歴より数４００年前

闘争本能の強い「竜族」が覇権を握り、他種族への攻撃と同士討ちを繰り返す。それに伴い元々少数であった「竜族」の個体数が著しく減少。

■共通歴より３９４年前

竜族の青年・銀竜アルギュロスが自身の力に飲まれ巨竜と化す。その際に竜族はアルギュロスの兄・紅竜バイルを除いて全員殺害・及び死亡する。

紅竜バイルの呼びかけにより、対アルギュロスの戦力として人間の女剣士サファイア、鉱人の大魔術師フェイツェイが集う。

三人によりアルギュロスは討たれ、死してなお残された力は三つの宝玉に封じられる。

宝玉はその内に淡い炎のような燐光を宿し、〝炎の紋章〟と呼ばれた。

バイル・サファイア・フェイツェイはその功績から「三英雄」と呼ばれ語り継がれることとなる。

■共通歴　１年

バイル・サファイアは婚姻関係を結び、その間に生まれた双子の兄妹が国を興す。

兄ヴラドは北西にルベウス帝国を、妹セントレアが北東にサフィルス王国を建国し、
同時期にフェイツェイも南部にリウスイ連合を結成する。
この三国建国を節目に「共通歴」として暦が制定された。
〝炎の紋章〟は各国の統治者が一つずつ所有し管理することとなる。
バイルはサファイアが病死した後、隠居していたがいつしか姿を消す。
フェイツェイは5人の夫と沢山の子供達に看取られて、天寿を全うした。

■共通歴２４８年
鉱人ミサキがリウスイ連合の首領として着任。

■共通歴２６５年
サフィルス国王ユーセが病で死去。その王妃オディリアが女王として即位。
ルベウス国内の鉱人の街で大規模な民族紛争が発生。

■共通歴２６６年　1月
ルベウス王女カサンドラ、双子の兄妹を出産するも出産後に死亡。
兄はシャルル、妹はキルシーと名付けられる。

■共通歴２６８年　2月
ルベウス帝国皇帝オルヒ、自身の管理していた〝炎の紋章〟を用いて〝巨竜〟と化す。
オルヒは帝都を蹂躙し、国境線を超えサフィルス王国へと向かったが、サフィルスの王都の目前にして三国連合軍により討伐される。

■共通歴２６８年　3月
オルヒの死に伴い、その孫であるシャルルが皇帝に即位。

幼い次期皇帝を補佐する目的で「議会」が発足。
リウスイの協力のもとルベウス、サフィルス両国の復興が進められる。

――共通歴２６８年　４月

母の部屋には大きな肖像画がある。まだ結婚したばかりの父と母の絵だ。画家の腕が良いのだろう、ぎこちない顔の母と、穏やかに微笑む父の顔がまるでそこにあるように描かれている。絵の中の母は今より少しだけ若く、また父は、病に倒れて世を去る前の姿でそこにあった。
その絵の下で、母・オディリアは剣を差し出した。鞘には息を飲むほど繊細な美しい装飾が施されている。両手で受け取ってもそれはずっしりと重い。
「こうやって手に取るのは初めてでしょう？　〝炎の紋章〟と並ぶ我が国の至宝、竜殺しの宝剣〝ベトリア〟――今からこれは貴女のものです」
背の高い母は身を屈め、視線の高さを合わせると、ユーディトの髪に触れ、頬に触れ、目を細めた。
「年々お前は私に似てくるわね。でも、目だけはあの人の色だわ。ああ、ユーディト――本当はこのようなことは知らない方が良いことなのです。でも貴女は王族の女……いえ、王たる女になる者として、知らなければなりません。武器の重さとは、それによって奪われる命の重さなのです。それを忘れた時、我々はただの人殺しに成り下がる。そうなってはいけません。ゆめゆめ、忘れないように。良いですね？」
「はい、母様。我が血筋とこの剣に……誓います」
ユーディトがおずおずと返事を返すと、母は穏やかに微笑んで立ち上がる。
窓の外を鳥が飛び去って行く。春の日差しは柔らかく部屋の中を

照らし、二人の影を床に淡く落としていた。

城のあちこちを騎士達が行き来していた。物資を詰んで出て行く部隊は、隣国ルベウス帝国へ復興支援へ行く者達だ。

ルベウス皇帝の乱心の理由は定かではない。

少なくともユーディトの耳には、皇帝は乱心し〝炎の紋章〟を用いて竜になり、帝都を蹂躙し国境を超え、サフィルス王国の王都目前で討伐された……といった旨が届いている。あの日は城から外に出ないよう言われていた。ルベウス皇帝は厳格だったが、それだけではなかったことをユーディトは知っている。厳しくも優しい王だった。それが何故……と思ったことは一度や二度ではない。ルベウスは、まだ幼い皇帝を補佐する為の新体制がこの間出来上がったばかりだ。国の安寧の為にも今はサフィルスの支援が必要だろう。

足早に歩くユーディトの姿を見ると、騎士達は一斉に足を止め剣を捧げた。こちらも立ち止まり、「ルベウスの人達を頼みますね、皆さん」と声をかけた。列を過ぎ去って、離宮へと続く石畳と石柱の渡り廊下へと向かう。ちょうど、よく顔を知った女中の姿があった。

「グレーテル、シャーロックを知らない？」

「シャーロックでしたら、アルテミジア様に手を引かれて裏庭へ向かわれたのをお見かけしましたよ」

「そう、ありがとうグレーテル」

彼女の手に飴玉を押し付けて立ち去る。渡り廊下を横切って、蔓薔薇の垣根とアーチを抜ければ、裏庭はすぐそこだった。

裏庭は今も、かつて父の好んだ花が植えられている。表の庭園は、父が母のためにと母が好きな花ばかりを植えたのだ。王なのだからここは貴方が選ぶものにすべきだ――と母は父に言ったらしいが、父は首を縦には降らず、裏庭に自分の好むものを揃えた。

華やかな花よりも、素朴な花を好む人だった。背の低い茎の先には落ち着いた色合いの小ぶりな花々が咲き、春の日差しとそよ風を受けて僅かに揺れている。様々な色の花が咲き乱れているが、乱雑だとか

雑多だとか、そういった印象は受けず、不思議と纏まっている。大きな針葉樹の根元で、黒麟の騎乗竜が花を食べていた。彼女――モリオンがいるということは、騎手も近くにいると言うわけであって――

「シャーロック、探したよ」

綺麗に刈り揃えられた芝生に腰掛ける背中に向かって声をかける。振り向き、こちらを見た金色の瞳が驚きに揺れた。

「これはユーディト様、失礼を――」

「いい、そのままで。寝かせておいてやって」

シャーロックの膝に頭を預けて、妹姫のアルテミジアが眠っていた。妹姫は膝でお昼寝中、しかし主人は従者を探し回っていた……となれば真面目な彼は気が気でないかもしれない。そう言ってやれば彼は申し訳なさそうな顔をした。

「……なぁに、その頭は。はははは」

ユーディトは、彼の紫色の髪から伸びる紫金水晶の角に、色とりどりの花とリボンが飾られているのに気付いて、思わず声を出して笑った。彼は鉱石の角を頭部に持つ〝鉱人〟で、鉱人の女性は自らの角を装飾品で飾ることもあると聞いている。今の彼の角はまさにそのような状態であった。勇ましい雄鹿のような角は随分と可愛らしくなってしまっている。

「これはアルテミジア様が……。今日風呂に入るまで取ってはいけない、と」

「じゃあそうしているんだな。お前の主人は私であれ、アルテミジアとて一国の姫君。騎士のお前は命に従わなければ」

「言われずとも。アルテミジア様から花を頂戴する機会など、願ってもみないことです」

「……お前は本当につまらないくらい真面目ね」

相変わらず堅物な男だ。元々、彼は三年前に起きた鉱人同士の内乱で落ち延び、文字通り流れ着いた異邦人だ。肌の色は少し日に焼けていて、色白が多いサフィルスでは少し目を引く。砂浜で倒れていた彼をユーディトが見つけ、それ以来シャーロックは恩義を感じて側にいる。

そんな経緯を差し引いても、彼は良くも悪くも生真面目だ。遊び心がない、とも。無邪気な妹には振り回されてばかりいる。妹は楽しくて振り回しているようだが。

「ユーディト様、私にご要件があったのではありませんか」

「あったけど……アルテミジアが寝ているから。母様から〝ベトリア〟を授かったの。剣の相手をして欲しかったのだけれど。今日じゃなくてもいい」

「それは……おめでとうございます、ユーディト様。王妃様もお喜びでしょう」

「大がかりな儀式もなしにいきなり渡されたの、びっくりしちゃった。まぁ、母様はそういうのはあんまり好きじゃないし。お金も時間もかかるから」

ああ、そう言えば――とユーディトは母から受け取った言伝を思い出した。

「母様が今日の職務を終えたら来るようにって。確かに伝えたから――じゃあ、その子を頼むわね」

妹は熟睡していて起きる気配がない。彼はしばらくこのままだろう。目覚める頃には足が痺れて立てなくなっているかもしれない。多少同情の念を覚えながら、ユーディトは裏庭を後にした。

月光に映し出される女王オディリアは背筋に寒気を覚える程美しい。毛先にいくにつれ青から淡い色に変わる髪は流水のように肩を流れる。伏し目がちではあるが、その瞳に憂いはなく、強い光を湛えていた。

「貴方にこれを」

王族しか入れない宝物庫に通された時点で薄々勘付いていた。祭壇に安置された箱は豪奢な装飾が施されていたが、鍵は飾り気がなく、ごくありふれた鍵に紛れたら見失ってしまうだろう。

「お分かりですね。我が国、いえ――サフィルス、ルベウス、リウスイ三国の至宝が一つ〝炎の紋章〟。合鍵を貴方に託します」

「畏れながら女王様」

身に余るものだ、とシャーロックは言った。姫の従騎士であれど自分は余所者であるのだ、と。すると女王は、細い眉を少し顰めた。
「貴方を余所者だと思っているのは貴方自身ぐらいなものです。口を慎みなさい、シャーロック。私が許すと言っているのです。私に何かあったら、至宝と娘達を……いえ、どちらか一人だけでも構いません。どこまでも逃げて、生き延びて欲しいのです。貴方の選択を私は咎めません。誰にも咎めさせたりはしません。我が血筋と先王に誓って」
そう言われてしまえば首を横に振る訳にもいかなくなる。
女王はしばらくその紅い瞳でシャーロックを見ていたが、何かを思い出したのか、再び口を開いた。
「シャーロック。貴方には姉がいた、と聞きましたが」
「はい。内紛の折に別れて、それきりですが」
「……先日ルベウスを訪れた際に、皇帝陛下の乳母で、従者であるという女性を遠くから見かけたのです。貴方のように少し日に焼けた色の肌で……鹿のような紫金水晶の角を持っていました。貴方の姉君も？」
女王の口から意外な言葉を耳にして驚いた。内紛からまだ三年、だが随分と時間が経ったような感覚がある。最後に見た姉の記憶は、砲撃を受けて大きく傾いた船の上でのものだ。舟に乗っていたのは大半が女子供で、魔術に長けた自分は彼女達の守りを任されていた。何の役にも立てないまま荒れ狂う海に投げ出され、赤子を抱いていた姉は手を伸ばすことも出来ず、ただ金色の瞳を見開いて自分を見ていた。
「はい。私の姉も同じ角を持っています」
「……次にルベウスに赴く時、貴方の話を出来ないか取り計らってみます。近しい者と共に在れないのは辛いことです」
「お心遣い痛み入ります、女王様」

「姉様、シャーロックを知らない？」
編み籠を腕に引っかけたアルテミジアと廊下ですれ違った。籠の

中には野菜やフルーツを挟んだパンが入っている。
「訓練場じゃないかな？　そろそろ午後の訓練が終わるから行ってみるといいわ」
「私ね、グレーテルとパンを作ったのよ。彼、いつもお腹を空かせているから差し入れに持って行くの！　……ああ、訓練なら他の皆の分もいるのだわ。きっと足りないからもっと作って来なきゃ！」
鉱人は角に栄養を取られる分、筋肉が付きにくい体質をしている。その一方で人間には扱えない魔法が使えるのだが、あの生真面目な従騎士は、凄まじい鍛錬と食事の摂取で武術と魔法の両立をやってのけているのだった。
妹はぱたぱたと慌ただしく駆けていく。その背を見送りながら、ユーディトは一人裏庭へ向かった。
世話焼きの妹はシャーロックだけでなく他の騎士達を、城で働く者達を、そして国民を平等に愛し、愛されている。次の王は年齢的にユーディトではあるが、ただ母の背を追うことしかできない自分には正直なところ荷が重い。誰からも愛され、共に支え合って生きていけるだろう妹こそが、王位に相応しいとさえ思っていた。では、自分は？　――そう自問自答して出した答えがこれだ。
鞘から宝剣を抜いて構える。歳の割に背は高いユーディトだったが、それを差し引いても刀身の長い剣だ。刃は片刃で、長さの割に薄く思えた。白銀の輝きを放ち、僅かに湾曲した切っ先は鋭い。かつての英雄はこの剣で、強靭な竜の鱗さえも容易く切り裂いたという。今までユーディトが使っていたのは刺突に向いたレイピアだ。それとは比べ物にならない程重く、構えるのも覚束ない。これを使うのであるならば、立ち回りを変えなければならないだろう。
慣れなければ、と思った。自分はアルテミジアの側で彼女と国、そして人々を守りたい。それには力が必要だ。

気が済むまで素振りをしていれば、いつの間にか日が随分と傾いていた。何やら城の中が騒がしい。通りがかったグレーテルを捕まえ

て話を聞いた。彼女は、「ああ、姫様……！」と悲壮な声を上げる。
「女王様のところへ。ルベウスへ支援に行った騎士達が……飲み水に毒を盛られて……！」
「毒？　どうして毒なんか――」
「――姫様、お下がりください！」
　彼女の視線が上空に向けられる。無数の竜騎士が飛んでいた。大きく旋回し高度を落として接近している。赤を基調にした鎧はルベウスの――何故だ。ルベウス帝都は先の皇帝の乱心で壊滅状態だ。軍を展開することなんかよりやるべきことがある筈だ。それが、何故。
　グレーテルが前に飛び出し、魔道書を構えた。吹き上がった風が彼女の帽子を飛ばし、青瑪瑙の角を露わにする。さらに高度を落とした竜騎士の群れに、烈風が吹き荒れて隊列をかき乱した。気流を乱されて体勢を崩した数騎はそのまま裏庭の方に墜落していったが、やり過ごした数機は依然とこちらに接近しつつある。
「早く城の中へ！」
　グレーテルの声に急き立てられ、一番近くの扉に飛び込んだ。感情が押し寄せてきて飽和する。サフィルス王国騎士団の多くは、ルベウスの復興支援の為に出払っている。故に、今この城は手薄だ。母様は？　アルテミジアは――真っ白になりかけた頭に無数の足音と剣戟の音が届き、皮一枚で理性を繋ぎ止める。戦いが城の内外で始まっていた。

　血の匂い。煙の匂い。人の悲鳴。そんな異物はこの城には今まで存在していなかった。切り裂かれたタペストリーの下で、給仕の少女が斬り殺されていた。階段の上から下まで血を引きずって、いつも裏庭を手入れしてくれる庭師の男は、あらぬ方向に手足を曲げて伏していた。王座へ向かう道には折り重なって騎士達が死んでいた。ある者は背中に矢を生やし、またある者は正面から斬りつけられ仰臥している。あまりの凄惨な状況に二の足を踏むのを躊躇う。花瓶に生け

られた花は血を被って赤い雫を滴らせていた。美しい天窓から差し込む夕刻の仄かに朱を帯びた日差しは、流れる血の赤をより濃く鮮烈な色彩で浮かび上がらせる。

「ユーディト！」

母の声がした。兵士が切り捨てられ、王座の低い階段を転げ落ちる。母は剣を構え、取り囲む数人を鋭い眼差しで睨め付け、その気迫だけで怯ませていた。

「アルテミジアはどこへ！」

分からない、私も探しているの――と口を開こうとした刹那、バルコニーに竜騎士の影が降り立った。返り血を帯びた赤の鎧――ルベウスの徴が刻まれた鎧の男は、バルコニーの扉を蹴り開けた。短い鳶色の髪をした若い男だ。アルテミジアの襟首を掴んでいる。

「姉様！母様！助けて！やだ、やだ！」

男は無造作に妹を放り投げて肩を踏みつけた。

「いや、いやよ！姉様！姉様！ねえさ――」

斧が振り下ろされる。切り落とされた頭が転がって、柵の間を通り抜けて落ちた。ユーディトの悲鳴をも掻き消して、オディリアの絶叫が響く。その瞬間、オディリアは女王ではなく一人の母であった。その刹那が、彼女の弱みになった。妹の首に駆け寄ったオディリアの背中を剣の切っ先が薙いでいった。美しい髪が天を衝くように広がり、黒を纏う肢体が頽れる。

母は地に伏せながら天を仰ぎ見た。見開いた紅い瞳には底知れぬ憎悪と憤怒が宿っている。その猛る紅はこの世のあらゆる業苦を寄せ集め、燃やした炎より赤く激しいものであっただろう。母のそんな顔は今まで一度も見たことがなかった。

その眼差しに応えるように、黒竜に跨る騎士が天窓をぶち破って降り立つ。降り注ぐガラス片にも傷一つ付かない黒麟と、谷間に咲く山菫のような紫の髪もまた血を浴びていた。彼は金色の目で周囲を見渡し、口元を引き結ぶ。そして動けずにいるユーディトの元へ向かい愛竜を駆った。

彼が何をしようとしているのかは自ずと分かった。ユーディトを

片腕で抱え上げ、シャーロックは竜を駆り割れた天窓から飛び出した。開けた視界に夕刻の陽がぎらついている。
「止まると撃ち落とされます。しっかり掴まっていてください――行きますよ」
有無を言わさずに竜は飛び立つ。斜陽を受けて疾駆する竜を追って、幾度も弓矢が放たれ、追っ手が差し向けられたが、その何れもが二人を止めることは出来なかった。
やがてその姿を彼らは見失った。

どれぐらいの時間が経っただろうか。それは永遠に続くかのような感覚だったが、木の葉の擦れる音でユーディトの時間は再び動き出した。日は落ち、強い風に吹かれる雲の切れ間からは時折月が見え隠れしていた。
深い森のようだ。騎竜の翼であれば数刻でもかなりの距離を行けるであろうが、ここがどこなのかは分からない。途中で大きな滝のそばを通って水飛沫がかかった記憶があるが、それだけで場所の特定が出来る筈もない。宝剣を抱えたまま、振り落とされないようにしているのがやっとだった。モリオンは木の頂点が触れるか触れないかの高さを器用に滑空していたが、徐々にその高度をゆっくりと下げていった。木々の切れ間に潜り込むように彼女は降下する。接触してへし折れた小枝や木の葉が礫のようにぶつかってきた。
翼を広げて彼女が地に降り立つと、手綱を握っていたシャーロックの長身が鞍の上から滑り落ちた。受け身も取らず、操り人形の糸が切れたように転がる肢体を目の当たりにして、背筋が冷たくなる。抱えていた剣を放り出して、ユーディトはシャーロックに駆け寄った。
左肩と背中に矢が刺さり、右の角の半分から上は欠けていた。鉱人の角が、自然な生え変わりを待たずに折れた時の痛みは失神する程のものであるという。服を黒く染める血は返り血だけではなかった。こんな状態で飛び続けて来たのか……と、胸が痛む。名前を呼んで揺り動かしても、微かな呻き声が返ってくるだけだった。モリオンも騎

手の異変を察知したのだろう。小さく喉を鳴らしながら頬に頭を擦り寄せている。いつ彼が負傷したのかは定かではないが、凄まじい精神力と執念にも近い忠誠心だ。それに比べて私は――

森の中を風が吹き抜けていく。その中に一際大きな葉擦れの音が聞こえた。追っ手か――いや、動物かもしれない。ユーディトは放り出した剣を拾い上げた。何にせよ自分を守ってくれる人はいない。右も左も分からない闇の中であったが、ただそれだけが心の中で埋み火のように、紅く火を燃え上がらせていた。

「モリオン、シャーロックを頼むわ」

そう小声で呟き、音の方へ接近する。

駆けて来るのは二人の子供だった。鏡写しのように同じ背丈に同じ顔――おそらく双子だろう。暗闇の中に淡い色の髪と、色違いでお揃いらしき服が僅かに見てとれる。

すぐさまもう一つの音が続き、次に表れたのは剣を持った軽装の鎧姿の男だ。男は双子を見、無精髭の生えた口元を笑みの形に歪ませた。片方が脚を縺れさせて転倒し、もう片方はそれを引き起こそうとしている。二人に夢中で、こちらには気付いていない。二人は怯えていた。妹の無邪気に笑う顔と、泣き叫んだ最期の顔が脳裏にちらついた。

――あれを殺さなければ、と思った。

指先まで行き渡った激情が身体を突き動かす。本当の意味で人を斬ったことはない、だがやり方は分かっている。簡単だ。訓練で禁じられていることをすればいい。

鞘を投げ捨て、剣の重さに振り回されるようにして叩きつけた一閃は、男の肩から腰までを袈裟に切り裂いた。切っ先が掠めたくらいの手答えしかなかったが、竜の鱗すら切り裂いたという伝承が現実であった、と信じ込ませるには十分な斬れ味だった。おそらく何が起こったかも分からなかっただろう。男が膝を折り、顔から突っ伏して崩れ落ちた。

双子は身を寄せ合って震えていた。ユーディトは剣を血振りして納め、近くの木に立てかけると、双子の側に寄った。

「……君達はどこから？」
「お家は王都だよ」
「悪い人たちが入ってきて」
「馬車に入れられたの」
「他にも子供がいっぱいいた」
「逃げられたのは僕達だけ……」
　双子は交互に言った。混乱に乗じたのか、あるいはそれも目的の一つであったか――双子の言葉から察するに人買いまで出張って来たようだ。城だけでなく、王都もおそらく混乱状態なのだろう。今ここで確かめる術はない。王都の状態も、母の無事も――母はどうなってしまったのか。妹は――妹はもう――
　今更になってやっと感情が追いついた。嵐が過ぎ去った後のような心のしじまの中に、悲しみが取り残されてゆっくりと溢れ出してくる。
「おねえちゃん、どうしたの」
「泣かないで、もう悪い人はいないよ」
　双子が心配そうに顔を見上げている。しばらくユーディトは声を殺して泣いた。

　王都が侵攻された、という初報からまだ一日も経っていなかった。王都陥落の報せは、山間の平穏な小さな村をも大きく揺るがせた。そんな嘘よ、王女様達は、この国はどうなるんだ……といったどよめきが集会所に瞬く間に広がっていく。とにかく引き続き見張りを続けよう、と年嵩の村長が言った。
「先生、出発はまた日を改めた方が良い。寂れたところですから、ルベウス兵が大挙してくることもないでしょうが、何が起こるか分かりません」
「……そうですね。ではお言葉に甘えて。お心遣い痛み入ります、村長殿」
「引き続き客間を使ってください。困ったことがありましたらどうぞ

遠慮なく」
一箇所に留まることを出来る限り避けてはいるが、今回は仕方がない。お節介焼きの性分から、あちこちを旅医者として巡る日々を続けてはいるが、流石にこういった事態に首を突っ込むのは身に余る。昔のように無茶ができる程若くもない。
「先生！　先生はまだいらっしゃいますか？」
「私ならここにいるよ、ゴテル。どうしたんだい」
不意に表が慌ただしくなる。自分が呼ばれたということは、自ずと何があったのかは限られてくる。村長宅の女中である老女に、旅の荷物を客間に運んでもらうよう頼むと、診察用の鞄だけを手にして表に出た。
人集りが割れる。そこには身なりの良い一人の少女と、顔の同じ二人の子供、そして村の若い衆に抱えられた若い鉱人の男がいた。男の片方の角は折れ、肩と背中には矢が刺さっている。如何にも逃げ延びてきた、といった風体だ。
「――ありがとう。後は私が引き継ごう。構いませんね、村長？」
厄介ごとに巻き込まれる可能性があるがよろしいか。
そういった意味を含めて村長に尋ねる。最も、首を横に振らせるつもりは毛頭ないが。一番近い医者が山を越えた先の村だ。診察費は受け取らない代わりに、食事付きで宿泊させてもらう、という破格の値段で請け負ったのだ。これで拒むような輩は余程の恩知らずだろう。
「……ええ、構いません。誰が見捨てることなど出来ましょうか」
辺境の村ではあるが、この村の人々は偏屈にはならず開放的で優しい住人ばかりだ。そう言ってくれると思っていた。杞憂で済んだ。

白に近い銀髪をした双子の子供は、診察の途中で疲れたのか眠ってしまった。二人はどちらがどちらなのかは分からないが、ユーリシュカとムネモシュネと言う名で呼び合っていた。二人共疲労だけで怪我はしていなかった。少女は腕を捻っていたが軽傷。青年は重傷だ

が、一命は取り留めた。王都から逃げ延びてきた貴族と、その従者であるという。
「君も休みなさい」
青年の眠るベッドの側に椅子を置いて腰掛けていた少女はこちらを見た。その眼差しは疲れ切ってはいるが、鮮やかな青玉のような瞳は濁っておらず、その内に炎を宿しているように猛っている。遠い記憶の中、薄れてはいるがまだ消えてはいない面影が脳裏に蘇る。
「……私の顔に何かついていますか？」
「おっと、これは失礼」
つい、じろじろと見てしまった。
「先立たれた妻の若い頃にそっくりだったものだから」
少女は少し不思議そうな顔をしたが、自分の耳の後ろから生える角を見て納得したようだ。『鉱人ならば見た目と年齢が一致しないことも珍しくない、この医者の男は年寄りには見えないがそんな歳であるのだろう』――と、さしずめこんなところか。
「彼は私が見ているよ。目覚めた時に君が疲れた顔をしていたら、彼は辛いだろう？」
「……どうか、よろしくお願いします」
椅子から立ち上がり、少女は深々と頭を下げて部屋を出て行った。貴族の娘――彼女がそう言っているのだからそういうことにしておこう――が頭を下げるなんて由々しき事態ではあるが、そんなことを彼女は気にも留めないだろう。
やはり妻に良く似ていた。
だが瞳に宿る炎は酷く不安定で、一度大きく燃え上がってしまえば二度と消えないような――そんな秘められた激しさを持っていた。
「――ああ、始まってしまうようだ。サファイア、フェイツェイ……分かっているよ。僕は見届ける。この呪いのような永い命はきっとその為にあるのだから」
男は記憶の中の妻と友にそう語りかけた。
夜はじきに開けようとしている。

■共通歴２６８年　４月
ルベウス、サフィルスへ侵攻。王都へ進軍しこれを陥落させる。
サフィルス王族は王女ユーディトが生死不明、残りは全員死亡。
王都はルベウスに占領される。
リゥスイは戦乱に伴う王都の難民の受け入れを優先して執り行う。
■共通歴２７４年　１２月
皇帝シャルルの妹、皇女キルシーが事故により昏睡状態に。
■共通歴２７５年
皇帝シャルル暗殺。
意識不明のキルシーに変わり「議会」が代理で政治を執り行うこととなる。

――共通歴　２７８年　１０月

瀑布が轟々と音を上げている。流れ落ちる水は月明かりに仄かに白く浮き上がっていた。
――今日は誰も来ない。最も、誰も来ない日の方が多いのだが。一番近い医者が、山を越えた先にあるぐらいの辺境の村だ。山賊ですら滅多に来ることはない。来たところで、村の住民達はそれに気付きもしないだろう。今までそれらを全て、自分達が葬って来たのだから。
深い森は風を受ける度に騒ついて、急き立てるように四方八方から音を立てる。慣れていない者ならば、自分がどちらから来たのかを見失ってしまいそうだが、十年という歳月は、闇の中の陰影を見極めて道に迷わずに帰ることが出来る技量を身に付けさせていた。
もう帰ろう、と腰に下げた剣の柄に置いていた腕を下ろす。風が強くて少し寒いぐらいだ。相方が遠出中で、どこか暇そうなユーリシュカに声をかけたら酒に付き合ってくれるだろうか……と考えた。

そんな他愛もない、穏やかな考えを巡らせたばかりだったが、森の木々が立てる音の中に異音を捉えて、一度降ろした腕をまた剣の柄にかけた。ザラザラと小石が転がるような音を余韻に引きずって、斜面を誰かが滑落していた。投げ出された身体が地面に転がる。剣に手をかけたままで近付いた。

旅人にしては身なりが綺麗だと思った。滑落中に壊れたのだろうか、背負った箱の割れ目から弦楽器らしきものが覗いている――吟遊詩人か。

「近くの村の者だ。大丈夫か？」

若い男は呻いていた。助け起こそうとして息を飲む。袈裟に斬られていた。彼が滑り落ちてきた斜面には血が伸びた跡が残っている。転落による怪我よりこちらの方が余程重傷だ。腰に巻いた帯を解いて傷口に当てがうが、応急処置ではどうしようもないように思えた。村に戻れば杖で治癒術が使える者がいる。それまで保つかは分からないが、このままにはしておけない。

男を抱えようと腕を伸ばすと、彼はその腕を掴んだ。瀕死の身体のどこにそんな力が残っているのかと思う程に強い力と、強い眼差しをして、こちらを見ている。

「連れがまだ、森の中に……追われて、いるんだ……早く……あの子、は……目が……」

手が滑り落ちた。天を仰いで沈黙したまま、それきり男は息をしなくなっていた。最後の力で自分に何かを託そうとしたその目を閉ざしてやる。

……人を殺すことを厭わない者が森に紛れているようだ。

ならば生かして返す訳にはいかない。

何かが紅く発光している。その光に向かって弓を構えている者がいた。

光と射手の間に割って入り、放たれた矢を叩き落とす。顔を隠すように外套を目深に被り、口元までを布で覆い隠した男は、すぐさま弓

から短刀に持ち替えてこちらに接近しようとしていた。だが、闇の中に目を凝らし、鋭く睨めつけた眼差しに射抜かれ、男は気圧されるように身を強張らせる。接近し、空いた腹に向かって蹴りを繰り出す。薮を突き抜けて男は吹き飛び、そのまま崖の下まで吸い込まれていった。叫び声の一つでも上げたかもしれないが、滝の音に掻き消されたのか何も聞こえなかった。

辺りに敵の気配がないことを確認し、光の元へ戻る。少年がいた。手探りで地面を掻いている。その指先が紅い発光体に触れ、手繰り寄せると、少年は安堵したように小さな溜息を吐いた。燐光を内に秘めて輝く〝それ〟を自分は知っていた。あの日忠臣が持ち出して、今は自分が有している〝それ〟を。

「――待て。何故それをお前が持っている」

剣を突き付けて低い声で問いかける。少年は薄目を開いてこちらを見た。その目線はこちらに向いてはいるが、何も写してはいない――盲目であるらしい。男が「目が」と言っていた理由はこれか。

「……貴女はこれが何なのか分かる。だからそう聞いたんでしょう？」

そう言われてしまえば言い返す言葉もない。威圧的に聞いた手前、どう反応すべきか戸惑っていると、少年は「貴女も持っていますね」と澄んだ声で言った。

「〝炎の紋章〟が熱を帯びて共鳴しています」

剣を握る手に力が入った。それを耳聡く察知したのか少年の顔が少し曇る。

「その剣で僕を斬るならどうぞお好きになさってください。ですが……僕の話を最後まで聞いてから、どうするか決めた方が良いと思います。

――僕はシャルル。ルベウス帝国皇帝です」

「皇帝シャルルは死んだ筈だ」

「貴女と同じですよ、僕はひっそりと逃げ延びた。最も、先程の追っ手は僕が誰だか分かっていたようですが……。僕は貴女をずっと探していた」

「私を――？」
「――取引をしませんか、サフィルスの王女ユーディト様」
久しくその名で呼ばれた。その懐かしい響きは郷愁と、今も夢に見るあの日を、夕陽より赤く染まった王座の色を脳裏に鮮やかに蘇らせる。胸の奥深くに埋もれていた火が、再び炎を宿したのを感じた。
「貴女が国を取り戻す為の支援をさせていただきます。その見返りとして、共に戦ってはいけないでしょうか。
僕は、誇り高きルベウスを取り戻し、再び貴女と、そしてサフィルスと肩を並べて歩んで行ける日々を望んでいます」

phantom quartz

身体中が熱を帯びて痛みを訴えている。特に角が、焼きゴテを押し付けられているように灼熱し、心臓の鼓動の度に今まで感じたこともない程の激痛を齎していた。滑り落ちた汗が、寝台の上に滴り落ちて染みを作る。

「……おや、もう少し気を失っていて貰えると良かったんだけれども」

背中に怪我をしたせいかうつ伏せに寝かされていた。手をついて起き上がろうとしたが制された。何にせよ、そうするだけの力も入らない。自分の身体だというのに、うまく動いてくれない。それが屈辱でならなかった。

「……姫様、」

掠れた声でその名を呼ぶ。すると男の声が応えた。

「君の剣姫様は無事だよ。ここは山間の小さな村だ。今のところ、追っ手は来てないね」

この悠長な喋り方をする長身の鉱人は医者らしい。痛みと後悔に侵された思考でそう考えた。

「……お側にいなければ……姫様が、きっと……一人で……たった一人で……」

その先の言葉に詰まる。一人でも連れ出せ、と。あの美しい女王は言った。その選択を誰にも咎めさせはしない、と。だがシャーロックは後悔していた。誰も咎めてくれないのならば、自分がそうするまでだった。

――何故、全員を助けられなかった？

「止しなさい。ああ、これだから騎士って奴は……。ほら、治療をするよ。矢を抜くから腹を括って。いくよ」

腹を括る間も無く、左肩に突き刺さっていた矢が引き抜かれた。堪え切れなかった呻き声が喉の奥から漏れ出るが、叫び声を上げることはしなかった。目の前が一瞬、暗くなった。

「声を堪えなくていい。叫んだって別に構やしないよ。次のはさっきのより深いぞ」

沈黙を返す。この痛みなど、一人残された姫君の心の痛みに比べたら小さなものだ。主を差し置いて痛みに屈することなど、騎士の矜持が許さない。
「気持ちは分からないでもないなぁ。その心意気は買うよ、雄鹿君」
男はさも面白いようなものでも見つけた、と言わんばかりに悠然と微笑んだ。その微笑みに僅かに苛立ちを感じたが、激痛に思考が塗り潰されて何も考えられなくなった。

塗られた軟膏に鎮痛か鎮静成分でも入っていたのか、あるいは疲弊し切っているのか、痛みは多少ましになったものの身体が怠い。指一本動かせない程だ。深い眠りの中に沈んで行こうとする意識と身体を何とか動かして、シャーロックは目だけを天井から男へと向けた。
肩までの長さのくすんだ紅の髪。切れ長の銀色の瞳。耳の後ろから伸びる、岩の塊を細く乱雑な形に切り出したような角。何の疑いもなく鉱人だと思ったが――どうも違和感を覚えた。何が、とは言えない。強いて言うなら勘だ。
「あんた……」
「ああ、僕の角かい？　そうだよお仲間だ。君は角も顔も男前だ、羨ましいな。僕のは石灰質でね、ちょっとばかし不恰好さ」
「鉱人じゃ、ないな……？」
男は答えずにただ笑った。その含みのある笑みを見たのを最後に、瞼を開けていられなくなって、視界が閉ざされ、意識が闇へ落ちていった。

浅い眠りから目覚めた時、扉が細く開いていることに気付いた。まだ廊下には明かりが灯っている。こんな状況だから、村の人は寝ずの番なのかもしれない。
細く開いた扉から、双子が覗いていた。
「どうしたの？」

双子は顔を見合わせた後に、何かを言いたげにこちらを見ていたが、言い出せずにいるようだ。おいで、と声をかければ、待っていたとばかりにベッドに潜り込んでくる。同じ顔だとばかり思っていたが、よく見れば緑の服の方が気丈そうな顔立ちで、赤い服の方は穏やかな顔立ちだ。今ははそのどちらも、不安と悲しみをその飴色の瞳に滲ませている。

「角のお兄ちゃんは？」

「お怪我してたの知ってるよ」

「お医者様がついているから、大丈夫よ。少し疲れてるのよ、休ませてあげて。角もまた生えてくるわ」

シャーロックのことを思い浮かべると、もうこれ以上痛むこともないと思っていた胸が、さらに強く痛んだ。治療の間は部屋から追い出されるように退出したが、扉のすぐ近くでずっと、再び部屋が開くまで待っていた。その間、微かに聞こえてくる彼の痛みに震える声を聞いていた。その痛みは自分を守る為に負ったものなのだ、私のせいだ、王女を守るための名誉の負傷なのだ、私のせいだ、彼は誇り高く戦ったのだ――私の為に、と心に刻み付けて二度と消えぬように、ユーディトは自分の腕に爪を食い込ませながら聞いていた。

やがて嵐のようにあらゆる激情が過ぎ去った後に、残された感情は静かな、それでいて激しい何かだった。

その感情の名を、ユーディトはまだ知らない。

「……お姉ちゃんは？」

赤い方が右袖を掴み、

「痛くないの？」

緑の方が左袖を掴んだ。村の人が用意してくれた白い寝間着は、飾り気のない意匠だったが森の中を歩き回り、疲弊したら身体を優しく包んでくれている。

「ええ。大丈夫よ」

「本当に？」

「――ええ。」

腕の中に二人を引き寄せた。心細いのはこの子供たちだけではな

い。名前も分からない感情に苛まれるユーディトも。たった一人戦い抜いて、力尽きて眠りについているシャーロックも。こんなにそばにいるのに。それを癒してくれるものはどこにもない。ただ孤独だけが、夜の深い闇よりも深くそこにあった。

1章
1幕

「おはよう、ユディス」
「ゴテル、おはよう」
　庭の花に撒く水を井戸から桶に汲んでいると、甕を抱えた夫人が横に並び立った。危なっかしい足取りに思わず「……大丈夫か？」と返す。
「ダメだ、ゴテル。知ってるぞ、腰をやったそうじゃないか。どこに運べば良い？　私が持つよ」
　甕をコンコンと拳で軽く叩きながらユーディトは言った。
「お客様をお待たせしてるんじゃないのかい」
「ああ……情報が早いな」
「村中その話題で持ちきりだよ。綺麗な男の子だって？　一緒にいた人はその……残念だったけどねぇ。その子だけでも助かって良かった」
　〝客人〟の連れは村の墓所に手厚く葬った。彼にも帰る故郷があるのかもしれないが、帰してやれないことが悔やまれる。追っ手の方は逃げたと言っておいた。〝客人〟も察するものがあるのか口裏を合わせていてくれている。
「……今は子供達といるよ。後で話をする約束をしてるから大丈夫。少し、村を空けることになるかもしれないな。彼を他の仲間の元まで送ってやらなければならないだろう」
　水の満たされた甕はかなりの重量がある。彼女でなくとも腰をやりかねない。井戸をもう一つ増やすべきだと村長に進言した方が良いだろうか……と考えた。
「すまないねぇユディス。じゃあ畑の方に頼むよ」
　王都から逃れてきた貴族の娘ユディス――そんな仮の名も、偽りの経歴も十年もすれば馴染んでくる。気にしないでくれと微笑んで、ユーディトは甕を担ぎ上げた。

少年は時に優しく、時に力強く、美しい声で英雄譚を歌い上げていた。荒れ狂う竜を倒し、国の祖となった三人の英雄の物語。多くの者が知っている物語であり、村のたった三人の幼い子供達も当然耳にしたことぐらいはある筈だが、語ることを生業としている者の言葉や声には、人を惹きつける説得力があり、魅力がある。彼は吟遊詩人として仲間と各地を回っていたという。例えそれが仮初めの姿であっても、彼の技術は本物だ。自分も思わず聞き入ってしまった。

「――と、剣姫サファイアは、燃えるような恋をしたのです」

「それでそれで？　剣姫さまは幸せになれたのかしら？」

「君達はどう思いますか？」

「剣姫と紅竜はシュゾクが違うんだぜ？　剣姫様の方が先にばあさんになっちまうよ」

「でもおばあさんになってもずっと一緒にいる人はいるよ。うちのおじいちゃんだって、おばあちゃんが若い時から一緒にいるんだよ」

「うん、それは……そうだけどよ……」

「ふふ、そうやって色々考えてみるのも物語の楽しみ方です。では、僕のお話はこれくらいにしておきましょう」

「えーっ?!」

「ごめんなさい。他の用事が入っていまして……」

「でももう少しこの村にいるんでしょう？　また聞かせてよ、吟遊詩人のお兄ちゃん！」

「ええ。僕の歌で良ければいつだって」

子供達は手を振ると、口々に感想を言い合いながら去っていく。彼らが立ち去って暫くした後、盲いた目をこちらに向けて「――貴方もこちらで聞いてくださって良かったのに」と、皇帝シャルルは言った。金糸雀の翼のような眩しい金の髪に、伏し目がちの紅い右目と蒼い左目。何も映してはいない筈なのに、その瞳には強い意志が宿っている。

「……あまり子供達の前で武器を持ちたくないので」

「心配せずとも大丈夫ですよ。僕は自分の身一つ、自分で守れぬ身ですから」
剣をいつでも抜ける体勢でいたが、それさえも気付かれていた。まだ十二歳であった筈だ。彼は落ち着き払い、風格のようなものさえ漂わせている。ユーリシュカの動揺さえも感じ取られている気がして、ならばどう気取ろうと無駄だな……と浅い溜息を吐いた。
「貴方を疑っている訳ではありませんが、村に何かあったら困るので」
「ごもっともです――ああ、貴方の主殿が参られたようですよ」
ユーリシュカが足音と人の気配を察知出来たのは、彼が先にそう言ってからのことだった。
「子供達はもう戻ったのか？」
主――ユーディトは髪を解きながらそう問いかけた。濃い青から淡い青へと色を変える長い髪が流水のように広がる。「ええ、僕の歌を聴いていってくださいました」とシャルルはにこやかに言う。正直なところ、ユーリシュカはこのシャルルという少年に畏怖のようなものを感じている。平然と会話を交わせる主を少し恐ろしく思った。
「先程の方はご同席されなくてもよろしいのですか？」
「ん……ああ、ユーリシュカか。彼は同席しなくても問題ない。私が決めたことに従うだろうから。困ったことにな」
腕を組んで木に寄りかかる。シャルルは杖を手に悠然と立っていた。元々もっていた杖は、森の中を逃げ回っていた時に破損してしまった。今持っているそれは、「不便だろう」と村の老人がくれたものだ。
「あれも十七だ。他にやりたいことがあるなら好きにすればいい、私に義理立てすることはない……とはだいぶ前に言ったのだがな」
「好きにした結果、貴女のお側にいたいと願ったのではありませんか？」
よく口が立つ少年だ。だがお世辞で言っているようには感じない。悪い気はしないと思ってしまう。「それよりだな」と、話を切り替え

た。
「……昨日の話の続きだ。いくつか聞きたいことがある。君を追っていたのはルベウスの刺客か？　いつ生きていることを知られたか検討はつくか？」
「僕に生きていられては困るのはルベウス……正確には、ルベウスの議会でしょう。議会についてはご存知で？」
「幼い皇帝の補佐役、とは聞いている」
「概ねその認識で間違いありません。ですが、実際に実権を握っていたのは彼らでした。貴女の国に軍を差し向けたのも、僕を〝殺した〟のも彼らです。これは推測ではなく調査を重ねた上での結論です。それと、僕を〝シャルル〟であると認識していたのは、昨夜の追っ手が初めてになりますね」
　シャルルとユーディトが表舞台から消えた後得をしたのは誰か――それを考えれば明確な程に答えは見えていた。
「そうか。君は私を探しているとも言ったな？　どのようにして私を探った」
「髪の色です。貴女はオディリア女王様と同じ色の髪をしていらしたでしょう。僕は朧げな記憶しかありませんが……女王様の髪の色は珍しく、とても美しかったと聞きます」
「珍しいのは否定しないが、他にいないとも限らんぞ。総当たりのようなものじゃないか」
「そうですけど、貴女に辿り着きましたから問題ありませんよ」
　呆れる程の肝の座り方と言うか、気の長さというか。これぐらいでなければ王など務まらないのかもしれないが。
「……刺客が戻らないことを、連中も遅かれ早かれ察する筈だ。それが何を意味するか、分からない程に愚かではあるまい。君に生きていられてはまずい、と追っ手を差し向けるぐらいの知恵はあるようだからな」
　昨夜は勝てた。だがもし次があるのならどうだろう。複数で来られたら？　不意打ちが通用しなかったら？　村人を人質にでも取られたら？　十年間、ひたすら鍛錬ばかりを積んで来た身だ。我流とは

言え半端なものは身につけていないつもりではいるが、事態がどう動くか分からない。
「奴らは君を嗅ぎ付けた。私もまた生きていたと勘付かれる可能性は低くない。女王として振る舞うか、剣の腕が少し立つだけの村娘として片付けるか――何れにせよ、私はこの件に関する落とし前をつけなければならない訳だ」
　結論を急がなければならないだろう。ユーリシュカの他に、別用で今村にはいないムネモシュネとシャーロックにも伝えなければならない。彼らもほぼ間違いなく自分に従うと言うだろうが、彼らに強制するつもりもない。
「君は吟遊詩人として各地を回っていたんだったな。サフィルス国内の様子も見たのか」
「国の様子はどこまでご存知ですか？」
「滅多に村からは出ないし、情報もここまで来ない。王都とその近隣の数領地がルベウス支配下にあると聞いている。民の詳しい様子までは分からん」
「……支配下になっていない場所では、領主様達が上手くやっておられているようです。しかし活気がありません。細々と日々を暮らすのが精一杯のようです」
　サフィルスは王都と、その周辺の数領地に人口が集中している。国土を横断するような大河と大渓谷、そして深い森があり、人の住むところは自然と平地に集中してしまう。それ故に、国土を大規模に侵略されずに済んではいるのだろうが、人の営みがなければ物流が滞り、豊かな生活を営むことは出来ない。
　しかし、王族亡き後、活気は失せても国土全体が荒廃しないのは、ひとえに母と父の治世があったからであると――そう信じたい。
「中には、ユーディト様の生存を今でも信じておられる方もいます。貴女が蜂起すれば共に戦う、という方も。貴女は決して一人ではありません」
「……私に話を持ちかけるだけの理由があることは分かった。だが君は？　君が立ち上がるだけの理由を、私はまだ聞いていない」

シャルルの仄かに薄紅を帯びた唇が引き結ばれ、伏しがちの瞼が大きく開いた。
「……王としての責任感、でしょうか。僕は王として生まれた以上、民を幸せにする義務があります。それを僕は何一つとして遂行できませんでした。僕は今より遥かに幼かった。ですが、お祖父様亡き後の彼らが、良くないことをしようとしていたのは分かりました。……最もらしいことを並べ立てましたが、僕はきっと悔しいのでしょうね」
彼は小さな鞄から〝炎の紋章〟を取り出した。昼の明るい日の下でも、それは仄かに光を帯びているのが見えた。ルベウスのそれは、薔薇の花弁のような鮮やかな真紅だ。
「僕が〝殺される〟数日前、これを密かに持ち出しました。今ルベウスの宝物庫にあるものは、良く似ただの希少宝石です。悔しくて、何とか出し抜いてやりたいと思っての行為でしたが……結果的に正解でしたね。切り札を一つ奪ったのですから」
そうか、とユーディトは短く相槌を打った。彼は歳の割にあまりにも大人びた振る舞いをしている故に、ある種の異様ささえ感じずにはいられなかった。だが、矜持のひとつも持ち合わせた血の通った人間である、という一面が垣間見えた。少し安心した。
「話してくれてありがとう。君は信用に値する人物だと判断しよう。もう少しだけ時間を――」
「ユーディト様！」
ユーリシュカが、血相を変えて戻って来た。「ここではユディスと……」と口を開きかけたが止めた。仮の名を呼び忘れる程に切迫した状況なのかもしれない。代わりに何があったのか問いかけた。
「村に山賊が――」

2幕

「おはようシャーロック！　おーい、起きてますかー？　おーーはーーよーーー!!!」

鈍痛を訴える頭に声が突き刺さる。身を起こし、声のした方を見れば昨夜、鍵を閉め忘れたらしい窓が開いており、そこから相棒のモリオンの黒鱗と、細い銀髪を朝日に白く煌めかせたムネモシュネが顔を出していた。

「……声量を下げてくれ。」

「相変わらず寝起き悪いね」

「誰のせいだと？」

「僕でーす」

窓に近付いてモリオンの頭を撫でてやると、彼女は首を伸ばし、喉を低く鳴らして甘えてきた。

「ね、海沿いにお洒落な食事処を見つけたんだ。朝ご飯そこで食べようよ」

「俺は遠慮しとく。食欲が……」

「だめ。君がちゃんと朝ご飯食べるように監督しなさい、と姫様からの命令です。とゆことで、僕はこの子と外で待ってるね！」

一方的にそう言ってムネモシュネは窓を閉め、モリオンを連れて窓の向こうに消えた。主の名前を出せばそうしてくれると思ったのか、はたまた本当に主からそう言われているのか。何にせよ待たせたら悪い。まだ少し気怠い身体を引きずって上着を手に取った。

テラス席からは、朝のまだ登り切らない陽が、南方らしい鮮やかな色彩の海面を照らしているのが見渡せた。海上の通路を兼ねた、桟橋の上を行き交う人々が徐々に増え始めており、一日の始まりを明るい喧騒で告げている。

「は？　朝ご飯それで終わり？　人体舐めてんの？」

トマトのスープを口にしていると、パンのお代わりを三回したムネ

モシュネは、信じられないとでも言いたげな目を向けた。
「荷物も少なくなったし、今日はそんなに体力使わないだろう。食べたことには違いないんだから」
「む～……」
鉱人は摂取した栄養を角に多く取られる。故に、体質的に筋肉がつきにくく、華奢な者が多い。体力も角のない者に比べたらずっと少ない。自分のように少食かつ、武術を嗜む者には困った体質だ。それでも食べなければ、騎竜を駆り斧を振る筋力を維持出来ない。時々そんな二律背反に疲れて手を抜きたくなる。
「もっと食べないか？」とスープの付け合わせのパンを差し出せば、ムネモシュネは少し躊躇した後受け取った。食い盛りである。結構なことだ。
モリオンは傍で花を食べていた。近くの花屋が事情を聞いて、廃棄予定のものを譲ってくれた。花が好きと聞くと可愛らしく聞こえるが、彼女にとっての好きとは食べ物の好みのそれだ。
満足したらしい。フォークとナイフを置いて、一息吐くと、ムネモシュネは呟いた。
「……マリー、幸せになれるかな」
昨夜、この町の港から船で経った娘の名だ。彼女は、リウスイにいる恋人の元へ嫁ぐことになり、村でささやかな宴を催して送り出した。ムネモシュネとシャーロックは村から港までの荷運び兼護衛で、この港町を訪れていた。
「――ああ、なれるさ。マリーはしっかり者だったろう。きっとうまくいくよ」
「そうだね」
今頃あの娘は伴侶となる者の元へ辿り着いただろうか。空には雲一つなく、昨日彼女を乗せて行った船の行く先も、もしかしたら同じ晴れの空を見ているのかもしれない。こんなご時世だ。愛する者と幸せになるぐらい、誰にも邪魔されずに成し遂げられて欲しいと願った。

食事を終えた後、馬宿から愛馬を引き取って戻ってくると、シャーロックは鉱人の女性に絡まれていた。
「俺も現地人じゃないから詳しくないんだ。すまない」
「あら、じゃあせっかくだし一緒に散策しない？　私ね、休暇でクマノからこっちまで遊びに来たの」
「何のお話？　僕もまーぜてっ」
そう言って話に割り込む。女性は「あら」と赤を引いた唇で柔らかに笑った。毛先に朱が混じる腰までの黒髪に、深いスリットの入った丈の長い服。角はティアラ状で、白を帯びた鉱石には花が咲くような形の赤が混じっていた。綺麗な人だ、と思った。
「なぁんだお連れ様がいるんじゃない。つかぬことを聞くのだけれど彼氏さん？彼女さん？」
「彼氏さんでも彼女さんでもないかな。まぁ僕は勝手に兄貴分だと思ってる感じ？　ところでお姉さん、何かお探しだったんじゃないの」
「お昼でもお酒が飲めるところを探してたのよ。店が分からないなら、そうねぇ、観光案内所はどこかしら？」
「ここだと停泊所のところが近いかな」
「そう、助かるわ。ありがとう」
嫌な顔をすることもなく、悔しがる素振りもない。女性は手を振ると優美な所作で踵を返す。これが大人の女ってやつか……とムネモシュネは感心した。モリオンはどうだろう。モリオンは賢く人懐こい騎竜ではあるが、それ故に嫉妬したり、思うところがあったりはしないのだろうか。そちらに視線を向けた。
彼女は女性ではなく海の方を見ている。その目線の先を辿っていくと、帆を広げた船影が近付いて来るのが見えた。随分と貧層な船。帆も船体も薄汚れており、漁船にしてはお粗末な有様で、当然観光船な訳がない。何だろう、あれは――そんな考えが脳裏を過った時、空気を震わせて放たれた砲弾の音がその疑問の答えを導き出した。甲板に見える荒くれ達の姿で確信を得る。

少し先を行っていた女性も立ち止まり、近付いてくる船影を見ていた。彼女だけではない。異変に気付いた人々の間には徐々に動揺と恐怖と混乱が伝播しつつある。
「……モネ」
「うん、分かってる。鎧、持ってきて良かったね」

自警団には民間人の退避を優先するよう伝えた。そして、海賊の撃退には自分達も手を貸す。とも。少し警戒した態度を取られたが、それも船から飛び移って来た一人を、槍の投擲で仕留めるまでの話であった。
やはりこういった時は臨機応変になるべきだ。そう思いながら、人の流れに逆らい桟橋に馬を走らせる。誘導で徐々に民間人が移動し始めていた。これぐらいまで人の密度が減れば、思う存分に槍を振り回せそうだ。
赤い鎧が目を引くのか、自警団よりもこちらに敵が集まってきている。叫び声を上げながら飛びかかってくる海賊を槍のひと薙ぎで牽制する。弾かれたのは賊の方だった。賊が体勢を崩したところに、正確な斧の投擲が頭上から飛来する。賊は海中に没し、血の筋だけを僅かに浮き上がらせた。降下し、橋の縁に突き刺さっていた斧を回収したシャーロックが「少し離れていてくれ！」と声を上げた。少し褐色を帯びた肌に輝く金色の瞳が刹那、交錯する。彼は斧を取った手と反対の手に、既に魔道書を構えている。それらの意図に気付き、愛馬に引き返すよう合図した。
続々と船から海賊が乗り込んで来る。一人一人では大した戦力ではないが、やはり数で来られるのは分が悪い。そろそろかな……と空を見上げれば、空中で静止するモリオンと、その上で魔法を展開するシャーロックの姿が見えた。紫電が降り注ぎ、賊達へ殺到していく。
「やるじゃない、あなた達」
そう背後から声をかけてきたのは先程の鉱人の女性であった。その手には闇魔法の魔道書がある。

「お姉さん、僕達のことは気にしないで避難していいよ」
「お気遣いなく。私ね、国家公務員なの。こういう時は仕事しろって上司に言われてるのよ」
　彼女が腕を翳すと、ムネモシュネの横を闇魔法が掠め飛んで行った。その黒い奔流が背後にいた剣使いと、弓使いをまとめてなぎ倒し、海面へと叩き落とした。
「援護するわ」
「ありがとう、お姉さん！」

3幕

皇女の姿は探すまでもない。

部屋の前に立つ、顔をよく知った護衛の姿にアンネマリウは安堵した。自分の息のかかった者達に、皇女の身の安全を任せられるのが頼もしい。私腹を肥やし、目先の利益に飛びつくことしか考えていない議会の連中と、それに媚びへつらう堕落した帝国軍人達が、いつ皇女を亡き者にしようかなんて、分かったものではないのだ。

今日は珍しい人物がいる。今年の春先に私設部隊へ迎え入れたばかりの、重騎士の少女だ。名前は確か――

「コレー、夜警明けなのではなくって？　ご苦労様。どうしたの？」

「あ、アンネマリウ様……これは、その……先輩方に差し入れを持ってきたのであります！」

一房だけ黄金色が混じる真紅の髪はよく目立ち、女性の、しかもまだ年若い少女の重騎士故に尚更目に留まる。悪い意味で目につくのではないのだから、特に口煩く言うこともない。

コレーは掌に収まるくらいの、薄い紙で包装された小さな包みを二人の護衛に渡していた。護衛も貰い慣れているのか気さくな態度で接していたように見えた。

「隊員同士仲が良いのは良いことだわ。何を頂いたの？」

「琥珀糖ですよ、アンネマリウ様」

「コレーったら器用なんです」

「まぁ」

彼女はどういった顔をしたらいいのか分からない、といった顔で目を泳がせていた。普段の彼女の立ち振る舞いや雄々しい槍捌きと、製菓が趣味というのがどうも結びつかない印象だ。彼女のこの様子を見ると、そう思われているかもしれない、という自覚はあるようだ。

「まだ琥珀糖は残っていて？」

「残っておりますが、あまり形が……」

「構わないわ。私にも分けて頂戴――ああ、そうね。せっかくだから貴女もこちらにいらっしゃいな。」

「――失礼致します、皇女様」
返事はない。ぴったり二呼吸の間を置いて、両隣の護衛が両開きの扉を開いた。今日のように、他に人を入れることは滅多にない。議会の連中など以ての外で、彼らに触れさせんが為に、乳母という立場にものを言わせて隊を作ったのだ。自分が直接面と向かって会話を交わし、人格や経歴を調べ上げた部隊員だからこそ、ここに招き入れた。
アンネマリウは、寝台の傍の机にティーセットを置き、コレーに座るよう命じた。三つのティーカップに茶を注ぎ、一つは取っ手を皇女側に向けて机に起き、もう一つはコレーに差し出す。今日はオレンジとハーブをブレンドしたもので、爽やかな香気が部屋の中に広がった。
コレーから貰った琥珀糖は、青い小花が描かれた小皿に盛り付けた。寒天を溶かした砂糖水を固めて結晶化させて作るものだ。上手く作るのは難しいが、彼女は見事に仕上げている。青く着彩され、中には削って入れた金箔が星屑のように煌めき、さながら青金石のようだ。
「……畏まらなくて良くてよ。貴女が不躾な振る舞いをしないことは、私もよく分かっているわ。そうでなければ私の『日課』に貴女を招き入れたりはしないもの」
「は、はぁ……」
「お茶の味はどう？」
「すごくスースーします」
「そう。甘さが欲しかったらこちらの蜂蜜を入れるといいわ」
緊張して味どころではないだろうコレーを横目に、アンネマリウは皇女キルシーに目を向けた。
天蓋付きの寝台に降ろされた薄い幕越しで、皇女は今日も眠っている。部屋の中は優しい香りで満たされ、皇女の眠りを妨げぬように位置を調整された窓からは、日中は心地よい陽光が、夜は星月が見えるようになっていた。

この部屋の扉一枚を隔てれば、そこは薄汚い欲望の渦巻く世界が広がっている。彼女は既にそれに触れ、その結果としていつ目覚めるとも知れぬ深い眠りの中にいる。

皇女は三年前に、城の堀に転落して溺れた。皇女は幼なかったが、聞き分けの良い、しっかりした子供であった。危険だから立ち入らないようにと言った場所には決して近付かず、愚図りもせずに取り決められた一日の執務をこなしていた。

あの時、皇女は双子の兄である皇帝と座学の予定が入っていた。……だから、柵のない堀の側になど近付く筈がない。座学の予定を疎かにする筈がない。何者かが皇女を謀ったのだ。

議会の呼んだ医者など当てにならないと突っ撥ねて、国のあちこちから名医を掻き集めて皇女を診せた。だが誰もが首を横に振った。皇女は心臓が動いていて息をしているだけで、奇跡でも起きない限り目覚めることはないだろうと。頬も唇も薄紅を帯び、髪は金糸雀の黄金に今も輝いているというのに。

皇女の側にいると娘を思い出す。元はと言えば、召し抱えられるきっかけは内乱と、それを原因とした娘の死だ。重ねずにはいられない。愛らしい声も、もう届かない微笑みも。

そんな痛みを抱えながらも、側にいるのは後悔か、彼女を守れなかった罪滅ぼしか。

ただ一つ、はっきりと言えるのはまだ彼女は全て失われていないということ。

もしかしたら聞こえているかもしれない。届いているかもしれない。だからこうして、時々彼女の側で語らうようにしている。皇女は年頃の少女だ、きっとこの琥珀糖のような綺麗な菓子を気に入ってくれるだろう。

「よぉ、コレーじゃないか」

槍に私物をひっかけて帰路につく途中、そう声をかけられた。何だか夢か幻でも見ていたような気分で歩いていたのだが、棘のある声に

否応なしに現実へと引き戻される。
「どうした、緩いツラ晒しやがって」
「〝魔女様〟のお相手は務まったのか？」
赤を基調にした鎧を纏う姿はルベウス帝国軍人だ。巡回中なのであろうが、顔に締まりはなく威厳は感じない。議会が政権を掌握してなお、国の為に尽くそうとしている者達は確かにいるのだが、こういう奴ばかり悪目立ちする。
「一体どういう色目を使ってあの女に取り入ったんだ？」
「女ばかりを集めるのが趣味なんだろう、あの魔女様は。いつまでも若くていい女なのも、他の女の精力を啜ってるからだって聞いたぜ？」
鹿のような紫金水晶の角。激しい金色の瞳。褐色を帯びた肌。何でも肌の色は、内乱で殆どが死に絶えてしまった民族の特徴だという。彼女が妖艶で美しいのは同意だが、上司の悪口は聞き捨てならない。
「何寝ぼけたこと抜かしてやがるんだテメェらは。頭が性欲と直結してんのか？」
「天下の〝弓騎士パーシアス〟の孫もこんなんじゃなぁ。もしかしてあの弓騎士も色目――」
反射的に槍を向ければ、怯んだ男の「ヒッ」という息を呑むような小さな悲鳴が上がる。布に包んだ荷物が石畳の上に落ち、ガシャンという音を立てた。
「あたしのことは何言おうが構わないけど、じいさんを侮辱されちゃ黙っちゃおけねえな」
「なんだ、やんのかコレー。重騎士のお前が軽装兵に敵うと思ってんのか？」
「ああ～、お待ちなすって若い皆さんがた。おお、こわいこわい……」
すると、睨み合ったコレー達の間にのろのろと割り込み、立ちふさがる者があった。腰を曲げ、杖をついた老女だった。顔が見えない程目深に被ったフードの下から、鮮やかな赤色の角が伸びて見えている。

「国民同士で争っても何も楽しいことありませんですじゃ。ここはこの、通りすがりのお節介焼き赤鬼ばばに免じて、どうかどうか……」
興ざめしたらしい。多少なりやる気であった兵士は舌打ちをして、品の無いことを聞こえるように言い合いながら去って行った。コレーは溜息を吐いて構えた槍を下ろした。人通りが少なくて幸いだった。騒ぎになったら部隊の者にも迷惑になる。自己嫌悪を噛みしめていると「お嬢さん、忘れ物だよ」と老女が曲がった腰で荷物をよたよたと拾い上げ、手渡してくれた。
「ああ、悪いなばぁさん。中に鎧が入ってるんだ」
「こんな重いのを毎日着てお仕事してるのかい？えらいねぇ」
「ありがとう……さっきはすまねぇな。じいさん馬鹿にされてカッとなっちまった」
「気持ちは分かるけどねぇ。大切な人を馬鹿にされたら、誰だって悔しいから。じゃ、ばばはこれで」
「おう、気をつけてなばぁさん。困ったことがあったら連中より、あたしら『ベラ・リリン』に言ってくれよ？」
「頼もしいねぇ。そうさせてもらうよ、ほっほ」
老女は日中だというのに活気のない大通りを歩いていく。その姿が曲がり角に入って見えなくなった頃コレーは溜息を吐いて近くの壁に背中を預けた。仰ぎ見た天に、黒衣を纏う天馬騎士の姿が数機行き交っている。皇女親衛隊「ベラ・リリン」の隊員だ。自分も含め、彼女達は身に纏う鎧や服を、ルベウスの徴である紅ではなく、それ以外の暗めの色にするよう命を受けている。だからすぐに見分けがつくのだ。演習中か……と思ったが、どうも様子が慌ただしい。やがてそのうちの一騎が、大きく弧を描いてこちらに向かってきた。
「コレー！」
彼女が自分を呼び掛けたのとほぼ同じに、街の中から煙が上がった。悲鳴も聞こえてくる。
「夜警明けのところごめんなさい。山賊が山を越えてやってきたの。手を貸して」
「何だって？　警備の連中は――」

言いかけたところで止めた。先輩の天馬騎士は苦笑いで返す。十年前だって復興を疎かにしてまで侵攻を選んだ国だ。その場凌ぎの使い捨て、誇りのない軍人達に何を期待できよう？

「嫌になるわね、まったく。ああ、代休は後で申請して頂戴ね」

「……了解です、先輩。すぐ行きます」

さっきの老女は大丈夫だろうか。腰が悪そうにしていたが……。コレーは鎧を身に付けながらそう思った。

城の正門から続く大通りの先には、時を刻むことを止めた時計塔が聳えているのが見える。誰も手入れしようとしないのだ。薄曇りの下、行き交う人々の顔は誰も彼も明るくない。もう、明るい表情を浮かべることなど忘れてしまったかのようだ。元はと言えば、十年前にかつてこの国の皇帝だった男の行為が原因であるのだが――悔やんだところでもう、賢帝だった頃の皇帝と、強く誇り高き祖国は戻って来ないのだ。

思わず立ち止まる。煙の匂いを鼻先に感じたからだった。家から煙が出ている。微かにパチパチと建材の燃える音も耳に届いてきた。陰鬱とした街に、喧騒がわっと広がっていく。

ルベウス帝都・ファーレナは崖と険しい山々に囲まれた天然の要塞の中に位置している。東西南北にある門を抜けて街に入るのが一番容易だ。首都の護りの任を任せられている軍人達の話を盗み聞けば、狼藉者は門ではなく山を越えてやってきた賊達らしい。市井の警護を任されている筈の部隊と半ば喧嘩腰に話をしている女達は、皇女親衛隊だった筈だ。皇子を連れて帝都を逃れた後も、何度か情報収集にここに戻ってきているが、相変わらず私設部隊とは思えない練度だ。どうも彼女らの部隊が賊の相手をする、ということで話が纏まったらしい。

「早く！避難所まで走って！」

真紅の髪の少女重騎士が声を張り上げていた。賊が屋根から屋根を飛び移って接近し、落下しながら少女に向かって斧を振り下ろす。

少女は臆することなく、髪と同じ真紅の瞳を大きく見開いて大盾を構えた。ガン！と高い金属音が響く。そのまま彼女は賊を蹴飛ばした。石畳の上を転がり、こちらの足元まで滑り込んできた賊に矢を抜いて突き刺した。つい、癖でとどめを刺してしまったが、本来自分はここにいてはならない身だ。多少迂闊であった。顔を見られないよう、フードを深く被り直す。

「なんだ、じいさんやるな。退役軍人か？手伝ってくれんのか？」

少女の声。「……ああ」と短く返した。気の強そうな娘だった。髪と瞳の真紅は鮮やかで、頭頂部からツンと伸びる癖毛だけ金色をしていた。

コレー。

懐かしい名が記憶の中の深い場所から浮き上がってくる。自分が表向きには皇子と共に〝死んだ〟後は、知人が院長を務め、二人でよく顔を出していた孤児院へとその身を移した、と人づてに聞いていた。まさかこんなところで再会するとは――

「ひぇえ！ばばを！このばばをお助けくだされ！」

今度は老女の声がする。声の方に向けて矢を放つと、賊は短い悲鳴を上げて崩れ落ちた。

「やっぱり……今行くよばぁさん、あたしと一緒に避難所へ行こう」

「……私は時計塔へ向かう。大通りに敵を留めてくれれば射撃援護しよう」

「助かるよじいさん！仲間にも伝えておく」

「飛行兵には高度を下げすぎないように言ってほしい。流れ矢に当たる恐れがある。そなたはくれぐれも無茶をしないように」

「ああ、ありがとう。じいさんも気を付けてな」

男児のように勇ましく気が強い子だが、優しい子だった。今も変わっていない。柔らかな午後の日差しのような、懐かしく温かい記憶が蘇る。落陽を待つばかりの国に何を見出し、彼女は槍を取ったのだろうか。

それを聞くことが許される時間は今は無い。

4幕

「皆無事か？」
「ああ、ユディス……！　あんたも怪我してないかい？」
「お客様は？」
「大事ない。客人殿もここに。怪我人がいるのか？」
　村は騒然としていた。話を聞けば、見張り台の清掃をしていた村人が矢で射られ、負傷したという。その時に複数の賊を見たらしい。村の者が警邏に当たっていた。その顔には戸惑いと恐怖が滲んでいる。無理もない、いつまた矢を射られるか、あるいは森の中から賊が飛びかかってくるかも分からないのだ。
「……警備の人を戻らせてくれ。皆は家に入って鍵をかけて、外に出ないように。私とユーリシュカで迎え撃つ」
「危険すぎる。麓の町まで行って助けを……」
「間に合わない。麓までどれくらいかかるか分かっているだろう。大丈夫、心配ない。意思の分からない野生の獣を相手するより容易いさ――ユーリシュカ！君は森で遊撃を頼む。村には一歩たりとも近づけるな」
「はっ！」
　ユーリシュカは馬に飛び乗るとすぐさま駆けて行った。心配そうに村人達がこちらを見ている。
「……早く家の中へ。出来れば皆には見て欲しくないんだ。私が人を斬るところを」
　掌が震えているのを隠すように強く握りしめた。これは、恐怖ではない。怒りだ。

　梢が揺れた。薄汚れた衣装の端が見え隠れしている。ユーディトはそこに向かって剣を投擲した。「ギャッ」という濁った悲鳴と共に骸が落ちてくる。側に剣は転がっており、すぐに拾い上げて辺りに耳を澄ませた。

「――おい、なんだあの騎馬兵は!?　あんな手練れがいるなんて聞いてねえ！」
「落ち着け、たった一騎だ。それより青い髪の女と金髪のガキだ！死んでてもいい、死体をあいつに見せる前に棄てるんじゃないぞ」
探す手間を省いてやることにした。剣を構え、地を蹴る。昼間でも薄暗い樹海の暗がりの中から飛び出してきたユーディトに、驚きで賊達が硬直する。斜め下から上に切り上げた剣先で腕を飛ばし、間髪入れずに踏み込み、心臓を貫いて絶命させた。
「ここにいるぞ！青髪の女だ――ヒッ！」
仲間に情報伝達をしようと声を上げた喉首を掴んで持ち上げ、地に叩き付ける。柄を手の中で回し、剣を逆手に持ち直すと、地にへばりついた男の心臓を狙って振り下ろす――が、遠くに風切り音を聞いて腕を止めた。二本飛んできた矢を叩き落とす。
「ユーディト様！」
シャルルの声がした。再び振り返れば男が起き上がり斧を手に取っていた。シャルルは息を大きく吸い、済んだ声で数小節の旋律を歌った。空気が震え、彼の声と共鳴するような複数の音が響き渡る。歌っているのはシャルル一人だというのに、まるで合唱隊がそこにいるかのようだ。男が呻いて斧を取り落とし耳を塞ぐ。その首を跳ね飛ばしながら、ユーディトは忠臣の名を呼んだ。
「ユーリシュカ！」
藪の中へ向かって手槍が投擲された。槍は肩を掠めたらしい、呻き声と共に射手の姿が現れる。接近して斬り捨てた。
「外に出ないよう言っただろう！」
「元はと言えば僕が原因なんです。黙って見ていられません！」
語気を強めに窘めたが、逆に言い返されてしまった。剣に付いた血を払いながら「……今の歌は？」と尋ねる。
「僕独自の魔法体系です。歌でさっきみたいに正気を失わせたり、皆さんを助けることが出来ます」
離れないようにシャルルに告げ、ユーディトは剣を肩に担いだ。
「……連中の会話を聞いた。山賊をけしかけたのは君を追って来た刺

客だな。大事にならないうちに事を澄ませるつもりなんだろう。今なら山賊が村を一つ潰した、で話が通る。私と君の首に金をかけているようだ」
「どうされるんですか？」
「決まっている――誰一人として生かして帰さん。流された血は奴らの血で贖ってもらう」

足場の悪い森の中をよくここまで速く逃げられるものだ。やはり賊とは違う。こいつが大元だろう。
背後から蹄の音がする。ユーリシュカがすぐに追い越して行った。森に紛れ込むような深い緑の鎧の背に、銀髪が揺れている。馬を駆ったユーリシュカは、逃げる黒服の前に跳躍して躍り出た。振り下ろされた剣が、咄嗟に止まった男の鼻先を掠める程の近くに突き刺さる。
男はユーリシュカを見、そして追いついて挟み撃ちにしたユーディトとシャルルを見た。
ユーディトは剣を男の顎下に突き付ける。すると「待ってください！」とシャルルが言った。
「……忠義立てするほどの価値があると思っているのですか、貴方はあの国に」
「それが仕事だ」
「山賊を雇い、無関係の人々を傷付けるのが仕事ですか？」
まだ若い男であった。ユーディトと年の頃もそう変わらないように思えた。男は応えない。一度目を伏せ、息を吐くと、目を見開くと、向けられた宝剣を掴み、自らの喉に向かってその切っ先を走らせた。シャルルの白い顔と、ユーディトに向かって血飛沫がかかる。男は膝を折り、崩れ落ちて何度か血と空気の混じった断末魔の吐息を吐き出して、動かなくなった。
呆気ない幕切れであった。頬についた血を拭ったが、広がっただけかもしれない。乾いて貼り付くような血の感覚がした。
戻れば、村の者達は口々にユーディト達の心配をしてくれた。

どうしようもないことだった、と彼らは言った。誰一人として、人殺しと罵る者はいなかった。

だが――もう以前の自分として振る舞えそうにないと思った。彼らの為ならば血に染まっても構わないと、とっくの昔からそうしてきたというのに。きっと自分は、この村で穏やかに暮らす日々も悪くないとどこかで思っていたのだろう。でなければこんなに、虚しくて、悲しい筈がない。

答えは決まった。

5幕

翌日の昼前に、ムネモシュネとシャーロックは帰ってきた。
聞けば港町が海賊の襲撃に合い、一戦交えた後に帰路についたのだという。二人には疲労が見え隠れしていた。
今日も眠れない夜だった。そんな日は昔のことを思い出す。もう、十年にもなるのだ。それなのにまだあの日の夢を見る。鮮やかに思い出せる。母が死んだ日。妹が死んだ日。血の中で沢山の人が死んでいった日。十二歳の自分がそこからずっと自分を見ている。忘れてどうにかなることでも、忘れられるようなことではない。ユーディトの心は今も血を流して慟哭している。
今日もまた眠れない夜だ。ふらりと剣を手に外に出る。山賊を返り討ちにしたことはどこまで届いただろうか。今日はきっと何もないだろうと何となく思っているが、剣を手にしていると落ち着く。
明るい月の下で、庭の隅ではシャーロックが斧の素振りをしていた。毎日続けないと体力も筋力も維持出来ない、とは本人の弁だ。帰って来て荷解きをするよりも早く、襲撃者達の遺体を葬るのを手伝っていたから、夜まで身体が空かなかったのだろう。村に若い男は少なく、この村で力仕事が出来る人材は貴重である。
「疲れているんだろう。一日ぐらいサボっても誰も何も言わんぞ」
そう声をかければ、彼はぴたと斧を突きの形で静止させ、「……そうもいきません」と言った。構えを解いてこちらに向き直る。
「あと数十年はこの身体ですから。ちゃんと手入れしないと」
「手入れ、か……長生きする種族も大変だな」
月光から隠れ潜むように、大きな木の陰に入って幹に背を預けた。夜風が冷たい。あまり引き止めては冷えで風邪をひかせてしまいそうだ。ユーディトは前置きをせずに口を開いた。
「私は村を出るよ。私がここにいることで、皆を危険に晒してしまうのが我慢ならん。無論、それだけではないがな……。私とて未練がある。シャルル殿が言っていた、民を幸せにすることは王として生まれた者の義務だと。その通りだ。彼を大きな街まで送ると言う。そ

のまま戻らないつもりだ」
「では、共に」
「……まだ何も言ってない」
予想はしていたことだが、やはり実際に返事をこの耳で聞くとげんなりする。だが彼らを煩わしいと思っているのではない、決して。
「お前たちはだな、こう……もう少し自由意思というものがないのか」
「ユーディト様、お言葉ですが……いや、何でもありません」
金色の瞳に陰りが過ぎった。
「構わん、話せ。〝お前〟の言葉でな」
長身は大きな角も相俟って威圧感を憶える。だが、彼の瞳は憂いすら帯びる程に柔和で、本当に優しい目をしている。月光より激しく鮮やかな黄金色の虹彩さえ、柔らかく包み込んでしまう。彼は、その瞳を細い月のように伏した。
「ここで暮らす日々は、私――いえ、〝俺〟にとって疎ましいものではありませんでした。ここは星も綺麗です。故郷の空とよく似ている。……俺は二度、帰るべき場所を失いました。もう失うものなんてない、と言いたいところですが……俺はここを失いたくない。貴女がこの場所を守る為に旅立つと言うのなら、俺も共に行きます」
「……お前は本当につまらないくらい真面目ね」
ずっと昔、同じ相手に言った言葉が口をついて出る。少し呆れて、吐息で笑った。随分と笑っていないような気がした。
「そのくらいにして戻るんだな、風呂は湧いてるぞ。私はもう寝るからな」
月が雲に隠れた。今なら眠れるかもしれない。ユーディトは夜風に髪を翻してシャーロックの元を去った。

玄関の鍵を閉めていると村人達がやってきた。村長夫妻がいる。ゴテルもいる。今日は冬に備えての農作業があると聞いていたが。
「他は先に行ったのかい？」
ゴテルが口を開く。鍵は玄関の植木鉢の下へ。不用心かもしれな

いが、この村ではこれで十分だ。
「ああ。私はこの家の主だからな、最後に戸締りをしていかないと……何だ、揃いも揃って見送りか？」
「君は戻らないつもりなんだろう――『姫様』。」
村長がそう言った。三人の騎士達はユーディトを姫様と呼ぶこともある。彼らもそれを知っている。だからそう呼んだとて何もおかしくはない。だがその響きは憂いと悲しみに満ちている。それが意味するものは多くない。
――ああ、いつから彼らは気付いていたのだろう。もしかしたらあの夜から全てを分かっていたのかもしれない。そう考えることは容易だ。あまり、考えないようにはしていたが。
ゴテルがユーディトを抱きしめた。昔からよく自分を気にかけてくれる人だった。母の温もりなどもう忘れてしまった、だがきっと、これはそれと良く似たものだ。
「ゴテル、苦しいよ」
振り払えずにいる。振り払おうとも思わなかった。やがて彼女は、歳を重ねて節くれだった指で、ユーディトの耳に耳飾りを付けてくれた。小さな薔薇の花の下に、橙とも薄紅ともつかぬ色の雫型の石が揺れている。
「本当は、あんたに良い人ができたらお祝いにあげようと思ってたんだけどねぇ。でも、今渡さないと後悔しそうだから……」
「世話になった、言葉に出来ないくらい感謝している。これから物騒なことが起きるかもしれない。心配はいらない、後で護衛を雇って向かわせる」
「あんたが行くっていうなら私たちは止められないよ。でもいつだって戻っておいで。私達の可愛いお姫様」
何もない、と言っても過言ではない小さな村。だがしがらみも澱みもない。穏やかな場所だった。時の流れがゆっくりと過ぎていくような。こんな場所でずっと生きていけたら、それはそれで豊かな人生なのかもしれない。けれども――ユーディトはそれを選ばなかった。

「……え、ちょっと、嘘でしょ？　その格好で帝都からここまで来たの？」
港町の路地裏。海賊騒ぎも落ち着いて、路地を一つ隔てた向こうには港町らしい喧騒と活気が戻っていた。しかし休暇は仕事に早変わりだ。海風にあてられて煤けた色の壁に背を預けて待っていると、少し離れた場所に赤い角の老女が立った。
「正体がバレちゃ変装にならんですじゃ。それに家に帰るまでが偵察じゃよ。ほっほ」
「護衛は？」
「ワンは心配性じゃのう。安心せい、その辺におるよ」
「……そ。ならいいけど。どうしたの？」
「騒ぎに巻き込まれたと聞いての。顔ぐらいは見ていこうと思ってねぇ」
老女の口から自分の名前が出て少し安堵した。普段の彼女の顔を知っている身からすれば、本当に本人だろうか……と思ってしまう程の変装だ。腰は曲がり、老女相応の皺までこさえている。
「収穫あった？」
「そりゃもう大収穫で。それと、面白い者が戻っておったぞ。ありゃ天も泣く弓騎士パーシアスじゃった」
「皇帝と一緒に殉職したんじゃなかったのね……」
「まぁ、皇帝も一緒ではないと考える方が不自然じゃろうな」
ルベウス皇帝・シャルル暗殺の際は、皇帝の棺の他にもう一つ棺があった。それは、皇帝を守ろうとして共に命を落とした、老いてなお強く、誇り高き騎士のものであった。両者の遺体はあまりに無残であった為、最後まで棺の蓋が開けられることはなかったと耳にしたが。
「面白くなりそうじゃ。ほっほ……」
老女はしわがれた声で笑った。目深に被ったフードの下では、角と同じ柘榴石の瞳が、老女しからぬ覇気を放っていた。

6幕

「姫様、どちらへ行っていたんですか！」
　宿へ戻れば、ぷりぷりと怒りながらムネモシュネが出迎えてくれた。
「いくらまだ大きく動いてないからって、危ないですよ！んもう～」
「君達は過保護すぎる、皇帝陛下を見るといい」
「……皇帝陛下は逆に肝が据わり過ぎです」
「そうですか？」
　ユーリシュカが軽い苦言を呈したが、シャルルは気にしていなさそうだ。
「村に傭兵を向かわせた。私が直々に相手して強さを確かめたから腕は確かだろう。これで少しは安心……だといいが」
　村の皆は今頃夕飯の時刻だろうか。村を経ってまだたった数日だが、随分遠くに来てしまった気がする。
「皆さん、状況確認と報告をいくつかしたいのですが、よろしいですか？」
「ああ、構わん」
　シャーロックは外で見張りをしつついつもの鍛練をしている。彼には後で伝えなければ。
　シャルルが地図を広げた。一見、変哲のない地図のようだが、よく見れば紙に僅かな凹凸がある。それに指で触れて確かめれば、目で見ずとも地形を把握することが出来るのだ。シャルルの白い指先はまず、リウスイとの国境に近いサフィルスの小さな町に留まった。
「現在地はここです。当面の目標は戦力の確保となるでしょう。それに当たりまずはリウスイへ接触します。ユーディト様、僕の伝書カラスには合流できましたか？」
「脚に青いリボンの結ばれたカラス、だろう？　確かに手紙は渡した」
「ああ、良かったです。天候にもよりますが数日で届くでしょう」
「リウスイは王都とその周辺からの難民を受け入れて貰っている。今もそこで暮らしている人々がいる筈だ。リウスイがこちら側につい

てくれるのが一番好都合だが……」
「あの国は基本的に中立ですからね」
　母の時代に交流があり、自分も首領とは顔を合わせたことがある。縁がない訳ではないが、どう転ぶかは未知数だ。
「直接の協力は仰げずとも黙認して貰えないか、といった旨も書いた。正直、あまり期待はしていない。私が生きているということだけでも、何らかの形で周知できれば上々だと思っている」
「その際はまた新たに別の方法を考えましょう」
　十年という歳月が変えたものはユーディトの環境だけではない。王都からリゥスイに逃れた人々の中では、新たな人生を歩み始めた者もいるだろう。そんな人々を強引に駆り立てるつもりは毛頭ない。
　シャルルが何かを指先で探していた。ムネモシュネが、小さな駒を彼の手に握らせる。
「ありがとうございます、モネさん。……戦力に関してですが。パーシアス……えーと、僕の仲間が、ルベウス側でこちらについてくれる人がいないか当たっているそうです。」
「パーシアスだって？」
　ユーリシュカが驚きを隠せない様子で呟いた。
「あの弓騎士パーシアスですか？」
「誰それ？」
　ムネモシュネはピンと来ないようだ。ユーディトは掻い摘んで教えてやる。
「先帝オルヒ殿の時代から皇帝一家に仕えていた騎士だ。話したことはないが、私も顔は知っている。たまたま目が合ってしまったシャーロックが、思わず顔を引きつらせたぐらいの覇気を持った老騎士だった」
「へぇー、あのシャーロックがねぇ。」
「矢は天敵だからな……君と一緒に殉職した、と聞いたが、今もお元気でおられるのか」
「ええ、年々元気になっているくらいです。合流はもう少し先になりそうですが。ルベウス側で人が集まれば、サフィルス東側の大橋と、

西側の平野で挟撃できます」
　東側の大橋に円柱の駒、西側の平野に角柱の駒が置かれる。
「王都周辺の領土は……この辺りまでが支配下です。そうでない領地で、一番近いところはバセット領ですね。ユーディト様、こちらのことはご存じですか？」
「バセット家は古くから付き合いがある。王都の守りを担っていた名家だよ。跡取りで嫡男がいたと思うが、生憎と十年前で情報が止まっている」
「ここに拠点を持てたら理想的ですよね。情報を探っておきますね」
「ああ、そうしてくれると助かる。何から何まで、頼ってばかりで申し訳ないが……」
「構いませんよ。僕に出来ることなら何だって」
　同じく国を追われた身で、彼は何を思い駆け回って来たのだろう。ひとまずはリゥスイの反応待ち、ということになりそうだ。
「……始まるね」
　ムネモシュネが呟く。無垢な飴色の瞳は、いつになく強い光を宿していた。

　宿の庭へ、杖をつきながらシャルルが出て来た。中での話は終わったようだ。
　付き添いもなく一人である。彼には別行動中の仲間がいるそうだが、合流するという話は耳に入っていない。その仲間は、どうやらユーディト達を皇帝の身柄を預けるに相応しいと判断したようだ。皇帝が自ら身を任せたのなら間違いない――とでも思ったのかもしれない。よく分かる。盲信と忠義の間に身を置く我が身にとっては。同じ立場だったら同じことを考えるだろう。主が道を違える筈がない、と。
「ああ、シャーロックさん。お疲れ様です」
　まだ声変わりしていない声色で名を先に呼ばれた。まだ声をかけてすらいないというのに。視覚に頼れない分、他の感覚で補っている

ということは想像に容易いが、それでも良く分かるものだと思った。彼は、紅と蒼の二色の瞳をこちらに向ける。美しい瞳だ。まるでルビーとサファイアのような。
「……どうかされました？」
「あ、あの。シャーロックさんは竜騎士でいらっしゃるのでしょう。いつから竜に？」
「はい。内乱の少し前から訓練を始めて……本格的に乗るようになったのはサフィルスに来てからですね」
「すごいなぁ。ご存知かもしれませんが、僕のお祖父様……先帝オルヒも、お若い頃は竜騎士であったそうです。僕も竜騎士に憧れていたのですが、もうそれも叶いそうにありません。せめて、貴方の話だけでもお聞きしたいなぁと」
「ご興味がおありですか？」
「はい！」
「陛下がお望みならいつだって。宜しければ、乗ってみますか？」
「えっ、良いんですか？」
「構いません。ですが、少し訓練が必要になりますよ」
「訓練、ですか。大丈夫です、ちょっと怖いですが、乗り越えます！」
微笑ましい。笑みを堪え切れずいると「今笑いましたね?!」と声が飛んできた。
「……失礼しました。陛下が楽しそうなもので」
「ああ、畏まらなくて結構です、僕のことは陛下ではなくシャルルと呼んでください。さっきのことは約束、ですよ。僕、楽しみにしてますから！」
正直なところ少し驚いている。歳不相応な風格を持った少年だとばかり思っていたが、それだけではない面も持ち合わせているようだ。王であれ、人間には違いない――ということか。もっと話をしたい、とシャルルは言ってきた。ならば続きは立ち話ではなく宿の部屋で、と提案すれば彼は嬉しそうに頷いたのだった。
これから往く先は決して明るいことだけではない。せめてひと時でも安らげれば、と思うのは欺瞞だろうか。

2章
1幕

大股で渡り廊下を歩いていると、すれ違った侍女が足を止めて一礼する。朱色に塗られた柵の向こうには蓮の花が満開になっていた。リゥスイ首都・クマノは一年中温暖で、滅多に雪が降ることもない。蓮の花は途切れることなく人々の目を楽しませてくれている。

「お前、姫の姿は見たか？」

「いえ。まだ一度も……」

少し後ろを歩く部下のオブシウスに、リゥスイ首領ミサキは問いかけた。

「どんな顔か気にならんか？」

「今から会われるのですから、焦ることもないと思いますが」

池を跨ぐ渡り廊下を越えると、離れへ辿り着く。普段は一人になりたい時に使っているが、見栄えが良いので来客を招いたりすることもある。よく手入れされた庭木の向こうに、共と思わしき背の高い男の角が見えた。こちらが配置した兵に、ここで待っているようにと東屋の方へ案内されていく。

「お前はここで見張っておれ。誰も通すでないぞ」

「はっ」

裏門をくぐって入る。中は焚かれた香の香りが仄かに漂っていた。侵入者対策で、どこを歩いても床板が軋む。客人もその音に気付いただろう。襖を開ければ、既に覚悟を決めたような顔の若い娘と、場にそぐわぬと思う程に落ち着いた佇まいの少年が待っていた。

少年の方はまだいい。しかし娘の方は――どうも違和感が拭えずにいる。美しい青石の瞳は、黒い炭が静かにその中に炎を抱いて燃え上がるような美しさを秘めていたが、それでいて酷く不安定ささえ感じてしまう。相当の想いをして彼女はここまでやってきたのだろうが、この違和感は何なのだ？　覚悟だけではない。

これはもっと危うく激しいものだ。

「――お待たせ致した、ご客人。改めて自己紹介する必要もないだろうが、ここは形式に則って名乗ろうではないか。私は五代目リゥスイ首領・ミサキであるぞ」
「十数年ぶりにお目にかかります。サフィルス第一王女ユーディトと……」
「ルベウス皇帝シャルルです。はじめまして」
王族諸共に複数の領土を失い、人々から笑顔と活気が消え失せたサフィルス王国。寄生虫がやがて宿主を殺すが如く、落日を待つばかりのルベウス帝国。まともな統治が行われているのは実質的にリゥスイ連合だけのようなものだ。その気になれば両国を捻り潰すことも容易い、と思われているのかもしれない。
最も、現実的ではない。大陸最強と言われたルベウス帝国軍は、全盛期に比べたら練度は落ちているだろうが、帝国を掌握する議会の一声があればいつでも牙を剥くだろう。ルベウスの竜騎士部隊はリゥスイにとって脅威だ。魔法には長けるが武術は不得手な鉱人の多いリゥスイの兵は、地上の魔法部隊が主力になる。こちらの航空戦力は気休め程しかなく、それら相手だと部が悪い。
もし、サフィルスに攻め入れば自身の支持は失墜する。リゥスイにはサフィルスからの難民がいる。国民の気質も中立寄りだ。
どう転んでも何の得にもならず、そして何より――ミサキがその気にならない。
「そなた達を疑っている訳ではないが、念には念を入れねばならぬ。〝炎の紋章〟を見せてくれぬか」
そう言えば、二人は食い下がることなく、掌に収まる程の大きさの宝玉をこちらに見せた。昼の光の中でもそれは淡く燐光を放っている。サフィルスのものは青玉、ルベウスのものは紅玉の輝きを。それを見届けたミサキは、帯の中に忍ばせた小袋から、自らの所有する〝炎の紋章〟を取り出した。こちらは翡翠の輝きだ。三つの宝玉は共鳴し、熱を帯びている。
「間違いないな。お主らも知っておろうが、宝玉が熱を帯びるのは正しい持ち主の元で揃った時だけだ。光るだけならば、これを用いて〝

竜〃になることが出来る者が触れればそうなるが――」
　ミサキの生まれる前であったが、リゥスイの宝玉が宮殿で働く鉱人に盗まれたことがあったらしい。その力を解放される直前にその者は矢を射られて死に、すんでのところで大惨事は避けられたが、その際に宝玉は、確かに若者を〃竜〃にすべくその力を以って応えようとしていたという。ぞっとしない話だ。
「ふふ、正式な場ではないとは言え、こうして三国の代表が揃うとは。数奇なものであるな？」
　ミサキは畳の上に腰を下ろすことなく、着物の裾を少し払って王女――いや、今は〃女王〃である娘に近付いた。
「まずはお礼を。サフィルスの民を先んじて受け入れてくれたこと、誠にありがとうございます」
　女王は口を開く。鮮やかな青玉の瞳は、目を合わせただけで気圧されてしまいそうな圧を感じる。彼女の母親だった女も、瞳の色こそ違えどよく似た眼差しをしていた。
「礼ならば私もしなければならぬな。港町で、そなたの騎士が海賊を追い払ってくれただろう。我が民を救ってくれて感謝する。サフィルスの民なら今も元気にやっておるぞ――ああ、我が宮殿の警備兵にもサフィルスの者がいる。後で手配しよう。顔を見せてやってくれ。……さて、生憎と我も忙しいのでな。早速だがそなた達の申し出について話をさせてもらう。結論から言うと、リゥスイからの直接的な支援は出来ぬ」
　二人はこちらの反応をあらかた予想していたのか、目に見えるほど動揺はしなかった。
「だがそなたが手紙に記した通りにしよう。この件に関して、我が国へお前達が牙を剥かぬ限り――我は黙認する。リゥスイはあくまで中立――だが、個人の意思までは強制できまい。女王ユーディト、及び皇帝シャルル一行のリゥスイ滞在を許そう」
　襖を開けて手を叩くと、側に控えていた侍女が音も無く歩み寄って来る。彼女に、この離れに来客の準備をせよと告げた。
「滞在中はこの離れを使うと良い。後で建物の案内をさせる。それ

と、客人をもてなす宴を開かねばならんな！女王と皇帝、久しぶりの顔見せになるのだから、疲れた顔ではいられまいぞ？　ちゃんと王の顔を作っておけよ」

観光気分……という訳にもいかない状況であるが、首領ミサキに、「来客の準備の間に一周してこい」と舟に放り込まれたのでは仕方あるまい。

母は、女であるからと舐められることを嫌った。この国の首領も、同じ類のものであるだろう。〝赤鬼〟という物々しい異名も頷ける。

王には王である故の風格があるのだ。ミサキのように、あるいはシャルルのように、そしてかつての母や父のように――

首領の住む屋敷の周りには池が広がり、屋敷に近づくにつれ濃く鮮やかな色合いになるように蓮の花が植えられている。通路として木製の橋が渡され、護衛の兵士と思わしき姿と、それに混じって住民と観光客が行き交っていた。

船頭達が長い櫂を手繰りながら、蓮の間に舟を進ませている。編笠と、詰襟で丈の長い民族衣装が兵士の制服らしい。リゥスイはサフィルス、ルベウスとも大きく異なった文化を持っている。どこを見てもその風景は異国情緒に溢れ、新鮮な驚きを呼び起こした。

橋を挟んだ向こうを行く舟では、ムネモシュネとシャルルが手を振っていた。楽しんでいるようだ。ユーリシュカは揺れのせいかあまり顔色が良くない。

三人の乗る舟を操る白服の船頭が、傘を上げてこちらに片目を瞑って見せた。その目線の先は同じ船に乗る三人のうちの誰かでもなく、ユーディトでもなく、その後ろのシャーロックに向けられている。

「あっ、こないだの逆ナンお姉さんじゃん！」

ムネモシュネがそう言った。ユーディトは背後のシャーロックを振り返って尋ねた。

「何だお前、逆ナンされたのか？」

「そうなるんですかね……公務員ってそういうことだったのか」

「たまたまよ！　探ってた訳じゃないわ！」
　地獄耳らしい。振りまかれる愛想をどうしたらいいのか分からないのか、シャーロックはさりげなく視線を明後日の方向に逸らした。
「素晴らしい眺めだな。随分と観光客もいるようだが」
　そんなやり取りはさて置いて、ユーディトはこちらの船頭に尋ねた。船頭は「はい」と短く答える。
「これだけ兵士がいれば、良からぬことを企む輩も躊躇うだろう。それにこの足場で暴れ回れるのは相当の手練れではなければ難しそうだ。観光資源としての利用と、警備の両立……よく考えたな」
　水面に手を伸ばして触れる。ゆっくりと進む舟の動きに合わせて、泥の上に澄んだ水を湛える水面が波打った。
「……気をつけてください。落ちたら我々でも拾い上げられません」
　船頭の男が言った。
「この池の蓮は特殊な性質があります。本来の根の他に、落ちた生き物がいるとそれに絡んで沈め、養分としてしまう細い根を持っているのです。多くは小動物や虫ですが……」
「人もその範疇だ、と。まるで食虫植物ですね」
　シャーロックが呟いた。
　船頭が顔を隠すように目深に被った傘の下からは、橙とも薄紅ともつかぬ長い髪が流れている。腰に下げた剣は随分使い込まれているように見えた。
「船頭殿。君はサフィルスの人間か？」
　船頭は少しの間を置いて肯定した。ミサキの采配に違いない。
「傘を取って顔を見せてくれないか。……国を守れなかったことを攻めることはしない。君がここで生きたいのなら、私はそれを止めない。ただ、最後まで戦い抜き、生き延びてくれた君の顔を見たいんだ……駄目かな？」
　舟がゆっくりと止まる。船頭は振り向いて、頭の後ろで緩く結ばれた傘の紐を外し、顔を晒した。左目の下に泣き黒子のある、明るい黄緑色の瞳をした青年だった。角はない。細身に黒を纏った、中性的で流麗な印象の割に、落ち着いた低い声をしていた。

「君の名前を聞かせてはくれないか」
「ベルフリード。今は〝フリード〟と」
「フリード、私を恨んでくれてい。だが、言葉をかけるぐらいは許してくれ。君はどうやってここに？　……ああ、舟を進めてくれて構わない」
　フリードと名乗った青年は、編笠を被り直すと、少し舟の速さを落として語り始めた。再び舟は動き出す。
「……実は、その……覚えていないのです。死に瀕した際に、自分の名前と、剣の扱い方以外を忘れてしまいました。俺は川辺で倒れていたそうです。他に流れ着いた者もいたとのことですが、生きていたのは俺一人で――身に付けていた鎧から、サフィルスの兵であることは間違いない、と」
「そうか、随分と恐ろしい目に合わせてしまったのだな……すまなかった、君達を守れなくて」
　かつては剣を捧げた相手からの謝罪の言葉に動揺したのか、彼は僅かに吐息を飲み、櫂を操る手に力を込めた。それは怒りか、それとも、もっと穏やかな感情なのか。後者であればいいと思った。青年の顔は見えない。
「……到着しました。こちらの屋敷内のものは自由に使って構わないそうです。宴は明日、七の刻よりそちらの大広間で」
「分かった。ありがとうフリード、ミサキ殿にお会いしたら重ねて礼と、蓮の花が素晴らしかったことを伝えて欲しいのだが」
「確かにお伝えします」
　岸辺には純白の蓮が咲いていた。シャーロックが先に降り、ユーディトの手を取って上陸を手伝った。
　フリードの舟が遠ざかってゆく。少し遅れて双子達の舟も到着した。

2幕

十年もすれば愛称も耳に馴染んだ。フリード、と声をかけてきたワンの、穏やかな瞳がこちらに向けられた。髪を飾るティアラのような辰砂水晶の角が、明るい日差しを帯びてキラキラと光った。

「妹がお弁当作って来たって。皆で一緒にどう？」

編笠を僅かに上げて「いや、俺は」と断りの返事を入れかけたところで、「あ～疲れた疲れた」と背伸びをして、肩を杖で叩きながら入り込んできた声で遮られる。ワンの妹のアルだ。額から蒼針水晶の角が伸びている。

「私も混ぜてよ、腹ペコなんだ」

「ご苦労様。じゃ二人も行きましょうか」

「フィーアは？」

「別にお弁当作って置いて来たって」

どうやら断らない事を前提に話が進んでいるようだ。こうなったら逃れようがない。悪い気はしないでいる。

フリードは編笠を外して二人の後に続いた。

「でね！　ミサキ様ったら、色気が欲しいなら、色を変えるよりスリットを深くしろだの何だの！」

「首領は好意でおっしゃっているんだろうけどな、うん」

「ミサキは昔から、『脚出しとけ』みたいなところあるものねぇ……」

彼女達は四きょうだいだ。全員が黒い髪に水晶の角を持つ。今日は上の三人しか揃っていない。弁当を作って持って来たのは三女のトロワだ。彼女の角は二つに結い上げた髪の結び目の辺りに、蝶が羽を広げたような形のものであった。

何やら制服の色の話をしているらしい。確かに、先日顔を合わせたトロワの制服は白だったが、黒に変わっている。それに関して、首領にからかわれたようだ。

「お洒落は楽しいけどたまに嫌になるわ……。ひたすら己との格闘

じゃない。男の人ってそういうのはないのかしら、ねぇフリード」
胡桃の入ったパンに卵を挟んだものを食べていたところで、自分に話を振られた。
「……制服の色を変えたのか？」
「そうよ。見ての通り。白じゃなんだか子供っぽい気がして」
「似合ってるじゃないか」
「あ――ああ、そう。ありがとう。ま、貴方ぐらい顔が良けりゃ、何着ても様になるでしょうね！」
トロワはバシバシと肩を叩いた。褒められているのか、からかわれているのか。判断がつかない。
話はお洒落の話題から、リゥスイを訪れたサフィルス女王一行の話になる。真面目な空気になるかと思いきや、ワンが女王の従騎士に声をかけたが、いまいち手答えがなかっただの、一緒にいた双子の性別が分からなかっただの、ルベウス皇帝だという少年が可愛らしかっただの、大して真面目でもない話だった。
昼休憩の時ぐらい、仕事から離れているのも悪くはあるまい。むしろそうでないと休憩にならない。暖かく穏やかな秋空の下で、他愛もない話を耳にして過ごせるような時間は尊いものだ。
……祖国で語らうような友もいたかもしれない。だが、もう失われて久しい。元の上司であろう、女王の顔を見れば何か思い出すかもしれぬぞ――とは首領に言われたが、何も記憶が蘇ってくることはなかった。
ともあれ、この地に安息を見出すことを、あの女王は咎めないと言った。それは建前ではなかったように感じる。
「……あら、お昼はまだなの？　良かったら皆もどう？」
ワンの声がした。姉妹達の会話が止まる。大剣を背負い、耳の後ろから伸びる黒曜の角と短い銀髪に、眼鏡をかけた鉱人の男が、複数の兵士を連れて通りがかった。首領の側近のオブシウスだ。ワンと首領とは、幼馴染であると聞いている。
彼はワンには答えず、フリードを見るとその色白の顔に、嫌悪感を隠しもせず「……角なし、」と小さく呟いた。それを耳聡く拾ったの

か、トロワが「何、ケンカ売ってんの？」と立ち上がる。
「……呑気ですね、ワン。客人とは言え、侵略者となるかもしれない相手がいるというのに。落ち着いて食事なんか取っていられませんよ」
「貴方は殺気立ちすぎよ、オブシウス。はぁ……トロワちゃんも落ち着きなさい」
「だってワン姉様！……ちょっと、フリード？　どこ行くのよ！」
どうしたらいいのか困惑しているアルに、弁当の礼を言ってフリードは席を外すところだった。トロワの声が背中に突き刺さったが、振り返らなかった。

木陰に身を潜めて髪を結い直し、編笠を被り直したところでトロワがやってきた。
「ちょっと貴方……！　悔しくないの、あんな風に言われて?!」
息を切らせている。走って追いかけて来たのだろうか。大した距離ではないが、魔道士の体力では辛そうだ。
「……大丈夫か？」
まだ口を付けていない水筒を差し出すと、彼女はそれを一気飲みし、キッとフリードを睨み上げた。普段は愛想の良い彼女ではあるが、目を吊り上げた形相でとてつもない気迫を放っていた。思わずたじろぎ、傘を深く被って目を逸らすと、「こっち見なさい！」とそれを奪われた。
人に顔を晒すことは好まない。人見知りするのだ。元々そうであったのかは分からない。
その上、ここでは自分は異邦人であり、角のないことも相俟ってよく目立つ。それが良い事ばかりならば構わないのだが、生憎とそうでもないこともある。だから編笠を深く被り、あまり顔を晒さないようにして来たのだが。
「えーと、……俺は気にしてない。あの人はいつも、俺に対してはあんな感じだろう」
「貴方が気にしてなくても、仕事仲間をバカにされて私は悔しいわよ

！　今時年寄りでも……その、『角なし』なんて言ったりしないわ」
　彼女は躊躇いながら、時代遅れの蔑称を口にした。あの側近にそう呼ばれるまで、そんな蔑称があることも知らなかった。気にしていない、というのは事実だ。
　ひとしきり喚いて冷めたのか、あるいはあまり反応のないフリードに呆れたか、トロワは溜息を吐いた。そして、「ついでに」と違う話題を口にした。
「……奉納祭の舞い手の件だけど。やっぱり貴方に頼みたいわ」
　彼女は背伸びして傘を被せてくれた。冗談だろ、という言葉が思わず口をついて漏れ出る。
「余所者の俺が立つような場所じゃない」
　余所者、という言葉に気を悪くしたのか、彼女はあからさまに眉根を寄せた。
「自分が余所者だと思うの、いい加減やめたら？　少なくとも、私はそうは思わないわ」
　奉納祭は毎年この時期に行われる。二代目リゥスイ首領の時代に起きた民族紛争を、自らの命を投げ打って止めた舞巫女を祀るものだ。時代が流れた今は、死者への鎮魂という形に広義の解釈がなされて伝わっている。奉納祭の最終日には、巫女の舞を模した神楽舞が死者達へ捧げられる。神楽舞を捧げた者が、次の年の舞い手を選ぶしきたりだ。
「第一、舞い手は〝巫女〟なんだから、男の俺じゃ務まらないだろう？」
「あら。男性も〝神子〟として舞台に立ったことは一度や二度じゃないわよ？　他の候補の子達も貴方を推してるわ」
「他の候補もか？」
「ええ。正直なところ、あの舞は鉱人にはキツいのよ。私だって去年は激痩せして、ひと冬の間調子が悪かったもの。ああ、誤解しないで頂戴ね、だから貴方に辛い役目を負わせようって訳じゃないのよ……。とにかく、貴方が第一候補だってミサキ様にも言っておくから。腹を括っておいてね」

そろそろ昼休憩も終わりの頃合いだ。一方的にまくし立てたトロワは、ひらひらと手を振って踵を返した。嵐が過ぎ去って行ったような気分だ。

気が強いが優しい子だ。小言を言いながらも自分のことを気にかけてくれる。彼女がいなかったら、記憶を失って見知らぬ場所で生きる生活はもっと暗いものになっていただろう。

3幕／幕間

歓迎の宴、とは聞いているものの、どう見ても歓迎する方が大いに盛り上がっている。首領もすっかり酒が入って上機嫌だ。酒を注いでやるべきか、と思い陶器の器を手に近寄ったが、

「良さぬか。お主らは客であろう、我らに酌などせずとも良いのだ！好きに飲め！食え！わはは！」

……とつっぱねられてしまった。ユーディトの記憶にあるもてなしの宴というのは、もう少し荘厳なものであり――言ってしまえば、要するに堅苦しいものであった。国が違えば文化が違うのは当たり前だ。決してこの賑やかさは嫌いではない。双子は宮殿の兵士と世間話をしており、シャルルは女中達に囲まれている。楽しそうで何よりだ。

「なぁ～女王よ。そなたの竜騎士……随分といい男であるな？」

盃を片手に近寄ってきたミサキは、ユーディトの耳元でそう囁いた。渦中の彼はというと、すぐ近くで自分のことが話題に挙げられているのに気付いていないようで、黙々と食事をしている。料理を運んでくる者に「可能ならば酒より食事を」と密かに耳打ちしたのだが、その通りにしてくれたようだ。他の者より膳に盛られた料理が多い。気に入ったのか、いつもより表情も穏やかにしっかり食べてくれている。

「私は角だけで人を見たりはせぬが、あれの角は美しいな。それに鉱人だというのによく鍛えておる。身体つきなどまるで彫刻のようではないか。……どうだ、我に輿入れさせぬか？」

茶を吹きかけた。

「そなたでもよいぞぉ？　悪い話ではないだろう。我がそなたを娶れば、サフィルスは正式にリゥスイの庇護を受けられる」

「ご冗談を、首領殿。あれは私の騎士です。くれてやる訳にはいきません。そして私は女です」

「リゥスイは同性婚できる」

「そういう問題では……」

「はいはい首領、女王様が困っていらっしゃいますよ」
助かった。ユーディトは心からそう思った。宮殿の蓮池の船頭をしていた女性、ムネモシュネ曰く〝逆ナンお姉さん〟――ワンだ。
「お気になさらないでいただければ。首領は酔うと誰にでも婚姻を迫るのです」
把握した。ワンがそう言った側から、首領は通りがかった女中に
「お前は髪が綺麗だな、気に入った。我に輿入れせよ！」と声をかけていた。慣れている様子で女中は軽くやり過ごしている。
「……はぁ、しかしなんだ。楽団の一つでも呼べば良かっただろうか。暇はしていないか、女王よ」
「いえ。部下達も、皇帝陛下も楽しんでいるようですから」
盃を置き、扇を広げたミサキが気怠げに呟いた。これだけ賑わってなお、足りないとでも言いたげだ。
「楽団も良いが、我は演舞や模擬試合を見るのが好きでな。……そうだ。そなたの騎士達と我の兵で一戦設けぬか？」
「模擬試合ですか。私は構いません。当人達に聞いていただければ」
「はーい！一番槍ムネモシュネ、謹んでお相手させていただきまーす！」
手を上げたのはムネモシュネだ。それを見たミサキの紅を引いた唇は、悦を帯びて笑みの形をとった。これは代理戦争では……と僅かに過ぎったが、おそらく彼女はそこまで深く考えていない。

一番槍を務めたムネモシュネは、人間で槍使いの老兵士に敗れ、二番手のユーリシュカは魔法剣使いに勝利した。夜も更け、この模擬試合を以って宴を終了するとの触れがなされた。人々の視線は嫌が応にもこの一戦に集中している。
相手は、先日顔を合わせたフリードだった。大広間から外にせり出すようにして作られた舞台へ移動したシャーロックは、侍女が持ってきた斧を手に取った。魔道書は腰に下げている。
「君の話を聞いて他人事とは思えなかった。……俺は〝星の民〟だ。

君のように流れ着いてユーディト様の元にいる」
「奇妙な偶然だな。……すまない、王女付きの騎士であるのならば、きっと貴殿のことは目にしている筈なのだが、思い出せない」
「気にすることはない。だからといって、かつての君の忠誠心が消えてなくなる訳ではないだろう」
はじめ！という審判の声が上がる。
フリードの手元が動いた。武器は腰の剣だけではないのか――時間差で二本、放たれた短刀を弾き落としている間に、獲物を見つけて降下する水鳥の俊敏さで彼は接近する。高い位置を狙って繰り出された切り上げを後方に跳躍して回避し、剣ごとねじ伏せようと斧を振り下ろした。大振りの一撃を僅かな動きで避けると、彼は器用に手の中で剣を逆手に持ち替え、やはり高い位置を狙って突き立てた。
鉱人の角は弱点の一つだ。彼はそれを狙っている。長身に角の大きさ分の上背が加わるシャーロックはいい的だ。だが、先を多少欠いた程度ならば平気だ。角は日々生え変わって自然剥離する。欠けた角の先が背後で落ちる小さな音を聞いた。臆することはなく、仕切り直しを狙って踏み込む。この間合いではお互いに近すぎる。一度体勢を整えなければ武器を振るえまい――そう思ったところで、シャーロックは自分の身体が浮き上がるのを感じて息を呑んだ。間合いを仕切り直すどころか、さらに接近したフリードが投げを繰り出したのだ。
斧が手から落ちる。角を庇いながら横に転がって受け身を取り、膝立ちで再び彼と対峙した時には、既に魔法の詠唱が済んでいた。魔力の高まりを察知したらしい、固唾を呑んで見守っていた観客達がどよめいた。
フリードの明るい色の瞳がすっと細められる。こちらを捉えんと構えた指には持てるだけの短刀が握られていた――どちらもこの一撃で仕留める気だ。いいだろう。瞬きの刹那には飛来するシャーロックの魔法と、獰猛さすら覚えるフリードの瞬発力。速い方がこの一戦の勝者だ。
「――待て待て待て！やめだやめ!!舞台を吹っ飛ばすつもりかお前た

ちは！」
焦りを滲ませたミサキの声が上がる。続いて、安堵したような落胆したような声も。
二人はそれを耳にして、同時に武器を下ろした。

「やだ、まだ飲んでるんですか首領」
夜風に当たっていると、書簡をいくつか手に抱えたワンが顔を出した。警備の報告に来たようだ。宴の後だろうが仕事はしっかりこなしてくれる。酒も飲んでいなかった。彼女の美徳の一つだ。
「ただの茶だ。もう今日は飲まぬ」
宮殿の蓮池は、警備の為に夜通し篝火が焚かれている。伏した乙女の瞼のように閉じた蓮の花がその灯りで仄かに橙を帯び、夜の闇の中に僅かな陰影を滲ませていた。行き交う警備の者の朧気な輪郭は、さながら亡霊のように頼りなく揺らめいている。
「……オブシウスは？　宴の途中で席を外したようだったが」
「事務仕事が残ってるって。明日でいい仕事は明日やればいいのに」
「まぁ、元々あのような場は好まぬ者だ。だがな、あれは詰め込み過ぎだ。いつか壊れてしまいそうだ。さて、どうしたものかな――あれを私の傍から離れさせる訳にはいかぬ。優秀だからな」
ワンと共に長い付き合いになる。先代首領に師事し、共に学んだ時からだから、もう七十年と少しだろうか。次の首領として指名されたのは、先代の息子であるオブシウスではなくミサキだった。この長い付き合いもここで途切れるかと思ったのだが、友として支えさせてくれと彼は願った。そしてミサキはそれを叶えた。
「話はトロワから聞いたぞ。頭から煙を噴き出しそうな勢いで直談判された」
「……どうしてこうも、あの子はフリードにだけあんな風に当たるのかしらねえ」
別の器に、茶を注いでワンに差し出す。小さな声で彼女は礼を言って受け取ってくれた。

「鉱人ばかりで兵を構成する訳にはいかぬ。それに鉱人だろうが、人間だろうが、どちらも我の大切な国民だ。我は誰にでも公平であるつもりなのだがな……時々、これで良いのかと自信を失いそうになる」
「貴女は良くやってるわ。貴女が首領になるまで、この国の文化は余所より十年も遅れてたじゃない。鉱人と人の距離だってずっと遠かった。昔の時代に戻りたい……っていう人もたまにいるけど、私は嫌よ」
「ふふ、お前にそう言われるとな……つい舞い上がってしまうではないか。褒めてくれるな」
　酔いは覚めた。酔いが回るのも早いが覚めるのもあっと言う間だ。ミサキは髪を払うと、ワンに書簡を机の上に置いておくように指示し、蓮池の見渡せる高楼を後にした。

【幕間】
「我はもう少し湯に浸かっているつもりだが、ところで。そなたの騎士に赤いのと緑のがあったろう。あれは男か？女か？」
「ユーリシュカ……緑の方は兄と聞いていますが。赤……ムネモシュネは、何と言うかその、私もよく知らないのです」
「何と！　……どちらか気にならぬか？」
「好奇心がないと言ったら嘘にはなりますが。男か女か分からなくとも、別に私自身困ったことはありませんでしたから」
「ここは間もなく男女混浴になる。そなたの騎士がもしここに来たら、湯あみ着越しでも流石に性別が分かる！」
「そもそもあの子に、自分の性別云々という意識があるかは疑問です。男女の区別を付けることにどれほどの意味があるか……まぁ、お好きになさってください。あの子も気にしないでしょうし。ですが、どうか湯あたりなさらないでくださいね？」
「ああ～負けたーーー!!くーーーやーーーしーーーいーーー!!!」

「敗因は君にあるよ。相手が老兵だと侮ったろう？　老いてなお槍を持って前線にいるっていう時点でお察しだろう。ほら、温泉卵食べるか」
「食べる!!おいしい!!!」
「みなさんお揃いで。こんばんは」
「まだ食べてるのか、モネは」
「陛下こんばんは！あとシャーロックも！卵食べる？」
「俺はいい。」
「僕に一つください」
「君達はもう風呂は済んだのか？」
「ああ、私もムネモシュネも一番先に入らせていただいた」
「そうか。……何だか騒がしくなったな。どうしたんだろう」
「首領が湯あたりだそうです。そんな声がしますね」
「そっかー。お大事にだねぇ」

4幕

活火山が点在するリゥスイ、特に大火山があるクマノでは各地に温泉が湧くという。滞在中使うようにと当てがわれた離れには、庭に囲われた野外の浴場が付いていた。露天風呂、という名前らしい。

髪を結い上げて湯につかっていると、カラカラと引き戸を開ける音がした。剣はいつでも抜ける位置に置いてある。柄に手をかけたところで、湯煙の中から「待たれよ、女王」と声がした。宴では随分と酔っていたように見えたが、今はそんな様子もない。真珠のように白い肌と美しい黒髪、そして柘榴のように艶を帯びた赤の瞳と角が、篝火の下で鮮やかに浮かび上がった。

「風呂にまで剣を持ち込まずとも警備の者がいる。それとも我らが夜襲をかけるとでも思ったか」

「いや――それは」

「冗談だ。仮にそなた達を仕留めるつもりなら、国に入る前にもうやっている――しかし女王よ、剣は錆びぬのか？」

ミサキはそう言いながら湯の中に入ってきた。一度柄にかけた手を戻す。

「三英雄・紅竜バイルの肋骨と逆鱗を鍛えた剣です。手荒に扱ったことは一度や二度ではありませんが、壊れる気配を見せませんね」

「流石、竜族の遺物といったところであるな。羨ましいのう。我が国にも、初代首領にして三英雄、大魔術師フェイツェイから伝わった魔道書があったが、内乱の折に喪失してしまった」

「後世に遺して行くべきものなら、貴女ならこれからでも作っていけるでしょう。気に病むことはないと思いますが」

化粧は落としている筈だが、それでもなお赤い唇に彼女は仄かに笑みを浮かべた。王として、女としての誇りと矜持と自信。それが全身に表れている。

「ところで――我がここに参ったのはな、そなたと内緒話をする為だ。内緒話にはこういった場所が向いておるのでな」

少し声を落として首領は言う。その声色に王としての覇気はなく、

どこか感情的に思えた。
「先日のことだが、ルベウスに偵察に行ってな――女王よ、そなたは先代ルベウス皇帝オルヒの乱心の理由を知っているか？」
「いえ……存じ上げません」
　オルヒの乱心は隠匿のヴェールに包まれている。シャルルですら、その理由を知らないようだ。
「そもそもとして、オルヒは城の中で〝炎の紋章〟を使い竜になった。その際に城の一部が崩落している。物理的な痕跡も瓦礫の下……とばかり思っていたのだがな。当時、先代皇帝の元で執事をしていた者と接触した。その者が手がかりになりそうなものを密かに回収して、持ち出しておったのだ。当人も当時の記憶をしっかり憶えている」
　先代皇帝は厳しい王だったが、それだけではなかったことは記憶に残っている。娘の懐妊を誰よりも喜び、そして出産の代償の死を誰よりも悲しみ、遺された孫たちを我が子のように、深く愛していた。いつだったか招かれた晩餐会では、孫達のことを誇らしげに語っていた。若かりし頃は自ら騎竜を駆り、軍を率いて蛮族を制圧し、愛する妃には歌を贈ることもあったそうだ。シャルルは歌が得意だが、そんな所は祖父譲りの才能なのかもしれない。そんな皇帝が何故、というのは、ユーディトだけではなく、誰しもが思ったことであろう。
「これはルベウスだけでなく、我がリウスイとてそうであるし――サフィルスも例外ではなかっただろう。国というのは一枚岩ではない。様々な思惑と勢力が存在している。皇帝は国内の、いや、もっと近いところ――共に政治を執り行う為政者達の中にいる者どもに、手を焼いておったそうな。要は、皇帝のもとで美味い思いを出来なかった連中だ。その連中が、後に何になったかは考えるまでもないだろう。〝議会〟の連中だよ。オルヒは当時既に齢八十、我とてそれぐらいの歳であるが、人間と鉱人では流れる時が違う」
　賢帝故に、彼は焦燥したのだろう。その先に語られる言葉は、ユーディトの想像から大きく外れることはなかった。
「執事はオルヒの手記と研究記録を持ち出していた。手記には焦りの言葉が記されておった。それだけではない、側にいた執事殿もそれを

感じ取っていたそうだ。『自分が居なくなった後、国はどうなってしまうのか』、『幼いシャルルとキルシーを誰が護るのか』。オルヒの研究記録には――〝炎の紋章〟の力を、自身の延命に使うことが出来ないかと調べていたようだな」

「その果てがあの乱心……いや、乱心などしていなかった。皇帝は……」

彼は最後まで皇帝であろうとしていたのだ。気丈そうな首領が、声を落とすのも分かる。これではあまりにも居た堪れない。こんな惨い話があっただろうか。

「ああ。それが事故だったのか、あるいは意図的に〝炎の紋章〟を解放したのか、今となっては分からぬがな。これが真実に限りなく近いであろう。……オルヒとは短くない付き合いだった。あれが賢帝と呼ばれた時代も知っておる。オルヒは良くやっていたよ。惚れ惚れするほどいい男であった。

――だから、乱心して国を滅ぼしたなどと言われるのが私は我慢ならない。この話は誰も知らぬ。ルベウス国民でさえも、今の皇帝でさえも――」

「……シャルル殿には？」

「伝えねばならぬだろな。あの子は賢い故に――ああ、賢い故に、だ。受け止める器量は持っているだろう。話すこちらの方が覚悟するぐらいにはな。数日中に私から伝えるつもりである、そなたの口からは言わないでいてほしい」

内緒話は以上だ、と彼女は言った。ユーディトは返事の代わりに目礼を返すと、湯から上がった。

5幕

女王は一人で別行動だ。一人にするのは不安があったが、当の本人が一人にして欲しいと言うのだから口の出しようがあるまい。サフィルスから移り住んだ人々に会っているようだ。

シャーロックは朝からいなかった。魔道書について調べものがしたい、と言っていた記憶があるので、図書館にでも向かったのかもしれない。

そしてユーリシュカとムネモシュネは、首領から呼び出しがかかったシャルルの付き添いだ。彼はさながら目で見るように、視覚以外の感覚で過ごしているが、それでも流石に初めて来た場所は不安があるようだ。宮殿の入口まで付き添った所で、後はリウスイの女官が引き継いでくれた。

こうやって待っている間は、不届き者がいないか見張っているのが騎士の役割なのだろうが、生憎とその役割はリウスイの警備兵達も担っている。手を抜く気はないが少々手持無沙汰な感覚がある。

「なんか身体なまっちゃうね」

リウスイでの滞在は、特に波乱もなく数日が過ぎようとしていた。当然監視の目はあるものの、不便さや露骨な警戒心を向けられる感覚もなく、さながらちょっとした休暇のような穏やかな時間が流れている。ムネモシュネは、槍にもたれかかりながらそう言った。

「村で暮らしてた時も、そんなに毎日バタバタするようなことはなかったけどさ、ごくたまに山賊は来る訳だし。姫様は特にいつもピリピリしてたじゃない？」

「そうだな。姫様も羽を伸ばされているみたいだ」

ここに来てから、主は少しばかり穏やかな顔を見せるようになった。最近は用意されたリウスイの民族衣装を身に纏い、髪を結い上げた格好で出かけて行く。

「これから戦争やろうっていうのにね。でも――こんな風にさ、ゆっくり生きるのも楽しいんだろうね。別に今の暮らしが不満ってことじゃないけど」

「まぁ、同感だよ。でも祖国を取り戻せば、そんな日もいつか来るかもしれないし、穏やかな暮らしをする時があるのかもしれない。私達だって、いつまでも剣や槍を振るっていられる訳じゃない」
するとムネモシュネは、首だけをこちらに向けて飴色の瞳で見た。
「――嘘。そんな気微塵もない癖に」
我が半身ながら時々ドキッとする。無垢故に何もかも見透かされているような感覚がした。
事実だ。戻る家も、血の繋がった家族ももう半身以外にはない。あの日に二人を攫った者達は、他にも貴族の家に押し入って子供をかどわかしていたようだった。馬車にいたのは身なりの良い子供たちばかりで、おそらくは後に親の仇、親族の仇と立ち上がる者を減らそうという見込みもあったのだ。
その子供達はどうなったのか。二人の家はどうなったのか。二人の時はあの夜で一度止まり、そして女王に出会ったことで再び動き出した。歪に繋がりあったままで。後悔はしていない、だが心残りがないと言えば嘘になる。
「僕はそうだよ。他の人生なんて欲しくない。僕はユーディト女王の槍だ。だから折れるまでずっと一緒にいる」
「……ああ、私だってそうだ。そういうこと、聞くまでもないだろう」
それでも進む他ない。今この身で抱えたもの以外に、何が必要か。ムネモシュネは小さく笑い、「じゃあもっと強くなろうね、一緒に」と言った。
宮殿の扉が開いた。女官に付き添われたシャルルが戻って来たのだ。二人は姿勢を正す。いつもならば、見えずともその聡明さに瞳を輝かせている彼であったが、どうも様子がおかしい。表情が曇っている。蓮池に渡された通路を通って宮殿を離れるまで、彼は二人に付き添われて歩いていたが、「すみません、一人にさせていただけませんか？」と一人歩き去ってしまった。
一人にさせてくれと言ったのだから……という躊躇いがあり、二人は二の足を踏んだ。その間に、彼の姿は消えていた。これはまずい。杖をついているからとは言え、一人にはしておけない。ましてやあん

な顔の者を。

涙ひとつ零れてこない自分を、冷たい人間だと思った。

他者の記憶の中のものを読み解くことでしかもう感じられない、立派な祖父の姿。

それらを壊したのも皮肉なことに祖父自身であった。最も、祖父もそれを望んではいなかったのだろうが。

人の気配が遠ざかり、小さな池か泉に水が流れ込む静かなところで、シャルルは座り込んだ。今は独りになりたいと、無責任なことを言ってしまった。今度は自己嫌悪がじわじわと胸の中を埋めていく。でも、こんな顔を見られたくない。

果たして、どれぐらいの間そうしていただろうか。膝に顔を埋めるシャルルの耳は、藪を掻き分けてやってくる足音を捉えた。あの双子の騎士ではない。二人ならば足音は二組ある筈だし、鎧を纏っているのだから音で判る。今聞こえるのは、軽い足音だ。杖を拾い上げて立ち上がると、身を隠すのに丁度良さそうな木を探し当てた。こちらの気配を最小限にして、その裏に隠れる。

微かな衣擦れの後に、水の中に飛び込んだ音が続く。泳いでいるのだ。息継ぎで漏れる吐息は女性のもので、穏やかに、時折激しく立ち上る飛沫の音はさながらひとつの楽曲のようだ。深く水底に沈んでいたような胸の中が少し、洗い流された気がした。「人魚」という美しい女の海魔の伝説を詠った旋律があるが、耳に届くのはまさしくそれを顕したような流麗な音だ。

パタン、という音が波のさざめきを途切れさせる。杖が倒れた音だった。

「――誰だ！」

凛とした声だ。聞き覚えがある。先日、長風呂で首領が湯あたりしたという騒ぎがあったが、その時に駆けつけてきた軍医の声だ。

「すみません！盗み見するつもりはなかったのですが！」

「こ――皇帝陛下?!」

木陰から姿を現してそう言えば、上ずった声が上がった。
「そ、その……失礼しました！私は帰ります故――いたっ！」
ザバザバと水から上がる音。そして小さな悲鳴。シャルルは慌てて彼女に駆け寄った。
「陛下、どうかお気になさらず！」
「ああ、すみません、お召し物を着られてないとか…?!」
「違います違います！」
「驚かせてしまってすみません。あまりにもその、楽しそうだったもので」
一刻もこの場を去りたいといった様子だ。何故だろうか。シャルルは思い切って尋ねた。
「まるで泳いでいるところを人に見られたくないようですが。不躾でなければ、理由をお聞かせ願えませんか？」
ぴた、と彼女が動きを止めた感覚がした。
「貴女が『人魚』だと言うことは誰にも言いません」
「……情緒ある言い方をなさるんですね、皇帝陛下は……」
観念したような口ぶりだ。彼女は自分の名を「アル」だと名乗った。滞在初日に船頭をしてくれた女性がいたが、その者は姉に当たるという。
「陛下もご存じでしょうが……我々鉱人は体質上、身体を動かすことは不得手です。なので、そもそも身体を動かす趣味を持つものが少ないのです。だから、その……水泳が趣味だなんて、変な目で見られてしまう……」
「どうしてですか？　貴女のその趣味が誰かに迷惑をかけましたか？」
「お言葉ですが陛下、この国にはまだ古い考えの人も多いのです」
凛とした女性、という第一印象だったが、その声がだんだんと小さく萎んでいく。シャルルはハンカチを取り出しながら、先ほど何処かを負傷したのではないかと尋ねた。
「……もし貴女にそういうことを言う人が現れたら、僕を呼んでください。僕は戦いもできないし、目も見えないけど、口論だったら誰に

も負けません。論破して差し上げますから」
二の腕にハンカチを巻いてやりながそう答える。は、と彼女が小さく息を呑んだ。
「いーーーーたーーーーーーー!!!」
穏やかな沈黙をぶち破った、ムネモシュネの絶叫に二人は飛び上がった。
息を切らした二人の騎士が鎧をがちゃがちゃ言わせながら駆け寄ってくる。
「陛下すみません、一人にせよとの仰せでしたがそうもいかず」
「追いかけてきました！ってなんかこれ空気読まない感じっぽいですね!?やっぱり帰った方が良いですか?!」
一気に賑やかになった。アルがたまらずにクスクスと笑い出した。
「……ごめんなさい、なんだかおかしくて。賑やかな人たちですね」
「かまいません。実の所落ち込んでいたのですが、何だか少し、気分が良くなりました。ありがとうございます、アルさん」
そう呟いたシャルルの頬に、ぽつりと冷たい雫が落ちたのを感じた。雨粒だ。空気の匂いが変わり始めている。さっきまであんなに天気が良かったのに。柔らかく降り注いでいた陽光が雲に遮られたのか、急な冷えを身体に感じた。

6幕／幕間

図書館に足を運び、そこから得た情報を元に地図を辿っているうちに昼近くになっていた。朝は天気が良かったが、空の雲が少しずつ厚くなり始めている。天気が崩れるかもしれない。この用事が済んだら戻った方が良さそうだ。

目的の場所はすぐに見つかった。リゥスイの独自言語と大陸共通語で「技術開発局」と記されている。国家公認の施設の筈だが、良い言い方をすれば風情ある雑貨屋のような、良くない言い方をすれば古い民家のような……そんな家屋がぽつんとあった。場所も宮殿とは大して近くもない。おまけに誰かが働いているような気配もない。本当にここで合っているのか……？とシャーロックが不安に思い始めたとき、何かが崩れるような音を耳にした。

「――誰かいませんか？」

窓があった。そこから声をかける。中はお世辞にもあまり綺麗とは言えない。不衛生ではないが、とにかく物が多く乱雑としている。机の上に置かれたガラス瓶と鉱石、開かれたままの書物。レンズのようなものが覗いた箱。何に使うか検討もつかない、謎めいた形状の物品がいくつか。それらを眺めていると、奥のほうから微かに声が聞こえた。「助けて」と。先程の崩れた音といい、嫌な予感しかない。シャーロックは入口へ回り扉に手をかけた。鍵はかかっていない。扉に付けられた鐘が、場違いな程穏やかに音を響かせた。

「はぁ～死ぬとこだった。ありがとうありがとう！」

嫌な予感は的中した。奥では小柄な鉱人の少女が、壊れた本棚の下敷きになっていた。仮の置き場として、床や机の僅かに空いたところ、椅子の上に積み重ねられた本のせいで、建物の中はさらに狭く感じるようになってしまった。座る椅子もない。申し訳ないけど、とシャーロックは床の上に置いた座布団に通された。

「話は司書のじいさんから聞いてるよ、竜騎士の旦那。ようこそ僕のラボへ」
　黒い生地に黄色の刺繍が入った、丈の短い民族衣装。毛先に黄色が混ざる黒髪のおかっぱ頭には黄水晶の角が二本。推測がついた。ここに来て、『彼女達』とは何度か顔を合わせている。記憶に残りやすいことから多くの者が『彼女達』を知っている。
「君は〝四きょうだい〟の一人か。一番末っ子かな」
「正解！　僕はフィーア。技術開発局の局長さ。ま、先代局長の時代に予算削減の煽りを食らってさ、今じゃお察しの陸の孤島だ。前にいた人も定年で辞めちゃったから、局員は僕一人、でも僕は仕事辞める気ないし、嫌でも局長やんなきゃならないっていうか……」
　愚痴混じりだ。彼女の声量はだんだん大きく早く荒くなっていく。ずいと身を乗り出して彼女は捲し立てた。
「というか聞いてくれよ旦那ァ！そもそもとして予算削減の理由がさ、『技術革新は現在のリゥスイでは急いて行う必要もない』ってさ！　技術の進歩を拒絶するとか、この時代に人類の叡智ドブに捨てる気かよって?!　やっと僕の技術と頭脳を生かせる所からお呼びがかかった！って矢先にこれだぜ？　首領もオブシウスも呆れてたけど、賛成多数じゃなァ……。あ、オブシウスの眼鏡も僕が作ったんだ。あいつ、目がよく見えるようになってから、格段に戦闘技術が上がったんだ。今では俺が護身術教わってるくらいなんだぜ」
「わ……分かった。流石に部外者の俺でも分かる。確かにひどい境遇だ。それは」
「だーーろう？」
　随分年若く見えるが、知識に長ける鉱人らしく優秀であるようだ。同情してもらえて気が済んだのか、一転して不気味な程にフィーアは落ち着いて、鼻歌混じりに立ち上がると机へと向かった。しばらくして彼女は、幾つかの古びた書物と鉱石を持って戻って来た。
「さてと旦那。最適化（デフラグ）だったかな」
「ああ。山の奥深くで暮らしていたから、道具もなかなか手に入らなくてな」

魔道書は物理的な本としての手入れや、魔力の残滓を取り除くなどの調整が必要となる。そうでなければ魔法は安定しない。最悪、暴発の危険性さえある。シャーロックの使っている魔道書・ドナスタークは、故郷から持ち出せた唯一の物品である。数百年もので、骨董品や古美術品ではなく最早出土品、と言っても過言ではない。普段は威力を落とし、その分の魔力を広範囲・遠距離射程を得る為に回しているが、そうしているのはそれだけが理由ではない。不完全な手入れしか出来なかった故に、安定しないのだ。

「実のところは俺も、これを完全に理解しないまま使っている。理解する前に民族紛争が起きて、資料も焼け落ちてしまった。それでも大丈夫か？」

彼女は片手でドナスタークを開き、もう片手では別の本を開きながら言った。

「うーん、これは難解。二、三日預からせてもらってもいいかな」

「ああ、構わない」

「……道具探さなきゃな……」

「まずは掃除と整理整頓からか……どこからやったらいい？」

シャーロックは腕まくりをして立ち上がった。フィーアも続く。

「待ってくれよ、お客様にそんなんさせられない！」

「無償でやってもらおうなんて気はないからな。それに、君一人じゃ動かせないものもあるだろう」

黄色の瞳がこちらを見上げる。彼女は小さな声で「ありがとう」と言った。

「あっ、でも機密事項に触れるものもあるから。むやみやたらに引き出しとか、開けないでもらえると助かる。……それと」

彼女の指が壁に向けられた。壁に柄の長い斧が立てかけられている。

「あれをあげる。試しに作ってみたんだけど、鉱人で武器を振り回す人って少ないから。誰にも使われないままなんだ」

手に取ってみてよ、と言われるがままに触れる。それは適度な質量と取り回しの良さがあり、埃を被っているのが惜しいぐらいのもの

だった。先端には黄色を帯びた鉱石が取り付けられている。
「かなり癖があるやつだけど。旦那なら、使いこなせるかも」
「いいのか？　随分と気前がいい釣り銭だな」
「いいよ。旦那に合わせて調整したら、改めて届けるから」
「それはありがたいな、助かるよフィーア」
「必ず旦那の気に入るようなものに仕立ててみせるから。男と男の約束」
聡明さに年齢など関係がない。相当の努力を積んでここまで来たということは、彼女の立ち振る舞いから想像できる。
彼女――彼女？
違和感を覚えた。さっき、聞き逃せないようなことを言われたような……？
「なぁフィーア。さっき何て言った？」
「旦那に合わせて調整……」
「いや、そのくだりの最後」
「男と男の約束？」
「……そうか。君は四きょうだいの〝末弟〟か。ああ、そう言えば誰も『四姉妹』とは言ってなかったな……」
「あはは、こんなんだからよく間違えられるんだ、気にしてないよ。僕は好きでやってるんだし。ちなみに、トロワ姉と僕は二番目のママの子。皆仲が良いんだぜ。鉱人は長生きするから、再婚するのも珍しい話じゃないだろう？」
人を見かけで判断するのは本当に止めた方がいい。シャーロックは心からそう思った。

【幕間】
首領ミサキに呼び出されて技術開発局へ赴けば、先に首領と四姉弟、それと側近のオブシウス、警備兵のフリードが集まっていた。
何やら賑やかだ。四姉弟・末弟のフィーアが、四脚で固定された何

やらレンズのようなものがついた箱をゴソゴソやっている。その謎の箱が向けられた先では、中央のミサキが椅子に悠然と腰かけて座り、その両脇にはワンとオブシウス。後ろにはアルとトロワとフリードが立つ。
「あ～ごめん、アル姉さんとトロワ姉、位置交換して。そんで首領はもうちょっと背筋伸ばして座ってください。フリード、さりげなく見切れる位置に逃げない！」
「……何をやっているんだ？」
　全員が疑問に思っているだろう。ユーディトは一同を代表するつもりで尋ねた。するとフィーアではなくミサキが答えた。
「これは『写真機』と言ってな。何でも本物そっくりの絵を、特殊な紙に出力できるものだそうだ。少し待っておれ」
「行くよ！目線はレンズにちょうだい。でも光るから目閉じちゃダメだぜ」
　本物そっくりの絵を作り出せる、となったらいつか画家が仕事を失くしてしまうのではないか。そう思いながら様子を伺っていると、軽い音がして、箱の上に付いた鉱石が瞬いた。フィーアは、箱を除きながら手元で紐に繋がれた何かを押している。
「……フィーア。それでは君が一緒に写れないだろう。おい、誰か代わりにやってやれないか」
　振り返ってそう言えば、ユーリシュカが名乗り出てくれた。位置は調整したから押すだけだ、とフィーアから説明を受けて、彼はぎこちなく『写真機』なるものの前に立った。何度か鉱石が光った後、ミサキが「感謝するぞ女王。さて、次はそなた達だ」と告げた。呼び出されたのはこの為か。ユーディトは不思議な箱に目をやった。

7幕

サフィルスからの難民の記録の閲覧の許可が下りてからは、宮殿の資料室と集落を行き来する日が続いている。

氏名と当時の受け入れ先が記されているが、十年もすれば移り住んでいることもあるだろう。親族などを頼って祖国へ戻れた者もいるかもしれない。受け入れ先がクマノの住民の名前を書き写して、後はひたすら住民達に聞き込んでいく。文字通り自分の足で調べられるのはクマノ内が限界だ。

もっと広い地域を出歩きたい、と言えばミサキは許可をくれるかもしれないが、目立って反感を買うのは避けたい。地道だが、これが確実だろう。実際にサフィルスの者と顔を合わせ、言葉を交わしたいというのもある。

多くの者はユーディトを覚えていてくれた。よく生きていてくれた、と涙を流して喜ぶ者もいた。

……そして、蔑みの言葉をユーディトに向ける者がいないことに安堵した。自分は命惜しさに国を捨てて逃げたのではないか、と思ったことは何度だってある。彼らの口から、叱責や怒りの言葉が吐き出されることを恐れていた。

甘いのかもしれない。それでも少しだけ救われた気がした。

――しかし、気がかりなことはある。

控えめなノックの音を聞いた。口から湯気の立つ金属製のポットを盆に乗せている。クマノでは有名らしい、鉱人四姉弟のうちのトロワだ。資料室勤めの彼女とは何度か顔を合わせている。

「こんにちは、女王様。お茶をお持ちしたんですが、良かったら休憩しませんか？」

「ありがとうトロワ。いただくよ」

「クマノ名物のハス茶です。美容にも良いらしいんですよ」

彼女はそう言って慣れた手つきでお茶を淹れてくれた。仄かな香気が立ち上る。ユーディトはつい椅子の上で背伸びをしたが、人の目があったことを思い出して「……失礼」と呟いた。いいんですよ、と

トロワが微笑む。気が強そうな顔立ちだが、朗らかで愛想が良い。離れの衣装棚に民族衣装を用意してくれたのも彼女だそうだ。温暖なクマノでは、いつもの服は少々暑さを感じるが、最近袖を通しているそれは、着心地が良く、その上動きやすくて気に入っている。

「随分と難しい顔をされてましたけど……あの、私にもお手伝いできることはありませんか？　私、統計調査とかで外回りする時があるんですけど、もしかしたらお役に立てるかも……かも……？」

少し自信がなくなったのか、声が小さくなった。ユーディトは茶を一口啜り、少し目を閉じる。

「人を探しているんだ。ここにいるかもまだはっきりしないんだが……。トロワ、何か知っていたら些細なことでもいい、教えてくれないか」

最後に彼女を見たのは、あの日の騒乱の中だ。ユーディトの記憶の中では、今も彼女はあそこにいる。名簿と資料室と集落を行き来する日々の中で、それは時が過ぎる度に深く根を下ろしていった。その〝気がかり〟の名は――

――青瑪瑙の角に茶色の髪の方、当時は三十代後半の方ですよね。南の村の食堂に……そんな方が働いていたような。当時でそれぐらいのお年でしたら、今もそんなにお変わりない筈です。私達は、二十歳を超えた辺りで老化が急激に遅くなりますから。でも、お名前が……女王様がさっきおっしゃられたお名前で、呼ばれてなかった気がするんだよなぁ――

南の村の近くの森には凶暴な獣が出るから、あまり近寄らない方がいい、と道すがらの角のない老人から教えてもらった。村の所々に物々しい杭付きの囲いが組まれているのに違和感を覚えていたのだが、理由を聞けば納得のいくものであった。

ついでに人を探していると言えば、老人は道端の小さな石像に新しい花を供えながら、「あの娘さんならもうちょっとで帰って来るよ」と。日中は食堂で働いており、家にいるのは昼下がりからしい。

待ち伏せというのも何だか気分が良くないが、機会を逃したくない。村外れの、森に一番近い場所にぽつんと建てられた小さな家の近くで待っていると、長くを待たずして〝彼女〟は戻って来た。
茶色の髪は当時より短くなっていたが、青瑪瑙の角と穏やかな面差しは、記憶の中のものと変わらずにそこにあった。
「――ホレという名前のご婦人は貴女か」
壁の影から姿を現すと、彼女はその瞳を大きく見開いた。続いて震えながら開いた唇が僅かに息を呑み込んだが、それを声として吐き出すことを彼女はしなかった。ただ、怯えたような目をして、森の方へと走り出して行った。
「待て！待ってくれ――グレーテル！」
獣が出ると聞いたばかりだ。追いかければその分だけ逃げられてしまう気がした。確信を得るまでその名を呼ぶのは避けようと思っていたのだが、咄嗟にそう叫んだ。その声を耳にしてから立ち止まった彼女は、ゆっくりと振り向いて「姫様……」と震える声で言った。
「どうして逃げるんだ。私は……貴女を咎めに来たわけじゃない。貴女に会いに来た。……懐かしい話を、貴女とできたら良いと思って……いいえ、それだけじゃないわ――あの時の事を、聞きたかったの」
彼女は何も答えない。ユーディトは腰に下げた剣を留め具から外した。剣が転がる重い音が響く。
「……大丈夫。怒って貴女を斬ったりしないわ。あの日のあの場所に、貴女を置いてきてしまったんじゃないかって、ずっと思っていた」
彼女は――グレーテルは、暫く呆然と立ち竦んでいたが、やがてゆっくりとユーディトの元へ近付き、剣を拾い上げて差し出した。
「いけませんわ姫様――ああ、このような危ないところで、剣をお外しになるなんて――」
少し落ち着いてくれたようだ。ユーディトは剣を受け取ると、足元の覚束ない彼女の肩を支えながら、家の扉をくぐらせて貰った。
雨が降り始めていた。窓ガラスに飛び散った雨粒が弾けて、小さな

雫を気まぐれに撒き散らしている。ここ数日は天気が崩れ気味だった。

ユーディトはグレーテルが淹れてくれた紅茶を傾けながら、彼女が語り出すのを待った。ほんの少しだけ砂糖が入った紅茶の味は、十年の時を経てなお変わらない。

二杯目としてミルクを入れたものを、こちらが何も言わずとも注いでくれながら、彼女は雨音に掻き消されそうな程のか細く頼りない声で呟いた。

「――私は、逃げ出したのです」

彼女が暗い表情をし、暗い言葉を口にするのは苦しかった。アルテミジアとパンを作りながら、共に笑っていた彼女を今でもよく覚えているが故に。

「姫様を、城の中にお送りしてからは……私はずっと外で戦っておりました。城を襲ったルベウス兵は……それは、残忍で……戦えない者から殺していったのです。まるで……まるで我らの心を挫くようにそうしていったのです」

あの時、ルベウスは先帝の一件があり、決して余裕はなかった筈だ。こちらの心を挫くことで、戦力差を埋めようとしたのだろう。頼りの騎士団は大半がルベウスに出払ったまま、これを絶好の機会とし――信頼を裏切り、毒を仕込んで多くを無力化し、城の者は徹底的に虐殺する。理解は出来ないが納得はいく。

「……私は……少しでも沢山の人を逃したくて戦いました。やがて……ああ、やがて。バルコニーに人影が見えたのです……私は、それを……それを、オディリア様だと思いました。お祝いの時に、美しい女王様が……手を、お振りになられるのは、あのバルコニーからでしたから。きっとそこで、勝利の言葉を口にされるのだろうと。私は……そう思って……ああ、ああ！」

グレーテルは顔を覆って泣き崩れた。ユーディトはティーカップをソーサーに置いて、彼女に寄り添い、両腕で抱き締めた。

「なりません、なりませんなりません！　私の口からは……とても……！　これは冒涜です、王族の誇りと名誉に対する冒涜です！」

「話してくれグレーテル。貴女が、傷付くのも分かってる。でも、私は――それでも私は、王族として聞かねばならない。受け止めなければならないんだ――王の最期を看取るのも、王たる者の役目だ」
「ユーディト、様……」
　彼女は雨よりも激しく涙を流していた。恐れ、震えるその唇が、ゆっくりと、その言葉を告げる。
「バルコニーに現れたのは……鳶色の髪の竜騎士でした。その男は――オディリア様と、アルテミジア様を……お二人のご遺体を……酷く傷付けられたお二人を、あろうことか、そこから……そこから下へ、投げ込んだのでございます……」
　その言葉を耳にした時、さながら世界が燃え上がったような――あるいはそうなったのはユーディトの心だったのかもしれない。小さな熱を抱いたままの埋み火が一息で燃え上がるような、そんな感覚だった。それは灰すらも残さぬ程熱く、この世の憎悪を寄せ集めて燃やしても、まだ足りない程の熱を持っていただろう。
　――ああ、母が終焉を前にして焼かれたのはこの炎だったのか。
「それを見て私は……恐ろしくなって逃げたのです。次は私がこうなるのかもしれないと……そう思うだけで身が竦みました。城を逃れ、救出に来てくださったリウスイの方々の元へ、身を寄せました。私は名前を偽りました。最後まで戦わなかった臆病者と、罵られるのが怖かったのです――」
「――分かった。辛い思いをさせたな。よく話してくれた。貴女を臆病などと責めたりはしない。そんな者が現れたら、私が手ずから宝剣の錆にしてくれる」
「ユーディト様――」
　ゆっくりと、グレーテルはユーディトから離れた。泣き腫らした目は幾分か落ち着いたように見えたが、悲壮なものを滲ませている。
「……いいえ。貴女が許してくださっても、私は私が、許せないのです。貴女に合わせる顔はない筈だったのです――どうか、私めをお忘れください。私はただの給仕婦です。グレーテルなどという女は、あの日にとうに死んだのです」

外は雨です、と言って彼女は傘を持たせてくれた。
それはおそらく彼女からの最後の言葉になるだろう、とユーディトは思った。

「この間よりだいぶ片付いたじゃないか。手伝おうか？」
換気のために開け放たれた扉に片腕を気怠げについて、ユーディトがひょっこりと顔を出した。最近は服に合わせて結い上げている髪の毛先が揺れる。もう片方の腕には閉じた傘がぶら下がっていた。
「終わる目処が立ちましたよ。ところでユーディト様、今日はその……グレーテル殿は見つかりましたか」
「ああ……見つからなかったよ。残念だ」
「きっとどこかで元気にやってらっしゃいますよ」
「そうだな――なぁフィーア、傘はどこに置いたらいい？」
奥にいたフィーアはそこでやっと女王の来訪に気付いたようだ。慌ただしく出てきたが、両腕に本を抱え、会釈も出来ない状態だ。
「申し訳ありません、傘はそこの壁に――」と彼女は口を開いた。だが、遠くから聞こえた妙な音に言葉を止めてしまった。何の音だ？
シャーロックは窓へ向かい外を見た。ユーディトと、本を机に置いたフィーアもその後に続く。
クマノの宮殿の方角から煙が上がっている。フィーアが、「姉ちゃん」と小さく呟いた。
「フィーア、君はここにいるんだ。シャーロック！　お前はモリオンを呼び戻して来い。私は――宮殿へ向かう」
「はい。すぐに追いつきます」
何もなければいい。小火か何かであればそれでも安心出来る。嫌な予感がした。先程聞こえたあの音は爆発音だ。もう耳にしたくもないと思っていたが――

8幕

ここ数日天気が悪い。野外演習の予定は変更で場所が屋内に変わった。

ミサキは椅子に悠然と腰かけて演習の様子を見ている。ワンはその側で同じものを見ていた。

大半が魔法兵だ。槍や剣を持っている者の殆どは角を持たない人間であり、鉱人でそれが出来るのはほんの一握りの者達だけだ。それこそ、あの女王付きの騎士や、オブシウスのような――

そんなことを頭に思い浮かべた時、ちょうど彼がやってきた。細身に身の丈程の大剣を背負った姿は、勇ましくもあるがどこか不安定さも憶えてしまう。生真面目故に、妥協することを許さなかったのだろう。文字通り血の滲むような思いをして、彼が武術を会得したことをワンもミサキもよく覚えている。

彼は背後に重装兵を従えていた。ワンは、兜は付けずに顔を晒す兵士の頭部に、角があることに気付いた。

――鉱人の重装兵は、軍で把握している限りでは一人も存在しない筈だ。

いつ仕込んだのだ？　私達の知らない間に――ミサキは殺気立ったワンの気配で初めてそれに気付いたようだった。オブシウスは背中の大剣を手にし、一息に振り下ろす。断頭台の刃が首を落とすように、それは彼女の額から伸びる角を切り落した。

「ミサキ！」

ワンは椅子の上から崩れ落ちたミサキを抱えた。二人の周りを取り囲むように槍が向けられる。屋内演習場の三か所の入口からは、鎧を着こんだ鉱人の兵士が雪崩込んでいた。困惑と動揺が伝播していく。やがて勇敢な誰かが突破を試みようとしたのか、魔力の高まる気配を感じたが、それは「動かないください」というオブシウスの冷たい声で止まった。

「……お前、……何、を……」

美しい黒髪を散らし、激痛に息を切らせながら、ミサキの柘榴の瞳

が友の顔を見上げていた。
「見ての通りです。クーデターですよ」

「何よ何よ！祭の報告に来たっていうのに、それどころじゃなくなって――」
「頭を下げろ、トロワ！」
「きゃっ！」
　フリードに言われるがままにしゃがみ込んだトロワの頭上に短刀が飛んでいく。それは彼女の後ろにいた剣使いの額に突き刺さった。膝を落とし、崩れ落ちた剣使いの頭にもやはり角があった。先程からこんな奴ばっかりだ――走る二人の後を、二歩ほど遅れてついて行きながら、アルは杖を強く握りしめた。
　フリードが蹴り明けた扉から外に出ると、激しさを増した雨の音が耳に突き刺さる。どれぐらい走っただろうか。蓮池を抜けたところまでは薄っすら覚えているが、そこから先は分からない。軍医として、医学と治癒術の心得はあるが、戦闘の術を持たないアルは、二人の後を追うのが精いっぱいだった。
　近くを川が流れていた。ここ数日の雨のせいか増水している。爪先にぶつかって転がった小石が落ちて、すぐに呑み込まれて見えなくなった。足場が悪く、下手をすれば転落しかねない――そう考えたところで、先を行くフリードの身体が大きく揺らいだ。膝をつき、剣を地面に突き刺して、俯きながら肩で息をしている。その背中には矢が刺さっており、裂傷があちこちに見えた。編み笠を深く被っていても分かるように、と伸ばしていた珊瑚色の髪は毛先が少し切られ、不揃いになっている。
　ライブの杖を行使するが気休めだ。治癒術だけでは足りない。側に駆け寄ったトロワも顔色が良くない。彼女も短時間に魔力を使いすぎだ。土砂と泥の入り混じった地を駆ける、追っ手たちの足音はすぐ近くまで迫っていた。
「――刃向わずにただ逃げているだけならば、見逃してやったものを」

大剣を手にしたオブシウスの声がした。クーデターの首謀者がのうのうと、お前は姉の友人であり首領の友人ではなかったのか、という言葉をアルは呑み込んだ。きっとそんなことはコイツだって分かっている。

「……それは誰に言ってるのかしら、オブシウス」

「そこの死にぞこないの〝角なし〟以外にですよ」

「あらそう。放っておいて頂戴、私はフリードとアル姉様と逃げるわ」

「そうですか。……でもそちらの彼は、あまりその気ではなさそうですね」

ふらつきながら立ち上がったフリードが、二人の前に立つとオブシウスを睨んで剣を向けた。言葉を交わさずとも分かる。アルとトロワ、二人だけでも逃がす気だ。それが癪に障ったのか、眼鏡の奥の黒い瞳が憎悪に揺れる。彼が手を振り翳すと、フリードへ向けて大剣が飛来してきた。回避も防御も間に合わない――アルは息を呑んで目を閉じた。

重い金属音が雨の中に響く。

目を開けたアルの目に飛び込んできたのは、胸を大剣に貫かれて崩れ落ちるトロワの姿だった。

驚いたのはアルだけではなかった。オブシウスは露骨に動揺をその顔に滲ませる。崩れ落ちるトロワ越しにオブシウスを見たであろうフリードが、背中越しでも分かるほどの憤怒の感情を燃え上がらせた。

フリードは僅かに腰を落とし、ぬかるんだ地を蹴った。背筋が凍るような殺気を振り撒いたその痩身に、傍の兵士達は竦んでいた。だが唯一、オブシウスだけがすぐに正気を取り戻した。屈んで地に手をついた次の刹那に、地に走った無数の亀裂から黒い針のような結晶が無数に突き出した――オブシウスの角と同じ黒曜だ。フリードは水鳥のような俊敏さで黒曜の上を飛び移りながら短刀を投擲し、オブシウスの頭上で剣を振りかざした。だが、再びせり上がった無数の黒曜に身体を貫かれ、その痩身を中空に投げ出した。血を雨の雫の中に巻き散らしながら、投げ出された身体は川へ落ちてゆく。

アルは一度トロワの躯を見、そして泳ぐのに邪魔になる杖を投げ出すと――迷いなくその後を追った。

3章
1幕

「いたぞ！女王だ！」
名を呼ぶ声がする。声のした方に剣を抜きながら目を向けた。一番近くにいた角のある重装兵を一睨みすれば、臆したのか槍を持った手が強張った。
「退避、退避！」
退避？　一度こちらを追う素振りを見せながら何故だ？　――その答えは自ずと分かった。雨音に混じって、矢の音がする。おぞましい程の数だ。ユーディトは退避を始めた先程の兵の背中を蹴り飛ばした。取り落とした盾を拾い上げて構える。
一呼吸の間もなかったように思う。無数の矢が盾越しに降り注ぎ、そのうちの数本が金属を貫いて鏃の先を目前で覗かせた。使い物にならなくなった盾を投げ捨てると、「第二射、構え！」という声が耳に届く。砦で兵が機械に矢を設置していた――もう一撃くる。遮蔽物はない。別の重装兵達が数名、盾を手にユーディトを取り囲んだ。盾と厚い鎧を纏っていようが、矢の雨の中に身を晒すことには変わらないのだ。彼らは捨て身の覚悟で今ここにいる。恐れを成した者などここに立つことはできないだろう。金属がぶつかり、こすれる硬い音に囲まれながら、突破口を探して目を凝らした。
「――ユーディト様！」
耳馴染む声の直後に、取り囲む一人が吹き飛んだ。上空から飛来した斧の正確な投擲に、頭をかち割られていた。ヴェールがかかったような薄曇りの白い空に、黒麟の機影が一つ。それは急降下して接近すると、兵士達の頭上を掠めるほどの低さを威嚇するように滑空し、立ち向かおうとした二、三人を轢き飛ばした後、再び空へ翼を広げて舞い上がった。
直後に二射目が放たれた。重装兵達は盾を構えて守りに入る。百本を優に超えるであろうそれらが、ユーディトの頭上に降り注ぐこと

はなかった。飛翔する矢が向かった先は高い位置を狙っていた。飛行戦力に対して優位を取れない彼らにとって、今優先して仕留めるべきなのはユーディトではなかった。

ユーディトの目には、シャーロックとモリオンが全速力で遠ざかり、矢を限界まで引きつけた後に反転したところまでしか見えなかった。矢が次々と降り注ぎ、その姿は高度を落としながら、森と山を形作る稜線の境界に消えた。

血液が沸騰するよう感覚が、身体中を駆け巡っていく。目の前のこの者達を全員殺さなければ――と思った。

蹄の音を耳にして、馬の首ごと切り落してくれよう、と反射的に剣を構える。振り向いたユーディトの目に映ったのはムネモシュネの赤の鎧と、後ろにシャルルを同乗させたユーリシュカの緑の鎧だった。

「姫様！」

ムネモシュネが伸ばした手に掴まって馬の上に身体を引き上げる。

「シャーロックが射られた！」と叫べばいつになく語気を強めてムネモシュネが言った。

「分かってる！――すぐに、すぐに探しに行きますから。今はここから離脱することを考えて！」

憤っているのは自分だけではない。それに気付いて、少し身体に帯びた熱が冷めた気がした。三射目は飛んでこない。代わりに一度退避した筈の兵士達がまた集まり始めていた。

「みなさん、僕の声からできるだけ意識を反らしてください！　数が多すぎて、うまく対象を絞れない！」

何をする気だ、と問う間もなく、シャルルは大きく息を吸い込み、魔力を帯びた「歌」を紡いだ。その声を耳にした瞬間、頭の中に金属をねじ込まれたような不快な感覚がした。ちかちかと明滅し、張り裂けそうな瞳の奥で、どうしてか母と妹の姿がちらついたが、意識を反らせというシャルルの言葉を思い出して、ユーディトは頭を強く横に降った。

現実へと戻ってきたユーディトの目には奇妙な光景が映った。双

子は冷や汗を流しながら耐えているようだ。そこまではまだいい。奇妙なのは集まり始めた兵の方で、ある者は頭を抱えて涙を流しながら絶叫し、またある者は地面に倒れ伏して呻き、ある者など気が狂ったように、何もない場所に何度も何度も剣を突き立てて笑っていた。立っているのは片手の指で足りる程の人数で、その者達も辛うじて正気を保っているのがやっと、といった様相だった。

どうなっているんだ――何にせよ誰も追いかけて来ない。雨の音と絶叫の入り混じる戦場を四人は駆け抜けていった。

オブシウスは女王一行を取り逃がした、という旨の報告を受けていた。報告を終えた兵に下がるように言い、彼はゆっくりとこちらに近付いてくる。眼鏡の奥の、角と同じ黒曜の色をした瞳は酷く事務的で、何の感慨も抱いていないように見えた。

「……舐められたものね。捕虜に縄もかけないで、挙句目の前で戦況報告？」

ワンは、王座にもたれかかりながら気を失っているミサキの額の汗を、ハンカチで拭ってやりながらそう吐き捨てた。

「友に縄をかけるのは気が引けます。何にせよここにいるのは、戦う術のない者ばかりです。武器を取れる者は皆牢の中ですよ。貴女だってそうでしょう？」

……その通りだ。ワンは掌を握り締めた。

どうせならクーデターの将らしく冷たい顔をしてみせたらいいものを。奪い取った筈の王座にも座らず、あろうことかそこにまだミサキを座らせているのだ。

「女王は逃げおおせましたが、竜騎士を墜としました。君の弟の作った武器は優れていますね、ワン。我々でも飛行兵を迎撃できる。無論、飛行兵だけでなく広い用途に仕えますが。お陰で刃向かうものをまとめて制圧できましたよ」

「フィーアの開発したシューターを使ったの？　自国の者を殺す為に？」

「ええ」
「そう……あの子、きっと怒るわ」
　オブシウスは兵士を呼びつけてミサキを見張っているように告げると、ワンを連れて王座の間を出た。友とは言え、どんな問いにも彼は耳を貸さないだろう。だがワンは口を挟まずにはいられなかった。
「どうしてクーデターなんか」
「鉱人が主体の国に作り直す。それだけです。知能に長け、寿命も長い我々が国を動かすべきだ。……人間を迫害しようとか、虐殺しようとか、そういう意志は私にはありません。ただ、鉱人には鉱人の、人間には人間の、適した役割がある。昔はそうだったのではありませんか、ワン」
「昔そうやって駄目だったから……今こうやって、鉱人も人間も関係ない国を作ろうとしていたんじゃない。『昔は良かった』なんて今を侮蔑する意図で口にする奴にロクな奴はいないの、経験上ね」
　渡り廊下の柵の向こうでは、こんな騒ぎなど知らぬ、とでも言いたげに閉じた蓮の花に、小降りになりつつある雨が滴り落ちていた。
　連れて来られたのは大広間だった。先の一戦で戦死した者の死体が並べられている。どれも丁寧に布をかけられており、ぞんざいな扱いはされていないようだ。
　――少しだけ安堵した。もし彼らが、死せる者達を手荒に扱うような真似をしていたら、ワンは何も考えずに、彼が友であると言う最後の一線を超えて、襲いかかっていただろう。
　オブシウスは一つの遺体の前で止まった。それだけ棺に納められていた。
「私怨がないと言ったら嘘にはなります。故に、それも含めてすべてが本心です。ミサキの代で、閉鎖的なリゥスイは終わりを告げた。隠匿のヴェールは取り払われ、角の無いものとある者の隔たりは少なくなった。遅滞していた文化は大きく発展した。ですが、それは全て光の面です。光があればそこには影が射します。光が強い程に、暗く。……公平と自由の名のもとに、どれだけの者が不満を募らせていたのか分かりますか？　学問所で鉱人と共に学ぶようになった子

供が、嫉妬心をかられて相手をいじめ殺した話は知っているでしょう。逆に鉱人が人間を殺したこともある。それらは氷山の一角でしかありません。」
彼はゆっくりと棺の蓋を開けた。その中を目の当たりにしたワンは、息を呑んで崩れ落ちた。
――トロワだ。長く美しい髪の黒さはそのままに、だが血の気の失せた肌はより白く、白蓮の花に満たされた棺の中にいた。
「皮肉なものです。鉱人と人間の内乱を、命を投げ打って止めた舞巫女を――かつて模した彼女が、同じ道を辿るとは」
彼女を殺したのは僕です、と言いながら、彼は短剣をワンの前に投げ落とした。
「トロワはフリードを庇って、僕の放った剣に貫かれて死んだのです。フリードは川に落ち、アルはその後を追って飛び込みました。死体はまだ上がっていません」
アルとフリードまでも。様々な感情が頭の中を駆け巡り、ワンの手に短剣を拾わせた。
「……あの子は、フリードに思いを寄せていたのでしょう?」
「ええ、そうよ！　健気で可愛い私の妹――。知っているなら、どうして、どうして――こんなことが、出来るの……！」
「――彼女だって！」
オブシウスは、終始淡々としていた筈の声色に、突如激情を滲ませた。
「あの男にさえ惹かれなければ、こんなことにはならなかった筈だろう！　私達は分かり合えない！父上は間違っていた！我々は境界を取り払うべきではなかった！」
憎いならそれで僕を刺せばいい、と彼は言った。
ワンは何も出来なかった。

王座の間へ戻れば、ミサキが薄目を開けている。少し安堵してその体を強く抱きしめた。ワンの腕の中で、彼女は低い声で笑った。乱れ

た髪の下から投げかけられた視線は、オブシウスへ向かっている。
「これから、どうするつもりだ……？」
「女王の首を取って、国内とルベウスを牽制します」
「ふ、ふふ……お前は、何か勘違いしているようだがな……あれが、仁義や義理だけで動くとは、思わぬ方が良い……それはあれの一部に過ぎぬ……始めて顔を合わせた時、妙な感覚がしたのだ。それがやっと……何なのか、ようやく……分かった。」
疲弊していてもなお、その赤を失わない唇が笑みの形を取った。
「――あれを突き動かしているのは怒りだ。怒れる獣の巣をつついたな、オブシウス」

2幕

元々は山奥で暮らしていたのだ。騎馬であれど、二人にとって森の中を駆けることなど容易かった。雨は止んだが、深い霧が夕刻の森の中に白く立ち込めている。獣が出る、と杭付きの柵を向けられていた南の森だ。思っていたよりずっと大きい。シャーロックとモリオンの機影はこの森の方向へ墜ちたように見えたが――

「ユーディト様、シャルル殿が……」

ユーリシュカがそう言って馬の速度を徐々に落とした。ムネモシュネもそれに習って並走する。シャルルは、振り落とされまいとユーリシュカの腰に腕を回して、俯いて何かを呟いている。いや――まだ歌っている。先程の歌とは違う。か細い声で、物悲しい歌を口ずさんでいた。止まってくれ、と二人に告げる。ユーディトは馬が完全に脚を止める前に飛び降りて、シャルルの元へ近付いた。

「もういい、シャルル殿」

「あ――あ……ユーディト様……僕……」

「窮地は脱した。君のおかげだ」

顔を上げて彼はこちらを向いた。我に返ったらしい。元々色白の顔をさらに白くしていた。今にも馬から転げ落ちそうな彼を、追いついてきたムネモシュネが体を支えながら下ろしてやる。いつもはその聡明さに瞳を輝かせ、堂々とした佇まいのシャルルは、今はその影も見当たらない程に衰弱していた。そんな様子が、ユーディトの焦りをかき立てている。

「二人共、陛下を頼む。私はシャーロックを探しに――」

そう言いかけたところで、人の気配と葉擦れの音がした。剣を構えて音の方向を睨む。

霧の中にその者は姿を現した。

「――グレーテル？」

「もう口をきいてくれないと思ってた」

ユーディトはそう呟いた。彼女はそれには答えずに小さな蝋燭に火を点ける。この家屋は昔、森にまだ獣が少なかった時代に使われていた作業小屋らしい。ほとんど廃墟のようなものだが、雨風を凌ぐには充分だ。

「……この森の危険性は彼らも分かっています、故にここまでは追って来れないでしょう。姫様であれば、獣など恐るるに足りないと思いますので」

壁に寄りかかって肩を寄せ合いながら双子は休んでいるが、その手元には武器が置かれていた。物音を聞きつけたら二人はすぐに臨戦態勢に入るだろう。

シャルルはグレーテルが持って来てくれた毛布にくるまって寝息を立てている。少し眠れば大丈夫、とは本人の弁だが、本当に大丈夫なのかという不安が拭い去れない。

そしてシャーロックは――小屋に案内されて、横たわるその姿を目にした時、生きていたのかと安堵した。そしてすぐ、熱く燃え上がっていた胸の中が、今度は脆く灰のように崩れていくのを感じた。やっと冷静になれた、と言ってもいい。彼が墜とされたのを見て、理性を失いかけていた。

グレーテルが、墜ちていく一人と一匹の機影を偶然目にして森を捜索すると、軽傷のモリオンと、彼女の翼に守られるようにして座り込み、動けずにいるシャーロックがいたとのことだ。小屋へ移動させ、応急手当てをしているうちに、血を流しすぎたのか気を失ってしまったという。発熱しているようで、時折魘されている。

「明日の朝、もう一度来ます。約束は出来ませんが……必要そうなものを持って来ます。どうかご無事で……」

「無理はしなくていい、ありがとうグレーテル」

グレーテルは何も言わずに一礼すると、静かに小屋を出て行った。

矢の雨を目の前にして、自分が射られることよりも、その鏃が向けられた先がユーディトであることに戦慄した。同時に、モリオンを巻

き込みたくはないと思った。彼女は人の都合に付き合ってくれているのだ。そして最終的にどういった結果に帰結しようが、無様な骸を晒したくない、とも。それらを統合し、頭が結論を出すよりも早く、身体はこれらの最適解へ向かって動き出していた。

弾き返した矢の質量と振動が手にした斧を伝わって腕に響いていく。数発を弾いたところで、左肩を衝撃が突き抜けていった。傾いだ身体を振り落とさぬよう、モリオンはこちらが指示せずとも身体の向きを動かした。矢の雨の僅かな切れ間を見出して降下する。それでも避けきれなかった何本かが掠め、突き刺さったのを感じた。だがモリオンにだけは直撃させまいと手綱を操って、眼下の森の中に飛び込んだ。

辛うじて墜落ではない、といった有様だ。最もそれは乗り手からの主観であって、側から見れば墜落したようにしか見えないかもしれない。鬱蒼と生い茂る木々の枝をへし折りながら、彼女は黒い翼を無理矢理広げて羽ばたき、着地に適した速度まで強引に減速する。その風を受けて、水を含んだ木々からは水滴が滴り落ちた。着地の衝撃が身体を軋ませたが、まだ倒れる訳にはいかないと堪えて竜の背から降りる。

「……モリオン、平気か？」

そう問えば彼女はこちらを向いてゆっくりと瞬きした。黒水晶の名に相応しい、品のある艶を帯びた美しい黒鱗には幾つか擦過傷が見受けられたが、大きく損ねられておらず、翼も折れていない。胸を撫で下ろしたのも束の間、彼女よりも遥かに重傷であるらしい自分の身体が限界を訴えた。相棒の脇腹に背を預けて座り込む。彼女は翼を僅かに広げて、その姿を覆い隠すようにしてくれた。

飛行兵に対して優位を取りづらい鉱人達の「虎の子」が先ほどの兵器群だったのだろう。左肩を掠めた矢は、肩当を跳ね飛ばし、その下の皮膚をも深く裂いている。左脚と右脇腹に受けたものに至っては鎧の上から突き刺さっていた。矢は通常のものより大きく、重く作られているようだ。矢の質量と落下の衝撃が加わった一撃は相当なものだ。身をもって知ることとなった。これならば、騎竜の強靭な鱗と

筋肉を貫くことも容易いかもしれない。
「……モリオン、いい。俺のことはいい。君だけでも……どこかに……」
そう口では言いながら彼女の腹に頭を預けている。角の重みで頭と身体を支えきれないのだ。彼女はシャーロックを振り払うことも、どこかに行く素振りなど少しも見せずに、しばらく喉を鳴らしていたが、やがて他の匂いを嗅ぎつけたのか頭を持ち上げた。エルサンダーの魔道書を手に、何とか立ち上がる。ドナスタークはフィーアに預けたままで、手斧は投擲して喪失、主武装の長斧はどこかで落としてしまっていた。
森の中に小柄な人影が見えた。しんと冷えた空気を震わせて、女の声がする。
「やっぱり――ああ、良かった。間に合ったみたいね……」
茶色の髪。青瑪瑙の角。もう、会えないのかもしれないと思っていたその姿を見て、痛みも忘れて安堵の息を吐いた。

歌が聞こえる。
朝か昼かも分からないが、柔らかな薄橙の光が差し込んでいた。ここは死の国か。だとしたら、それはこんなにも安らいだものなのか――そう思う程にここは穏やかだ。
窓辺に少女が立っていた。歌が止まる。天極の星よりも激しく、強い青を湛えた髪を肩から滑らせながら、彼女は振り返る。驚きに見開かれた瞳もまた冴え冴えと青い。青玉の輝きを細めて少女は微笑んだ。
――同じ歌声で、シャーロックは目を覚ました。
暖かい薄橙の日差しもここにはない。小皿に乗せられた蝋燭の火だけが唯一の光だ。窓辺に少女はおらず、埃と黴の匂いをかき消す程の、水を含んだ土の匂いがした。
歌が途切れる。代わりに、微かな衣擦れの音がして、女性にしては少し低い声が耳に届いた。

「……すまない、起こしてしまったか」
無様な姿を晒したくない。身を起こそうとしたが、小さな声で「寝ていろ」と諌められた。長い溜め息の音。目が慣れて、闇の中の陰影が見えてくる。ユーディトは、立てた膝に腕を置き、剣を抱えてすぐ側に座っていた。
「私があの城から持って来れたのは、この剣と、宝玉と、ほんの少しの思い出……この歌もそうだな、母から教わった。――それとお前だ、シャーロック」
ハジャルアズラク、というサフィルスでは聞き慣れぬであろう名を告げた自分に、難しい名前ね、そうだ、サフィルス風の渾名を付けてあげるわ――と、そう言ったかつての少女が同じ唇で、自分の名前を紡ぐ。彼女の声色は少し憤りを含んでいた。
「お前が射られた時、私は怒りで我を忘れるところだった。お前を墜とした者を皆殺さなければ、と思った。あの場でユーリシュカ達が来なかったら、無我夢中で斬り込んでいただろう」
無我夢中だったのはこちらも同じだ。矢の雨を目の前にして、気付けば囮になるべく愛竜を駆り立てていた。
「――もう、あの時のような子供ではない。お前に守って貰わずとも、自分の身ぐらい自分で守る。だから、その……お前も、自分の身を大事にしろ。私の為に死のうとすることは許さんからな」
闇の中から伸ばされた手が、シャーロックの頬に触れた。熱を帯びた身体には心地よい体温だったが、彼女の手は酷く冷えていた。
「ユーリとモネが見張っている、心配しないで寝ていろ。お前には早く治って貰わなければ困る」
彼女の激しさは、優しさと表裏一体であることを自分は知っている。故に時折怖くなる。彼女はその激しさのままに、いつか自分の前から消えてしまうのではないか、と。炎を上げて美しく星が燃え尽きるように。
「ユーディト様」
「なんだ」
「……歌を……先程の歌の続きを……聞かせていただけませんか」

吐息のような声だったが、彼女の耳には届いたようだ。ユーディトは返事の代わりに、小さな声で歌い始めた。故郷を懐かしむ、祈りと願いの歌――在るべき場所を二度も失った身には、その歌はあまりにも残酷で、美しく、優しかった。

何故歌を口ずさんだのだろう。シャルルの影響だろうか。

……まぁ、そんなことはどうだっていい。シャーロックは先程よりは穏やかな寝息を立てて寝入ってくれたのだから。

胸が痛い。彼を傷付けられたことが苦しい。悔しい。哀しい。まるで己の身が傷付いたように。優しい黄金の眼差しが、今は痛みに侵されて不安定に揺らぐのを見て、酷く不安になる。

「……おやすみ」

もう一度だけ頬に触れる。暖かい。生きている。もう少し触れていたい。でも、これ以上続けたらまた起こしてしまうだろう。すぐに温もりが消え失せて、冷えていく掌を一度強く握り締めると、ユーディトは膝に顔を埋めた。

3幕

視界が揺れていた。壊れた家ばかりだ。すぐ近くで咆哮が響く。見上げた薄雲の空に、鈍色の鱗をぬらと光らせたその巨影は竜だった。長い尾が、それ自体が意思を持った生き物のように鎌首をもたげて、積み木をなぎ倒すように家々を打ち据えた。悲鳴が上がったが、それは家が潰れてなくなったのと同時に唐突に途切れ、何も聞こえなくなった。

そんな惨状を目にしても〝彼〟の歩みは止まらない。地響きを上げて大地を踏みしめる巨体に臆することもなく。〝彼〟が恐れているのは他のことだ。やがて、その視界に泣いている子供が映った。銀色の髪の幼い少女。〝彼〟は、彼女に向かって手を伸ばす。

伸ばしたのは自分ではなかった。これは視界ではなく、投影されたいつかの光景を見ているのだ。

背が高く、精悍な顔立ちをした、少女と同じ髪色の青年。少女の上に大きな影が落ちた。巨竜の脚だった。

彼は絶叫する。

……そこで、夢から覚めた。

グレーテルが数人を引き連れてやってきた時は、クーデター側に差し出されるのかと警戒したがそうではなかった。むしろ逆であった。村で匿ってくれるという。

風呂に浸かるどころではない事態だが、雨上がりの森の中を駆け回った汚れを落とせるのは率直に有難いと思った。身体を清め終わり、村の者が洗ってくれた服に袖を通す前に、ユーディトは宝玉に向かって問いかけた。

「……夢を見せたのはお前か？」

答えはない。ただ蒼色の燐光が仄かに揺れているだけであった。

外が騒がしい。もう追っ手が来たか、と剣を構えたが、その必要はなかった――フィーアだった。先程までのユーディト達と同じよう

に泥を浴びた姿で、肩で息をしている。充てがわれた空き家に通して休ませてやり、彼の息が整うまで待った。やがてフィーアは、黄色の瞳を怒りにぎらつかせながら口を開いた。
「クーデター側の奴等から話を盗み聞いた。首領とワン姉さん達が捕虜になってる。フリードは攻撃を受けて川に落ちて、アル姉さんはそれを追いかけたって。トロワ姉ちゃんは……フリードを庇って――」
「トロワは――死んだのか」
フィーアは首を縦に振った。あの可憐な少女が――にわかには信じ難い話であった。つい先日も顔を合わせ、会話を交わしたというのに。彼女とはたった数日の邂逅だ。だが、それでも胸の中に穴が空いたような気分になる。
「あの時、女王様が行った後――しばらくしてあいつらがやって来たんだ。僕は裏口から逃げた。本当は喋っちゃいけないんだけど、こんな状況だから……。軍で使う兵器や武器の開発も僕の仕事のひとつなんだ。シューター……矢を発射する装置も僕が開発した。僕はまだ子供かもしれないけど、それでも、開発したものが何に使われるか分かってるよ。アレは人殺しの道具だ。でも――それでも、人を守る為のものだ。それを……あいつらは同じ国民同士で殺し合う為に使ったんだ！」
フィーアは叫び、拳を床に振り下ろした。家具のない部屋に、その音はやけに大きく反響する。怒りに荒い吐息を漏らし、悲しみで肩を震わせる彼の姿が痛々しい。涙一つ流せない程の業火に彼は焼かれていた。
「この国であれを一番効率的に動かせるのは俺だ。だから手元に置いておきたかったんだろうが、もうそうはいかない。新しい兵器でも何でも作ってあいつらを殺してやる。トロワ姉ちゃんを殺した償いは、あいつらの命で――」
「落ち着け、フィーア」
その肩を強く叩けば、怒りに揺れる瞳がユーディトを見上げた。彼の激情は痛い程良く分かる。自らを燃やし尽くすまで消えぬ憤怒の火――だがそれが消えた時には灰さえも残るまい。……彼は、それで

はだめだ。昨日の自分を見ているようだった。
「君の怒りは私が引き受けた。　――我々はクーデター派を制圧する。君の持っている知識を貸して欲しい」

フィーアと合流出来たのは幸運だった。大まかではあるが、クマノの宮殿へ続く蓮池の地形を把握できた。
そして幸運がもう一つ――戦うならば我らも共に、と名乗り出て来てくれた者が集まってきたのだ。宮殿から逃げ延びた者の他、中にはかつて、サフィルスで騎士として母に剣を捧げていた者もいた。それでも戦力差は覆せないが、孤独な戦いでないことは心強い。
「ユーディト様、丁度いいところに」
村に匿って貰ってからさらに翌日のことだった。シャルルは元の調子を取り戻したように見える。出来る限り人目につかぬよう、木陰に立っている彼の腕にはカラスが止まっていた。
「宮殿へ向かう目処は立ちましたか？」
「すぐにでも行きたいところではあるがな、生憎と私は軍略には疎い。シャルル殿の意見も聞きたいと思っていた」
「……そのことなのですが、」
シャルルが持つ紙は白紙のように見えるが、よく目を凝らせば僅かな凹凸が刻まれている。盲者用の触覚文字だ。？
「パーシアスから情報が届きました。ルベウスの反現体制派閥からの情報だそうです。ルベウスに不穏な動きあり、と」
「まさかリゥスイへの進軍を……？」
「いえ、まだそこまでではありません。ですが、議会でそういった話題も挙がっているとかで」
「それならば尚更、クーデター派が全権を掌握する前に動かねば手詰まりになるな。首領殿のことも気がかりだ。そう簡単に処断されることもないとは思いたいが――」
人質は生かしておいてこそ意味がある。それが分からぬ程愚かではなかろう。

「……もう一つ、これは報告ではなく相談なのですが」
表情を曇らせながら、シャルルは申し訳なさそうな声色で告げた。
「パーシアスが、合流に当たりシャーロックさんを、その……迎えに寄越して欲しいと」
彼は重傷だ。熱こそ引いても、傷が一日や二日で癒える筈もない。平気そうに振る舞っているが、ユーディトの目は誤魔化せない。見ていられない――そうして、逃げるように彼の姿のないところにやって来たのだ。
「……すまないがそれは聞けん。双子のどちらかでは駄目か。あの二人ならば、森の中だろうが馬を走らせることが出来る。今、あれを飛ばせる訳にはいかない」
「はい。僕もそう――」
シャルルが言いかけて息を呑む。彼の耳はユーディトより先にその気配を捉えていた。噂をすれば――シャーロックだ。主の姿が見えなくなったものだから、探しに来たのだろう。傷が痛むのか、少し険しい顔をしていた。
「お前、いつからそこに」
「申し訳ありません、ユーディト様。盗み聞きするつもりはなかったのですが」
「構わん。聞いていたのなら話が早い」
「シャーロックさん、すみません。貴方と友達になれたのが嬉しくて。貴方のことを手紙に書いたのです。だから……」
「陛下、どうかお気になさらずに。もう飛べます」
「お前、本当に聞いてたのか？　私はお前を飛ばせる訳にはいかない、と言った筈だが。お前は、自分の身体を使い倒すようなやり方を改めろ。昔から、いつだってそうだ」
「失礼ながら申し上げさせて頂きます、ユーディト様。私が戦えない今、ユーリシュカとムネモシュネを、貴女の元から離す訳にはいきません」
「それは――」
双子も貴重な戦力だ。どちらかを迎えに行かせれば、その分だけこ

ちらの戦力が減る。言い分は良く分かる。だが、首を縦には振れなかった。
「……駄目だ。一人減るならば、減った分をかわりに私が殺す。それで問題ない。第一、戦えないのならばどうやって自分の身を守る？当然奴らは空の警戒もしているだろう」
「雲の上を飛びます」
「雲の上だと？」
　確かに、雲の上ならば矢も届かず、彼らは追っては来れまい。追っ手として飛行部隊を差し向けて来ない辺り、彼らはそもそもとしてそれを掌握していないのだ。シャーロックは、黄金色の瞳をこちらに向けた。月光よりも激しく、それでいて優しい瞳。真摯な眼差しに射抜かれて、眩暈のような感覚を覚えた。
「何度か訓練で経験しています。どうか――信じてください。私を」
「う……ずるいぞ、お前。その言い方は……」
　溜息を吐く。シャーロックはこちらが首を縦に振るまで意見を曲げないだろう。信じろ、なんて不確定要素の大きな、それでいて重い言葉を持ち出した以上は。
「……分かったよ。ただし絶対に交戦するな。自分から戦いを仕掛けるなんてもってのほかだ」
「心得ました。シャルル殿、構いませんね？」
「ユーディト様とシャーロックさんがそう仰るなら……僕は止めません。不本意ですが」
　シャルルは双方の合意が取れたところで一応は納得したようだ。言葉通り、心底不本意そうではある。
「すぐに支度します、場所を教えて頂けますか」
「分かりました、では地図を――」
　何故そこまでするのだ、と胸が絞られるような感覚に苛まれる。やはり殴ってでも止めるべきだっただろうか。時間がないことを少しだけ有難く思った。これ以上深みに嵌ることを避けられる。少し目を閉じて、気分を切り替えた。
「――明日だ。明日の夕刻より打って出る」

「先日は申し訳ありませんでした。その……ありがとうございます。
――私を励ますために、あのようなことを。私の、わがままを……」
飛び立つ間際、シャーロックはそう言った。何のことだ、とユーディトは答えた。
夢でも見ていたのだろう、と。
目的地には着いただろうか。上手く合流出来ていればいいが――
ユーディトは一度目を閉じた。王としての在り方を全て学ぶ前に、護るべき祖国を失った。薄れてはいるがまだそこにある、父と母の記憶を依り代に身体を、心を奮い立たせ、兵達にかけるに相応しい言葉を探していく。
――優しい父。木漏れ日に揺れる慎ましい野花のような慈愛。
――気高い母。剱のように白く猛る熱情と誇り。
宝剣の柄に口付けて、剣を地に突き立てた。それを待っていたかのように、兵達が武器を打ち鳴らす。
「――君達が私の元に集ってくれたことに感謝する。生憎だが、私は指揮官としては不十分だ。シャルル皇帝陛下のような聡明さも、ミサキ首領のような指導力も持ち合わせていない。あるのは、これだけだ」
突き立てた剣を引き抜いて構え、振り下ろす。白銀の刀身に、傾きかけた陽の朱色が眩しく反射してぎらついた。
「勇敢なるリゥスイの民よ、共に戦えることを誇りに思う。
誇り高きサフィルスの民よ、今こそ恩義を返す時だ。
戦術に関しては君達の方が優れているだろう。君達で各自判断し、最善を尽くせ。私はそれに剣で答えよう――どうか、私を導いてくれ。」

4幕

長く生きていると、覚えている出来事がどれぐらい前のことだったのか、曖昧になることがある。

少なくともこれは――せいぜいここ数年の記憶だ。

薄暗い物陰に連れ込まれ、何人かの男に蹴られ殴られた記憶。角のある者も、ない者も混じっていた。この場にいた者以外は誰にも知られぬように、と顔を殴ってくることはなかった。痛む身体を引きずって官舎へ戻ろうとした時、当時はまだ事務職についたばかりのトロワと遭遇してしまった。そこであろうことか意識を失い、気付いたら資料室にいた。

「今私しかいないから」と彼女は自分を運んで手当てをしてくれていた。傷だらけの理由を聞かれて口籠もれば、それで察されて溜息を吐かれ、酷いことされたのね、辛かったでしょう――と呟いて、彼女は悲痛そうに目を伏した。

君は優しいんだな、と思わず漏らした。親の七光りの癖に、王の器ではなかった期待外れである僕相手に。首領の近くに置いてもらっているのもお情けなんだろうって皆が言ってるの、ずっと前から知ってる。あいつらは僕が気に入らないんだ。だからああやって鬱憤を晴らしにやって来る。

私は誰にだって優しいのよ、と彼女は言った。あんたが誰の息子で誰の友人かだなんて関係ないわ。嫌な奴もいるのね、あんたから言いづらいなら私が上にチクっとくけど？

貴方さっきから眉間に皺寄せて私のこと見るけど、目見えてないんでしょ。そうだわ、弟が視力矯正用の何かを作ったんだって――眼鏡をかけるようになったのは、そんなことを言われたのがきっかけだ。

死者の遺体は埋葬した。死者の埋葬に時間を割いている暇はない、だが蔑ろにすることは出来なかった。衛生面の問題もある。トロワは特に、丁寧に弔った。彼女を殺したのは他ならぬ自分であるのに、二律背反もいいところだ。

――構わない。誰しも矛盾を抱え、折り合いをつけてなんとか生き

ている。それから目を反らすよりはずっといい。
愚かである事に何の隔たりもありはしない。
あの時友に、鉱人が主体の国に作り替える、と言ったのも些細な長所を重んじただけに過ぎない。少し知能に長け、寿命が長い故、やり直しが効く。ただ、それだけだ。もし、鉱人と人間の間に引かれた境界線が見目の違いだけであったのなら、単純に優れた者をここに立たせるだけだ。
部下の声が聞こえて、オブシウスは暫しの瞑想から舞い戻った。
女王が蜂起したという。

「もうシューターは撃って来れない。被害面積と被害人数、矢の備蓄数からざっくり算出して――矢を回収しないかぎり、あれで弾幕を張れる程の矢の残りがないはずだ。シューターの矢は専用のものだからね、普通の矢では代替出来ないんだよ」
「では、頭上には気を取られずに戦える訳だな」
「うん。でも普通の弓歩兵も少しはいるだろうから気をつけて」
力強く肯定するフィーアの声を背に受ける。解放軍の面々には、出来る限り太陽を背にして戦うよう告げている。シャーロックからの助言だ。赤々と燃える夕刻を背にすれば、相手はこちらを認識し辛くなる。だがそれも日が落ちるまでの話だ。暗くなってしまえば、数で劣るこちらはさらに神経質な戦いを強いられることになる。それは避けたい。
「では、全員検討を祈る――私は、先に往く」
ユーディトは腰を落とし、低い姿勢から駆けだした。土を踏む感触が、やがて池に渡された木製の足場を蹴る軽い感触に変わる。総大将自らの突撃ににわかに騒然とした気配が伝わったが、怯んでくれたなら好都合だった。
先鋒は重装の魔法兵――防御を補いつつ得意の魔法を生かせる、という訳だ。走りながら鞘から剣を引き抜き、先頭の一団めがけ投擲した。回転しながら飛んでいく宝剣は、数人をまとめてなぎ倒したとこ

ろで、ようやく床板に突き刺さって止まった。竜の牙と骨で作られた剣は、多少手荒な扱いをしたくらいでは傷付きもしない。
前方が開けたところで、腰に下げていた副武装のレイピアを二本抜いた。床板を蹴って加速する。盾を構えた兵士の少し前で跳躍し、盾の上部を踏み台に大きく跳んだ。重装とは言え、文字通り穴は存在する――肩に着地したユーディトは、レイピアを首元の鎧の隙間から捻じ込んだ。地に降り立てば事切れた男がどっと崩れ落ちた。血の一滴すらも零すことなく倒れた男の向こうに、僅かに動揺したものの、役目を果たすべくこちらに向かってくるさらなる一団が目に留まる。真横と頭上をごう、と音を立てて何かがいくつも通り過ぎていった。こちら側からの魔法の援護だった。
「何だあのデタラメな動きは！」
「驚いている場合か！続け続け！ユーディト様が道を切り開いた！」
炎が燃え上がり、雷撃が奔り、風が大気を引き裂いている。その嵐のような戦場の合間を縫って、かつてサフィルスにいた者達が武器を持って走り出していた。剣戟と咆哮の中に、美しい歌が響く。シャルルの唄だった。後方で、武闘装備を見に付けたフィーアに守られながら、鼓舞の讃歌を紡いでいた。その声に背を押されるように、ユーディトは再び駆けた。

一人の見張りを残して他は出て行った。戦いが始まったのだ。無数の剣戟の音がする。
王座にもたれかかるミサキに、ワンは付きっきりで側にいた。美しい顔には疲労が滲んでいるが、辰砂の赤を帯びた瞳の奥には激しい感情が揺らめいている。ゆらり、と彼女は立ち上がり、見張りの元へと近付いた。戦えぬ者と戦う意思のない者しかいないならば、見張りは一人で充分と判断されたか。それとも見張りに手を回すよりも、宮殿を解放しに来た者達を先に始末するべきと判断したか、定かではない。判断するには情報が少なすぎた。
剣を携えた見張りの男は、ゆっくりと接近するワンを見て剣の柄に

手をかけた。ワンは、紅が落ちてなお紅い唇を笑みの形に歪ませると、すっとしなやかな腕を伸ばし、男の背中に絡ませた。そして――驚きに呼気を漏らしたその唇を唇で塞いだ。

男は暫く驚きに目を見開いていたが、異変に気付いたのか剣を取り落とし、身体に回された腕を離そうともがいていた。だが、やがてワンの背中を掻く指先が痙攣し、次に痙攣を腕から全身に伝播させ、やがて膝を折って床の上に崩れ落ちた――辰砂毒だ。ワンの角を形成する鉱物には毒が含まれている。その影響か、彼女は粘膜にその毒を有しているのだ。お陰で好きな人が出来てもキス一つできないのよ――とぼやいたのはいつのことだったか。虚しさを埋めるように、人との繋がりを求める彼女の姿をミサキはよく知っていた。

「……死んだのか？」

倒れた男を爪先で小突く。ワンは口元をハンカチで拭いながら「一応は生きてるわ」と呟いた。

「後遺症は残るかもね――ミサキ、煙管はある？　禁煙して何処かにしまっちゃった？」

「執務室の机の中にあるが……」

「そう、分かった。窓と扉を閉めていてもらえるかしら――私が戻るまで絶対に開けたらダメよ、絶対にね」

彼女は低い声で言うと、靴の踵をコツコツと鳴らしながら王座の間を出て行った。やる気だ。煙と一緒に毒を撒き散らすつもりだ。

玉座の肘置きに手をついて、ようやく立ち上がったミサキは、女官達に声をかけた。

「窓と扉を閉めろ！それと、出来るだけ空気が通るような隙間を塞げ！」

いくら馬術に長けようと、狭い足場の上では小回りが効かない――なので、今日は馬は置いて来た。視線がいつもより低いのがしっくり来ない。敵の魔法兵は率先してリウスイ兵が相手してくれている。背中を焼かれる心配を少しでもしなくて済むのは心強い。

敵味方入り乱れての激しい乱戦だ。花弁を閉ざした睡蓮の花に、夕陽の光よりも赤い血が降り注いだ。敵はこちらが返り血を浴びるよりも早く、角の生えた頭の重さに引きずられるように、後ろに向かって身体を傾かせていく。水飛沫が上がる。沈んだらおそらく上がっては来れないが、溺死する前にことが済むだろう。

姫様は――と周囲を見回した。敵側総大将狙いの主は、今もなお最前線に斬り込んでいるところだった。彼女の動きに合わせて乱れ、舞い上がる青色の髪は全てを飲み込む激流のようだ。綺麗だ、とムネモシュネは思った。彼女の騎士になりたいと思ったのは恩を返したい、と思ったから。けれどもその他に、彼女をずっと側で見ていたい、と思ったことも理由のひとつ。圧倒的な破壊とは、時に美しささえ感じるものだ。

「増援が止まったな、何故だ？」

剣で重装兵を切り捨てながら、ユーリシュカはこちらに声をかけた。

「分かんない。正直どれぐらい増援が来たとか把握してない！」

増援が止まろうが、こちらは数で劣る。協力を申し出たサフィルスの民は長らく戦場に立っていない。しかし女王の突破力ばかりにも頼っていられない。どれだけ士気が高く統率されていようが、純粋な戦力差というのは覆しがたいものだ。

そんなことを考えているうちに、女王の姿が重装兵の姿に埋もれて見えなくなった。ガン！と鎧と金属の擦れる音がこちらまで届く。圧殺する気か――ムネモシュネは槍を構え、渾身の力を込めて投擲した。主武装として使っている長槍は戦いの最中に壊れ、予備の手槍で戦っていた。これを失えば丸腰になる。だがムネモシュネは躊躇わなかった。

頭上から降り注いだ槍に一人が貫かれた。

随分と遠くに、ムネモシュネの赤い鎧姿があり、そこに別方向から兵士が殺到するのを見た。

ユーディトは今すぐにでも引き返さなければと思った。だが、自分が戻るまでもなかった。ユーリシュカが殺到する兵士を斬り伏せていたからだ。

彼がいるのなら大丈夫と判断する。槍を胸に受け崩れ落ちた肢体の頭上を飛び超え、反転し剣を叩き付ける。一人が池に落ち、厚い鎧を凹ませてさらに一人が天を仰ぎながら倒れた。ひしゃげた鎧に胸を圧迫されて息が出来ないのか、その若い男は助けを求めるように手を伸ばしていた。

距離を取り次の動きに備えた。動きを止めた別の兵士をユーディトは一瞥する。女王の首を取るべきか、助けるべきか――と躊躇したのであろう。まだ年若く見える彼は仲間を助ける方を取った。

一人を殺すよりも、一人を負傷させた方が、負傷者を救出する分だけ人手を減らせる。戦う意志のない者を深追いすることもない。

一度剣を血振りしながら辺りを見回せば、随分と奥まで入り込んでしまったことに気付く。宮殿はもう目の前だ。ただひたすら、敵の多い場所を狙って突き進んでいたが、どうやら正解だったらしい。

三人の死体の真ん中にムネモシュネは膝をついて座り込んでいた。木の床板の上に流れ出た血は、それが元は誰のものだったのか分からない程に混ざり合っていた。

「だめだよ、ユーリ」

肩と腰の辺りから血を流しながらムネモシュネは言った。

「姫様は行った。君も立ち止まっちゃだめだ」

「馬鹿を言うな、君を放っていけるか」

あらゆる音が飽和している。近付いてくる無数の足音が敵なのか味方なのか、もう分からない。それほどまでに頭の中がいっぱいだった。

脳裏にちらつくのはあの夜の記憶――石に足を取られて転んだムネモシュネは、小さな声で「おいてにげて」と。確かに、そう言ったのだ。

「まだ敵が来る！僕はいい、姫様の為だったら死んだっていい！」
「駄目だ！姫様の為だろうが君に死なれたら困るんだ！」
あの夜は二人の全てだった。主たる女王と、ただ一人の血のつながったきょうだい。天秤にかけることはできない。どちらも、失う訳にはいかない大事なものだ。どちらかでも失くしたら、きっともう生きていく意味なんてなくなってしまう。
「見て」
血の流しすぎで白い顔をしたムネモシュネは、どこか呆けたような顔をして天を仰ぎ、空を指で指し示した。朱色に、夜が近付き始めたことを示す濃い瑠璃と黒が混じり始めて、空は極彩の階調に彩られている。
……そこに、豆粒ほどの騎竜の影が一つ。人影が躊躇いなく飛び降りたのが見えた。それはちょうど、主が切り込んでいった辺りに向かって落ちていった。合流する、と言っていたが――どうも、竜から飛び降りた人影は一人分にしては大きかったように見える。
続いて、どこからか放射状に光と、少し遅れて風が吹き抜けていった。広範囲治癒術だ。
「――ムネモシュネさん！ユーリシュカさん！」
フィーアと共にシャルルがやってきた。シャルルは細腕に治療道具を抱えている。
「少し離脱しましょう、立てますか、モネさん」
「うん……さっきの治癒術が少し効いたかな。誰なんだろう」
「あれは――」
シャルルの代わりにフィーアが口を開いた。
「アル姉さんだ」

宮殿が近くなったところで足場が広く、高くなった。舞台のようなものが見える。近々祭が執り行われると聞いていたが、それに使われるものだろうか。
階段をゆっくりと登って行けば、少数精鋭らしい佇まいの、片手の

指に収まる数の兵に囲まれた将が悠然と待ち構えていた。彼は部下たちを制し、他の手薄な場所へ向かうよう指示を出した。
「まったく無茶な人だ。総大将自ら突撃とは……」
「考えを巡らせる頭も人的余裕もないものでな。それに将が動かねば部下に示しがつかんだろう」
　声色は呆れ混じりだったが、眼鏡の奥の黒い瞳には感情の動きが見えなかった。決して屈強ではない体躯に、身の丈ほどの大剣が異様さを覚える程に噛み合っていない。だが、飾りではなさそうだ。一戦交える覚悟もなしに、のこのこと姿を現す程愚かではあるまい。
「クーデターを起こした時、流石に国外に逃げてくれるかと思ったのですが」
「私がもう少し賢ければそうしていた。だが生憎とお前ほど学がない。――私個人としてはな、お前の思想などどうだっていいさ。そんなことより、ミサキ殿にはサフィルスの民を救ってもらった恩がある。それを前にして逃げ出すことなど誰ができよう？」
「良いでしょう。お互いに長引くのは得策ではない、ここでケリをつけましょうか。正直なところ少し安心しています。あれだけ兵力をぶつけても貴女は止まらなかった。竜の血脈を受け継いだ王族の力は凄まじいものですね。……ですが、流石に疲れが見える。これならば私にも相手が務まりそうだ」
「ふん、ほざけ軟弱者が。口よりも身体を鍛えておけば良かったと後悔させてやる」
　副武装のレイピアを外して身体を少し軽くする。辺りは薄暗くなり始めていたが、篝火を灯す者はおらず、ただ闇が深く濃くなっていくばかりだった。オブシウス、という名だったか。武術の心得はあるようだが、この男が戦っているところをユーディトは見たことがない。どういった戦い方をするのか皆目見当がつかない。まずは出方を伺うか――と迎撃の構えを取った。
　その刹那だった。オブシウスは息を飲んで後ろに跳び退った。距離が開いた二人の間に人が降り立ち、編み傘の下から流れる珊瑚色の髪がふわりと揺れた。腕に女性を一人抱えている。

頭上では騎竜の影が離脱していくのが見えた――合流する、と言っていたが「誰と」とは聞いていなかった。今更ではあるが。てっきりシャルルの仲間である弓騎士のことであるとばかり。それにしても、あの高さから降りて無傷だと言うのか。そもそもとして、彼は負傷して川に落ちた、とフィーアから聞いた。数日で治るような負傷だったのかも分からない。だが――こうやって生きていたのだからそんなことはどうだって良かろう。

感情の動きが見えなかった筈のオブシウスの瞳が、動揺と驚愕、そして激昂に揺れる。

フリードは抱えていたアルを下ろした。アルはオブシウスを一瞥したあと、溜息を吐いて宮殿とは反対方向へ走り出した。走りながら、彼女は杖を掲げた。彼女を中心とした放射状に、広範囲の治癒術が齎す光が広がっていく。あの一瞥には様々な感情が篭っていた。だが、彼女は軍医だ――復讐よりも治すことを選んだのだろう。

「……どうやら私はお呼びでないようだな?」

ユーディトはそう言うと、オブシウスとフリードの横を通り抜けて宮殿へと向かった。ここはフリードに任せて、増援の処理とミサキ達の救出をしなければ。

5幕

「例え生きていたとしても、動けるような怪我ではないと思っていましたが」
「見ての通りだ」
　フリードは刀を抜いた。オブシウスはまだ剣を構えずにいた。彼は抜き身の大剣を魔力で覆って鞘の代わりとしている。抜刀の隙はない――どう出るか。螺鈿細工のような色を仄かに帯びた黒い瞳は、言葉は何とか平静を装っているものの激情を隠し切れていない。
「抜け、オブシウス。それとも〝角なし〟相手に自ら遅れを取ると証明するか」
「人に喧嘩を売る時ぐらい、顔を見せたらどうですか？　ああ――それとも、そのお嬢さんのような面を晒すのが恥ずかしいから隠しているのですね？」
　彼のその一言は、静まり返った水面に石を投じたも同然だった。何故顔を隠していたのか。それは人見知りするからだ。そこまでは覚えていた。そこから先を思い出したのだ。人見知りするのは何故か。この中性的に見られる顔に劣等感を抱いていたからだ――今、思い出した。
「……言ってくれたな」
　編み笠を投げ捨てるのと同時に、オブシウスが腕を振りかぶり、剣を投擲した。こちらに真っ直ぐ飛来する剣を、フリードは正面から刀を構えて受け止めた。ギィン！と高い金属音が上がり、勢いを相殺された大剣が転がり落ちる。その刹那には距離を詰めていたオブシウスは、剣を拾うことなく接近し拳を繰り出してきた。後退したが回避し切れず、鳩尾にめり込んだ掌底が息を詰まらせ、まともに受け身の取れなかった身体が宙に浮き、木の床板の上に放り出された。咳き込みながら剣を突き立て、なんとか立ち上がった視界には、眉根を寄せながら剣を拾い上げるオブシウスの姿が映る。
「……おかしいですね。肋骨を砕いた手応えがあったのですが」

答えない。彼は、暫く訝しげにこちらを見ていたが、やがて眉間の皺を深くして言った。
「貴方――一体何を身体に入れたのです？」
「お前だって覚悟もなしにここに立っていないだろう？　同じだよ、俺だって。
……俺も一つ聞きたいことがある。お前は何故俺にばかりああいった態度を取っていた？」
「……僕は……こんな性格ですからね。誰とも分かり合えない、というのが私の持論ですが。種族の隔たりのない、誰とでも分かり合える貴方が、羨ましかったのかもしれませんね」
「誰とでも分かり合える？　違う、ただ俺は空になっただけだ。何を失ったのかさえも思い出せない。故郷も、家族も、忠誠心も、持っていたかもそれない感情も。お前の言う隔たりさえもだ。そんなモノが、そんな空虚なモノが羨ましいだって？ふざけたことを抜かすな」
「……」
「――ああ、そうだな、お前の言う通りだ。誰とだって分かり合えない。鉱人も人間も、同じ種族同士でさえ。よく分かるよ。俺だってお前のことは好きじゃない。……だから、分かり合えないからこそ、絆にはかけがえのない価値がある。俺はそう思いたいよ」
「――失言でした。今のは忘れてください。気が合いましたね、私も貴方のことは嫌いです。他に理由なんかありません」
姿勢を低くして地を蹴る。副武装の短刀はない。必要が無かった。出来るだけ身軽な方がいい。身体の使い方を〝思い出した〟今となっては――瞬時に距離を詰めたフリードは上段から剣を振り下ろした。二度、三度と繰り出した斬撃を、オブシウスは構えた大剣を僅かに傾けてやり過ごしたが、何度目かの打ち合いの後に、ぶつかり合った刃が大きく弾かれ、二人はほぼ同時に反動で僅かに後退した。
パキ、という微かな音を耳にする。来る。思考よりも早く身体が動いた。跳躍では間に合わない。地を蹴り、疾駆する。自分はこんなにも速く走れたのかと、まるで身体が自分のものでないような感覚がしたが、すぐに慣れた。元々こうであったのだ。先程まで自分の身体が

あった場所に、さながら杭のような黒曜の塊が下から隆起していく。床板を破り、隆起に巻き込まれた睡蓮の花が水中から引きずり出され、泥混じりの水飛沫を吐き出しながら落ちていった。予備動作もなしに魔法を行使するとは――肝を冷やしながら、フリードは自重に耐えられず、音を立てながら沈んでいく黒曜の上に飛び移り、再び接近した。

跳躍と共に叩き付けた一撃を、待ち構えていたオブシウスは大剣の切り上げで弾いた。中空に放り出され、体勢を崩したフリードを迎撃すべく、オブシウスは一歩踏み込んで剣を振り下ろした。身を捩り、着地地点をわずかにずらして地に降り立つと、唸りを上げながら鉄塊が真横に突き刺さる。

刺さった剣を抜くことを即座に断念したオブシウスは、腕を貫手の形にして構えた。対するフリードは、刀を突きの形に構えて間合いを詰めた。どちらもこの距離では避けることも反らすことも難しく、当たればどちらの一撃も心臓を貫くだろう。

だが――張りつめた糸のような刹那は、突如響いた爆音によって終わりを迎えた。フリードには何が起こったのか見えなかったが、オブシウスはフリードの背後に何かを見たようだった。動揺でその身を揺らめかせたオブシウスだったが、僅かな刹那に左腕で刀を受けて心臓を守った。だが、さらに踏み込んだフリードは、刀を手から離すとオブシウスの胸倉を掴み、渾身の力で放り投げていた。先ほど黒曜で空いた大穴に向かって、彼の身体は放り出され、転がり落ちていく。

「――オブシウス！」

その姿を追う者があった。美しい黒髪に映える柘榴石の角は無残にも途中で断ち切られている。しかし、それと同じ色の赤色の瞳は依然として強い光を湛えながらそこにあった。

首領ミサキは、今まさに池に転落するところだったオブシウスの手を取って、そこに繋ぎ止めた。

どうして、と震える唇がそう告げた。

「……ワンだよ。宮殿に控えていた者たちは皆毒で無力化した。ユーディト女王はせっかく迎えに来たのに、徒労だったな」
「そんな――ワンはあんなに毒の力を使うのを嫌悪していたのに……」
「そのことならばワンから伝言だ。お前が腹を括ったのだから自分もそうする、だそうだ」
　左腕には刀が突き刺さったままで、力なく垂れ下がった指先からはとめどなく血の雫が落ちていた。ここは特に池が深い。泥を巻き上げられ、濁った水は夜の天蓋が広がり、暗くなった空の下で黒々と、奈落のように口を開けていた。
「お前程私は頭が良くない。だから、私ごときがお前を説き伏せられるとは思わぬよ。だが、な……お前だって分かっているだろう。誰しも折り合いを付けながら生きていくしかない。境界を引こうが取り払おうが変わらぬことだ。なら、何とかやっていくしかないだろう。時間は長くかかるかもしれぬがな、我々は幸いにも長寿種だ。人間で叶えられぬことも、何とか長い時間をかけてでも叶えられるかもしれん、無論人間とも協力して、な。私は傷付け合う可能性よりも、分かり合える可能性を信じたい」
　ヒビの入った眼鏡の上に、黒い泥が流れていた。それは彼の白い肌の上に落ちて、涙の雫のように暗渠へと零れていく。
「さっさと上がって来い、オブシウス。もう我々の友情も流石にこれまでかと思ったがな、こうしている以上私はまだお前を許す余地があるようだ。……なぁお前、私に輿入れせぬか？」
「な――」
　繋ぎ止めた手が震えていた。滑り落としそうになる。さらに強くその手を握った。
「お前など牙のない猫も同然よ、死ぬまで離れに閉じ込めて可愛がってやる。他の誰にも触らせぬ」
「こんな時に馬鹿なことを！」
「今ここで私以外にお前を助けられる者がいるか！　酒も飲んではおらぬ、素面だぞ。お前が角を切り落としてくれたせいで空元気だが

な。
お前が多くの者が殺し、傷付いた事実は変わらん、だがお前はして暴君になろうとした訳ではないだろう。どのみち我々は、流された血の上で生きていくしかないんだよ。あの女王を見ていると余計にそう思う。血の上に平和を築く他ないのだ、と。
その宿業から逃れ得ぬのなら、流された血に私は誓おう――時間はかかるかもしれんが、お前を決して失望させたりはしない、と」
彼は目を反らし、長い溜息を吐いた。
「……貴女のその甘さを僕は憎んでいました。けれども同じぐらいに、深く愛していたのでしょう。
その言葉を最期に聞けて嬉しかった。ありがとう、ミサキ」
オブシウスはミサキの手を振りほどいて落ちていった。静かな水音と水飛沫が上がり、波が伝播する水面が閉じた蓮の花を揺らした。その揺らぎが消え失せた頃、あちこちで武器の落ちる音、そしていくつかの呻き声と絶叫が響いた。残ったクーデター側が降伏、あるいは自決し始めた音だった。

2幕／幕間

鳥の声がする。瞼越しに強い光を感じた。目を開ければ、雲の混じる空に血が滲むような赤色を広げている夕刻の斜陽が視界を焼いた。そこから顔を背け、地に押し付けた掌には砂利と小石の感覚がした。

一体どうなった――アルは身を起こした。フリードを追って川に飛び込んで、何とかその身体を引き寄せて。そして――

すぐ隣にフリードは倒れていた。浅瀬を見つけて這い上がったことを思い出す。そこで自分は力尽きたのだ。全身の痛みと凄まじい疲労感があるが、五体満足であるようだ。問題は彼の方だ。俯せに転がる身体を仰向けに返せば、彼は小さな咳をした。生きている。だが辛うじて、だ。串刺しにされ、濁流に洗われた傷は深く、血を失った身体は蒼白で冷たい。

医療の知識や治癒術の心得があっても、道具を持っていなければ出来ることは限られてくる。今持っているのは皇帝が貸してくれたハンカチぐらいだ。綺麗に洗濯して、次に顔を合わせたら返そうと思っていた。それを拝借して泥のついた傷口を拭ってやりながら、アルは祈るようにフリードに声をかけた。

「だめだ、フリード。君に？まで死なれてしまったら、私はトロワに顔向け出来ない……！」

不意にその名を口にして、胸の奥が凍り付いたような感覚がした。

「トロワ……」

最期に何の言葉も交わせなかった。あの子は躊躇わなかったであろうことだけは理解した。きっと恐怖よりも、彼を失うことを恐れたのだろう。恐怖に勝るほど彼を好ましく思っていた――いや、愛していたのだろう、と。

「貴様は何者だ」

そんな声を聞いて心臓が跳ね上がった。振り向けば、弓を構えた老人がいる。川の周りは鬱蒼と茂る熱帯雨林だ。その中を音も立てずにここまで接近してきたのか――と、見せつけられた力量に身がすくむ。敵であるならば敵う筈がない、と。だがアルはフリードの前に立

ち塞がった。
「観光客に見えるなら医者として検査をお勧めするよ。頭のね」
鏃と一体化した眼光は鷹のように鋭く、矢を構えた姿は一分の隙も見当たらない。老人とは思えぬ程の鍛え上げられた体躯をしており、刻まれた顔の皺と、無造作に束ねた髪の白さだけが彼を老人たらしめていた。
老人は、やがてその鋭い真紅の目をアルの手元に向けると、僅かにその気迫を揺るがせた。
「――何故それを持っている。それが誰のものか分かっているのか」
彼が目を向けているのはシャルルのハンカチだった。
「ああ、分かっているとも。優しい皇帝陛下が貸してくれたのさ。まぁ、信じるかどうかは君次第だけど」
皇帝が生きている、ということはどこまで広まっているのだろうか。密偵が嗅ぎ回っていてもおかしくはない筈だ――老人は、しばらく矢を向けたまま沈黙していたが、やがてその気迫を鎮め、あろうことか弓を下ろしてしまった。そして、「クマノから来たのか？」と尋ねた。弓を下ろされたところで、丸腰でも敵うような相手ではない。応えずに睨みつけていると、彼は小さな溜息を吐いた。
「近くの村に医者がいる。まだ、助けられるかもしれない」
村、医者――そんな単語に頭を揺さぶられた。老人は静かに歩み寄ると、フリードの身体を丁寧に抱き上げた。
「クーデターの話は知っている。陛下とはこれから連絡を取る予定だった」
「おい、君は……」
味方なのか、という言葉を投げかける前に彼は言った。
「心を許さぬ者に、陛下がこれを貸す筈がない――私はルベウス皇帝シャルル陛下が騎士、パーシアス。時間が惜しい、今はその名で充分であろう。君も来なさい」
あの子が呼んでいる。いや――あの子は死んでしまった。だから

これはずっと昔のこと。ずっと昔――そうだ、やっと思い出した。俺を助けてくれたのはあの子だった。まだ幼かったあの子。礼の一言もついぞ言えぬまま、自分を庇って死んでしまった。ただただ優しかった故に、可哀想な娘。こんな男と出会わなければ、そもそも死ぬことなんてなかったものを。

目覚めて最初に思ったのはそんな後悔。全身が引き千切られるような、痛みよりも激しい悲しみが苛んだ。

「おや、もう起きたのかい」

声の方に目を向ければ、角を持つ長身の男がいた。寝台のすぐ傍の机には医療器具と薬。医者であるようだ。男を挟んだ隣の寝台ではアルが寝息を立てて眠っていた。その側にもう一人、屈強な体格の男がいるようだったが、暗がりで顔は良く見えない。

「俺はいつ、動けるようになる…？」

「うーん、全身打撲と外傷が沢山。君の身体はズタボロだ。繋がっているだけ幸運だが、控え目に言っても重傷だね。一週間や二週間で治る訳がないなぁ」

「……それでは困る」

随分と悠長な喋り方をする男だ。こちらの焦りなど知る由もない、といった体で。喉を震わすことにさえも疲れ果てたフリードは、溜息を吐いて男から目を反らした。細く開いた窓からは夜の色が見え、蝋燭の炎が部屋の中を照らしていた。何度目の夜なのかは分からなかったが、「もう起きた」と言うからには然程時間が経っていないと思いたい。

机の端には、医療器具や薬に紛れて、拳大の鉱石のようなものが置かれていた。鉱石の内側から仄かに紅い光を放っている。その輝きに見覚えがあった。これは――

「……〝炎の紋章〟？」

口に出してから少し違和感を覚えた。式典の時に見たことがある〝炎の紋章〟は、この鉱石と同じように内側から淡い光を放っていたが、球形をしていた。故に「宝玉」とも呼ばれるのだ。

「鋭いね君は、中に入ってるものは同じだ。だが成り立ちが違う。気

にしないでくれ、私の手にある以上ただの道具だ。君達を怖がらせるような使い方はしないし、君には必要ない」
「……俺には？」
「おっと、口を滑らせたかな。うん、まぁいいや。これは私の切り札さ。道具は使い方次第ということだよ。例えば――お産中の母親とお腹の中の子供、どちらか一方の命の選択を迫られた時、これを使えば両方助けられる。ギリギリ助からない怪我を、ギリギリ助けられる怪我に出来る。そんなモノさ。だから、君には必要な」
「それを使えば、すぐに治るのか」
「せっかちだねぇ君は」
　銀色の瞳を細めて彼は呆れたように笑った。
「確かにこれを使えば君は明日にでも動けるようになるだろう。動けるどころか、しばらくの間は怪我をしてもすぐに治るぐらいだ。これの力が残っているうちはね。でもこれは負担がかかるんだ。具体的に言うと寿命を何年か前借りすることになる。だから最後の手段さ」
「構わない」
　即答した。
「俺は余所者の異邦人かもしれない。だが……俺を受け入れてくれた人達を、これ以上失う訳にはいかない。今、戦わなければ……救ってもらった命にも、意味がなくなる。寿命なんかいくらでもくれてやる」
「――ほう。気に入ったよ剣士君。いいよ。その覚悟を見込んで特別に治療してあげよう。」
　俺は鉱石を手に取って、フリードの胸の上に置いた。そして、耳元に口を近付けると「ただし、このことは皆には内緒だ」と囁いた。

3幕／幕間

記憶が飛んでいる。随分と呼吸をしていなかったような感覚に、肩で息をしながら、シャーロックは跳ね起きた。

失った血がまだ戻らない身体が揺らぎ、目の前が暗くなりかける。傷の疼きが意識を引き留めた。上着は脱がされて新しい包帯が丁寧に巻かれていた。

「――やっと起きたか」

明滅する視界の中、聞き覚えのある声がする。その方向に顔を向ければ、椅子に腰掛けて髪の毛先を結んでいるフリードの姿があった。

「相棒に感謝するんだな。失神したあんたを乗せてこの辺りを飛び回っていたんだ。そんな身体で高高度飛行なんて、無茶が過ぎる。……まぁ、俺よりは軽症だがな」

俺よりは軽症――という言い方に何か引っかかるものを感じた。休んでいられる場合ではないと、痛む身体を叱咤して立っている。それに気付かれたか、主は気が気でない様子だった。そんな自分より重症となると、今の彼のように、戦装束を纏うことすら出来ないのではないかと思えるが。

ともあれ、生きていたのか。アルと共に川に落ちた、と効いていたが。と言うことは――

「やぁ、雄鹿君。気分はどうだい？」

杖を持ったアルが姿を現わした。

「良かった、君も生きていたのか――ああ、大丈夫。まだ飛べる」

彼女に続いて、もう一人が入ってくる。屈まなければ戸口を潜れない程の長身の彼は、シャーロックを見て微かに微笑んだ。肩までのくすんだ紅髪に、切れ長の銀色の瞳。耳の後ろから伸びる角は白く、岩の塊を細く乱雑な形に切り出したような形だ。

「君は――」と男が口を開いた。その悠長な声で、この身体に刻まれた痛みの記憶のうちのひとつが色鮮やかに、脳裏に蘇った。

全てを失ってしまう前に、立ちはだかる者全てを葬って、血に塗れた身体で彼女を抱えて空を駆った。いつ角が折れたのか、そして肩と

背中に矢を受けたのかもよく覚えていない。そしてまた今日のようにモリオンの上で力尽き、目を覚ました場所に――そう、この男がいたのだ。あの時は今よりさらに朦朧としていたが、この男のことは不思議とよく覚えている。

彼は、驚いているシャーロックをさも面白いものでも見つけたような眼差しで見下ろした。

「医者としては安静を言い渡したいんだが、君は聞かないだろう？剣士君、彼の鎧を持ってきてくれるかな」

服を手渡して男は呟く。フリードは顔を上げ、外へ出て行った。

彼の言う通りだ。寝台から降りて服に袖を通す。血が滲んでいたが、上着を着て鎧を纏えば見えなくなるだろう。

「人を迎えに来たんだ。地図はないか？　現在地を……」

「心配はいらない、ここが目的地だ。パーシアス殿に呼ばれたんだろう？」

アルが答えた。目的地上空付近で酸欠で意識を失ったが、モリオンは良くやってくれたようだ。彼女には助けられてばかりいる。

「実は、ね……。手紙では事情を割愛したそうなんだけど……合流するのはパーシアス殿じゃないんだ。彼はまだやることがあって」

「何だって――じゃあ、誰を乗せて帰ったら良いんだ？」

「俺だよ」

戸口に鎧を抱えたフリードが戻ってきた。

「……その矢傷は、あの女王様を庇ったのか？」

フリードは目深に被っていた編笠を外して放り出し、そう尋ねた。淡い色の瞳が鋭くこちらを見ている。

「ああ、そうだ」

「飛行兵は矢を恐れるだろう」

モリオンを撫でていた手を止める。彼女は首をこちらに向けて目を合わせ、ゆっくりと瞬きした。その首に腕を回し、額を寄せて「大丈夫だ」と囁いてやる。騎手の心の僅かな陰りまで感じ取ってしま

う。賢く、優しい子だ。
「最期に棺の蓋を開けてもらいたいのならば、死んでも手綱を離すな――と、俺は竜騎士になる時に教わった。分かってる。落ちたら助かる高さじゃない。地面に叩きつけられて死んだ者の姿を見たことだってある。俺だってああはなりたくない。でも――あの悍ましい矢の雨を見た時に、俺が恐れたのは自分が死ぬことじゃなかった。……あの人が死ぬことだ」
「……アンタにとっての忠誠は、生きることじゃなくて死ぬことか？」
否定できない。シャーロックは「……そうかもな」と返した。
彼女を失うことが何よりも恐ろしかった。一度目の喪失は、生まれ育った故郷。家族。二度目の喪失は、新しく見つけた居場所。三度目は許されない。考えるだけで胸が引き裂かれるように苦しくなる。激しさを湛えながらも、ごくたまに、少女のような純真さを見せる青玉の瞳。女性にしては低いが、芯の通った凛とした声。柳のようにしなやかな身体から繰り出される、鋭い白銀の剣筋。その輝きを、音色を、佇まいを、美しいと思った。守りたいと思った。命と引き換えにしてでも。
――そこまで考えて、気付いた。この感情は本当に忠誠なのか、と。彼女を守りたいという理由として、彼女が王であるということは然程重要ではないのだ。
「記憶を失った、と言ったな。思い出したんだ、少しだけ」
フリードはそう呟いて、剣を鞘から抜き、二度三度と振って構え、腕を下ろす。冷たい風が吹いて、長い髪が揺れた。
「……俺がトロワに命を救われたのは二度目だ。十年前、川岸で俺を見つけてくれたのは彼女だったんだ。俺はそこで一度目覚めて、彼女を見た。身体が冷たくて、熱くて、痛くて苦しくて、死んでしまいそうだった。そんな俺の側にいて、手を握って、ずっと声をかけてくれた。……俺は、それも忘れてしまったのにな。辛いことを思い出すかもしれない、と気を遣ってくれたんだろう。彼女はそのことを、俺の前で口にしたことは一度もなかったよ」
剣を収めた彼は振り返ってこちらを見た。鋭い瞳には怒りとも悲

しみともつかぬものが揺れる。
「あらゆる手段を尽くして、考えて、最後に残ったものが自分の死と引き換えなら、それも選択肢のひとつだろう。だがな、喪失と引き換えの選択肢なんて、遺された側は虚しいだけだ。
俺だって死ぬ覚悟もなしにここにいる訳じゃない。死と引き換えの選択を、否定するつもりもない。でも割り切って考えられない事はある。俺はあの子に礼を言うことも出来なくなってしまった。こんな思いはもう沢山だ」
彼はそう一息に言うと、編笠を拾い上げ、再び顔が見えなくなる程深く被った。
「……それでも、あの人を失いたくない」
そう呟く。聞こえているかは分からない、フリードは何も言わなかった。

6幕

気配を経つようにして歩く音はユーディトのものだ。村にいた時、森で狩りをすることもあったというから、その癖なのかもしれない。シャルルは歌を止めた。

「あの時起きていたのか？」

「え？　あの時、とは」

「戦場から離脱して、森の作業小屋で一晩明かした時だ。知っている歌だったから」

「いえ、僕は歌しか覚えていません。夢を見たのだと思っていたのですが。貴女の歌だったのですね」

彼女は少し沈黙する。疑っているようだが、誓って嘘は言っていない。

「歌はどなたから教わったのですか？」

「母からだ」

「この歌の起源は、サフィルス北部の流浪の民と言われています。元は鎮魂歌なのですよ。二度と故郷へ帰れぬ死者への祈りが、いつしか転じて望郷の歌になったのです。だから、さっき僕が歌っていたものは、ユーディト様の知っているものと、歌詞が違うかもしれませんね」

シャルルは、この度の戦いにおける戦没者を埋葬した墓地へ足を運んでいた。姿が見えないから、彼女は心配して来てくれたのだろう。一人で出歩くのは控えるように、と言われているし、その理由も重々分かってはいる。暗殺者にでも狙われたらひとたまりもない。だが、どうしてもここへ来たかった。リゥスイへの滞在もあと少しで終わり、次の段階へ向けて慌ただしくなる。少しでも時間があるうちに、祈りを捧げておきたかった。

今頃ルベウスでは、皇帝がリゥスイに現れたどころか、何食わぬ顔をしてクマノ解放軍に加わっていたことに戦々恐々としているだろう。

「そろそろ奉納の舞が始まる。貴賓席へ案内しよう。ミサキ殿が君の

為に、一番楽団に近い席を用意してくれた」
「わあ、嬉しいな。ありがとうございます。では、お願いしますね」
彼女はいつも速足気味で、シャルルを置いて行きそうになると立ち止まって待ってくれる。同じ速さで並んで歩くことは少ない。だが今日は少し歩みが遅い。首領に新しい服を宛てがわれ、歩き難いのだろうか。
「……あの、ユーディト様。少し、よろしいですか」
「どうした？」
「その……先に、この話を持ちかけた僕が、このようなことを貴女に言うのは、恥ずべきことかと思いますが。聞いていただけますか」
「ああ」
「――少し、怖いと感じました。戦いを。貴女はお強い方です。どうしたらそのように振る舞えるかと思って」
祈りの歌を捧げれど、死者は何も答えてはくれない。祈りでも晴らせぬものは、どこへ昇華したら良いのだろう。武器を手に、村にいた時から戦っていた彼女ならば知っているのかもしれないと、隣を歩く彼女を感じながら思った。だから思い切って問いかけた。
ユーディトは歩みを止める。群衆の細やかな喧騒が、風に乗って僅かに聞こえてきた。
「……シャルル殿。貴方が戦いに心を痛めたのなら、それでいい。どうかその痛みを忘れないままでいて欲しい。こんな答えを求めていたのではないのかもしれないけど――私はもう、人を斬っても何も感じない」
そんな声を耳にして、シャルルは思わずユーディトの手を取った。ひどく冷えていた。触れているこちらが凍えてしまいそうなぐらいに。
「アルテミジアもよくそうやってくれた。懐かしい気分だよ」
耳馴染みのない名前だが薄っすらと記憶にある。王都陥落の際に殺されたという妹姫の名だ。
彼女は人の気配がする少し手前まで、シャルルの手を解かずにいた。篝火の燃える音と、楽団が舞台裏で楽器の調律をしている音がす

る。「私は皆の所に行く」と告げ彼女は去って行った。
強い人だ、と思っていた。けれども――彼女は強い人ではなく、悲しい人なのかもしれない。少なくとも、あんなにも感傷的で、寂しそうな女王の声を聞いたのは初めてだった。

特に彼女に対して特別な意識があるのではないが、こうも顔が近いと、どこに目をやったらいいのか分からなくなる。朱色の顔料を塗った細い筆の先が目尻に触れ、ひやりとした冷たさを感じた。
「よし、完璧！」
ワンは筆を机に置いて自慢げにそう宣言した。「どうせ見えなくなるのに……」と呟けば、耳ざとく聞きつけたのか辰砂の瞳がじろり、とこちらを見た。
「見えないところにも力を入れるのがお洒落なのよ」
「理解できん」
「もぉ～！　貴女、ちょっと記憶戻ったらなんだか可愛げがなくなったわね！このこの！」
ワンは筆を再び手に取ってつつくような仕草で襲い掛かってきた。それを悠々と回避していると、控え室の入口にかけられた暖簾を潜り、アルとミサキが顔を出した。
「舞台に上がるまで待とうかと思ったがな。どんな面構えになったか待ちきれなくて見に来たぞ」
今日のミサキは、普段の着物風ドレスではなくしっかりとした着物だ。柄も派手ではない、髪は凝った形に纏め上げ、角と同じ柘榴石の簪で留めている。切り落された角は少しずつ伸びているようだ。華やかな容姿をしている故か、これぐらい大人しい格好をしていてもよく目を引く。
「本当に大丈夫なのかい？」
「大丈夫って、何がだ？」
おうむ返しに尋ねれば、アルは眉間に皺を寄せ、露骨に不満気な表情をする。

「君、あの戦いのすぐ後に、血を吐いて倒れたじゃないか。あれからそんなに経ってないんだぞ」
「もう治った。完治したと診断したのは君だろうが」
「うっ……。確かに、そうだけどさ。まったく、君は一体どんな魔法を使ったんだ？」
質問には答えずに、振付の最終確認をして来ると告げて立ち上がり、はぐらかした。すると、アルはフリードを引き止めた。振り向けば、少し目を伏して、躊躇しながら、彼女は言った。
「フィーアから、預かってきたんだけど……これ。トロワの私物の中にあったって。君宛てのものだ」

親愛なる友　フリードへ
突然こんな手紙を貰って、貴方は困惑しているでしょうね。
先に謝っておくわ。ごめんなさい。
直接言う勇気がないから、手紙にしたためました。
同封したものは見てもらえたでしょうか。
私の自然剥離した角を加工して作った耳飾りです。
少しだけ魔力が込められています。
ちょっとした魔除けぐらいにはなるかもしれません。
さて、ここからが本題なのですが。
貴方がこのことを知っているかどうかは分からないけれど、
鉱人の間では、自然剥離した角を加工して作った装身具を贈るということ、
その装身具を見に付けることに特別な意味があります。
そして、私は貴方に、その特別な意味を見出そうとしているのです。
貴方のことを慕っています。
もし私のこの行為に、貴方も特別な意味を見出してくれたのなら、
どうか、奉納祭で舞を踊る時に、この耳飾りを付けてきてほしいのです。
良い返事を待っています。

トロワ
追伸　必要なかったら燃やしてください
その時は、今までと変わりなく友人でありましょう。

――ずっと、昔の話だ。
剣を振っていた。それぐらいしか、覚えていなかった。自分の名前さえも実感がなかった。
ちょうど盛夏の時期で、樹々は大きく葉を茂らせ、木漏れ日が射している。その揺れる光の中、何かがキラキラと反射していた。目を凝らせば、木の幹に半分隠れるようにして、少女がいる。結い上げた髪の結び目に、蝶の羽のように伸びる角があった。
「君は……近くの集落の子か？」
そう声をかけると、少女はおずおずと姿を見せた。
……てないの。
少女は何かを口にしたが聞きとれなかった。
今にして思えば――彼女は少し落胆していたのだ。
――「覚えてないの」と。
一度目覚めた時に自分は彼女を見た筈なのに。
「おからだ、もう平気？どこも痛くない？」
「……ああ。」
少女は少し俯いて、意を決したように顔を上げる。
「あのね、私、お姉様が宮殿で働いてるの。お姉様達のために、お昼のお弁当を届けにいくの。それでね……あなたも、どうかしら。きっと、みんなで食べた方が、美味しいのだわ！」
「……いいのか？知らない人が混ざっても」
「もう、知らない人じゃないのだわ！」

少女は袖を引っ張って宮殿の方へと歩き出す。
「……わ、分かった。じゃあ、ご一緒させてもらおうかな。君の名前は？」
「トロワ。あなたは？」
「ベルフリード、というらしい」
「じゃあ、フリードって呼ぶわ！　」
少女――トロワは花が咲いたように笑った。つられて自分も、少しだけ口元を緩ませた。ここに来てから、初めて笑えたような気がした。

「……冷えるね」
リウスイ首都・クマノは一年中温暖な気候だそうだが、どうも今年は異常気象のようだ。誰もがいつもよりも冷たい風に肩を縮めていた。日が落ち、暗くなった蓮池のあちこちには篝火が焚かれ、死者の名前が記された小さな灯籠が水上に浮かび、輝いている。灯籠は静かな水面にその身を任せているが、祭の最後には小さな炎を上げ、燃え尽きて沈んでゆくのだという。炎に失われた命を重ねるのだ。
数多の人間を飲み込んだ水に根を張る蓮の花は、次の花期はきっとより大きく、鮮やかな花を咲かせるだろう。さぞかし美しい光景だろうがあまりにも儚く、恐ろしく、寂しいとさえ思う。
ユーリシュカは、隣のムネモシュネの肩に自分の外套をかけてやった。ありがとう、とよく似た顔で微笑まれる。
「大丈夫か？」
「うん。もう普通に動けるよ。戦うのはまだ流石に無理だけど」
「今ぐらい、戦いのことは忘れても良いだろう？」
「……そうだね」
近くにいた角を持つ老人が、椅子を持ってきてくれた。礼を言って、ムネモシュネをそこに座らせる。蓮池に渡された足場には、祭の見物客の安全の為に簡易的な柵が取り付けられている。宮殿から続く長い足場の先にある舞台では、さらに多くの篝火が焚かれ、誘われ

た小さな羽虫が時折火の中に身を投じていた。
「ねえ、ユーリ。また僕のこと叱ってくれる？」
「どうしたんだ、いきなり？」
「……うん、何となく。思い立ったから口にするだけだよ。あの時僕は、姫様の為なら死んだっていいって言ったけど。ユーリは叱ってくれたでしょ。なんだか嬉しかったんだ。あのまま死んじゃってもいいくらい」
「……何度だって叱ってやるさ。それで君を失わずに済むのなら、な」
「えへへ。お兄ちゃんらしいことたまには言うんだね、ユーリ」
だから死んでもいいなんて言うなよ――そんな言葉は口には出せなかった。言う勇気がなかった。
「あ、姫様とシャーロックだ！こっちこっち！」
リウスイ東部の民族衣装だという、白い着物を纏ったユーディットと、特にいつもと変わらない佇まいのシャーロックに向かって、ムネモシュネが手を振った。女王の登場に見物客がにわかにざわついたが、「気を使わないで欲しい」と彼女の一声で、ざわめきは祭の喧騒へと還っていった。
「ちょうど始まるところですね、姫様。……ところで、貴賓席にいらっしゃったのでは？」
「一緒に見たくてな。ミサキ殿に断りを入れて抜けて来た」
ユーディットは、髪を着物に合うように結い上げている。耳には四人で暮らしたあの村から持って来た耳飾りが揺れ、纏め上げた髪には宝石の輝く串状の髪飾り――確かカンザシ、という名前のものだ――があった。紫金の輝きをもつその宝石には見覚えがあったが、ここで指摘するのは野暮であるような気がして、何も言わない。ムネモシュネがちらと目配せした。半身も分かっていて口にしないようだ。
太鼓の音が響き、辺りは水を打ったように静まり返る。舞台の奥から、足音ひとつ立てず、しかし微かな衣擦れの音だけを立て『舞い手』が現れた。白い細面の女の面を被っていた。面は泣いているのか、微笑んでいるのか、怒っているのかよく分からない、何とも言えない表

情をしていた。
『舞い手』が誰なのか、当日まで特に隠したりはしない。それ故に誰もが、その面が外されることはないと思っていた。顔を隠すことを条件に引き受けたのだろう、と想像することは容易い。
だが、彼は――フリードは指先で面を外して、放り出してしまった。あっと声が上がる。元々中性的な顔立ちの男だったが、長い髪と細身の肢体に紅白の舞装束を纏い、目元と唇に紅を指した姿は、いよいよもって性別が曖昧だ。それどころか、この世のものとは思えないような佇まいさえ身につけている。
背後で控えている楽団が動揺していた。そんな彼らを叱咤するように、緋色の下衣の裾から見え隠れする爪先が一歩踏み出され、床板を強く踏みしめる音が響く。それに合わせて、ようやく神楽が奏でられ始めた。
強い風が吹いた。雪の交じった冷たい風に白い上衣が靡き、幽玄な舞いを彩っていく。挙動に合わせて振り乱れる髪の下では、どこかで見たことがある色の耳飾りが、篝火の灯りを受けて時折輝いているのが見えた。

「おい、舞がじきに始まるぞ。見ないのか」
シャーロックは馬屋の一角を間借りしているモリオンの所にいた。彼は振り向くとばつの悪そうな顔をする。
「この子には随分と助けられましたから。しばらく、一緒にいてやろうかと思って」
「モリオンは行って来いと言っているぞ?」
適当なことを言った訳ではない。モリオンは鼻先でシャーロックの腰をつついていた。いいのか、と優しい声で囁いて彼は愛竜の頭を撫でた。
「素敵なお召し物ですね」
「お前も一丁前に世辞を言うようになったか。首領殿といつもの彼女達だよ。私を着せ替え人形か何かと思っているのか……まぁ、悪い気

はせんがな。綺麗な服だ。動き辛くはあるが」
　何着か着物を用意され、好きなものを選べと言われた。ミサキは一番派手な紅色を勧めたが、白をユーディトが選ぶと、少し残念そうにしていた。袖を通すのがミサキなら、派手な色でも似合うだろう。だが自分ならば着物に負ける。そう思っての選択だ。服飾にはあまり凝らないがそれぐらいは分かる。
「……ユーディト様。不躾ながら、少しよろしいですか？」
　いつになく小さな声だ。傷の具合でも悪いのかと思ったが、そんな様子はない。彼は細長い箱の中から簪を取り出した。
「雑貨屋で見かけて、貴女に似合いそうだと思ったのです。受け取っていただけますか」
　髪に挿し込む部位には艶のある黒漆が塗られ、先から金色の細い鎖と飾りに彩られた、爪ほどの大きさの紫金水晶が下がっていた。水晶は繊細な形に研磨され、日の沈んだ薄闇の中でも光を帯びて美しく輝いている。
「これはお前の角か？」
「いえ。その……宝石には詳しくないので。ただ、紫金水晶に価値があることは存じております。価値の分からないものをお贈りするよりは、と」
「お前らしいな。……私は挿し方を知らん。お前がやってくれ」
　ユーディトはシャーロックに背中を向けた。「では、失礼します」と近い位置で声がした。耳に優しく残るのは、少し低く、穏やかな声。
「……ミサキ殿は寛大だな。クーデターに加担した者を、兵の任を解いて帰順を誓わせるだけで済ませた。鉱人は長く生きるだろう。この処分は慈悲であり、罰なんだろうな」
　どんな顔をしてこんな話をしたらいいか分からない。顔の見えぬうちに、とユーディトは口を開いた。
「もし私がミサキ殿の立場であったのなら、きっと彼らを許せない。そもそも、お前達を損なった時点で、私は相手を殺すことしか考えないだろう。だからと言って彼女を愚かだとは思わない。むしろ……私は少し、あの人が羨ましくある。

……シャーロック。私はこの通りそういう女だ。自分の感情を抑えることが出来ない。だから、お前に頼みたい。いや、女王として、お前に命じよう。
もし、私が道を違えたら――お前が私を殺せ。」
向き直れば、シャーロックは膝をついて首を垂れていた。ユーディトはそれを肯定と判断した。
彼はゆっくりと顔を上げる。憂いすら帯びて見える程の瞳。十年という時は、ユーディトの周りのものを大きく変えた。だが、それでも変わらないもののひとつ。自分より長く生きるであろう彼は、さながら時間が止まっているかのようにさえ思える。
ユーディトは手を伸ばした。彼は、その手の甲に忠誠の口付けを落とす。
刹那、触れ合った指先には温もりを感じた。
「似合うか？　私からでは見えん」
「お似合いですよ。後で誰かに鏡を借りましょうか」
「そうだな――では、行こう。双子が待っている」
まだ足の怪我が完治しきっていないシャーロックの歩みに合わせて、ユーディトはゆっくりと歩みを進めた。慣れていない服と履物だ。隣り合って歩ける程の速さがちょうど良い。

7幕

「で、その後なんも無かったワケ？」
　シャーロックは斧を振る手を止めた。
「……無かった。」
「そっか。旦那ってさ、そういうの……その、一生隠しておくタイプだと思った」
「俺は今も、あの人には隠してるつもりだ。あの人は……そういうの興味ないから。村では浮き足立った噂どころか、そういった噂の中で自分の名前が挙がっていても、知らないようだった。鉱人同士の風習も知らないんだろう。……俺はただ、自分の感情に決着をつけたかっただけだよ。応えて貰おうなんて考えてない」
「俺さ、旦那のそういうところ、割と好きだぜ」
「そうか」
「贈り物は喜んでくれたんだろ。それだけでも良かったじゃないか。ところでさ、魔道書の最適化の件なんだけど」
　フィーアが譲ってくれたそれは驚く程手に馴染む。魔力を通せば魔道書と同様に応えてくれるとのことだ。構えを解いて、斧を肩に担いで向き直ると、彼はドナスタークの魔道書を両手で差し出した。
「最適化は完璧。さっすが俺いい仕事したわ～。あと、この間の写真できたから、魔道書に挟んであるよ。でさ、いくつか質問したいんだけど、いい？」
「俺が知ってることなら」
　椅子に勧められ、壁に斧を立て掛けて置き、腰かけると、待ってましたとばかりお茶が淹れられて菓子まで出てきた。技術開発局の中はすっかり綺麗になり、こうやって来客をもてなせる空間が生み出された。いつまで続くか分からないが。どうも整理整頓は苦手のようで、机の上には紙束や本が積み上げられているところが既に点在していた。
「旦那はこれのこと、どこまで理解した？　どういうモノなのか分かってる？」

「どういうモノって……『星の民』に伝わる古い魔道書のひとつだ。俺の一族は代々、それを解読しようと試みてきた。だが、俺の代までで解読出来たのは全体の二割、って言われてる。複雑すぎて解読がなかなか進まずにいたんだ。俺は解読の基礎を学び始めたばかりだったから、この魔道書を使いこなせてもいない」
「『星の民』はさ、天体の観測と、それを正確に表す為の算術に優れていたんだろう。旦那達のおかげで、エルツ大陸の数学と天文学は十年、いや、五十年早く進んだって言われてるぐらいだぜ」
その発展が、星の民を滅ぼすことになったのは皮肉としか言いようがない。
星の民にとって、空の星々は神聖なものだった。それ故に、観測技術と算術の発展によって、それが何なのか明かされていくことを、許さない者達がいた。そして彼らによって、殆どは損なわれてしまった。
星を見上げるあまり、その光によって肌を焼かれたのだ――と、そんな言い伝えがあった。
星は死んだ人々の魂が、生きる人々の道標となるために燃える光だった。実際は、肌の色は人種的特徴であり、星は気体の塊や岩塊で、魂の行き着く先は空から失われた。
発展は時に物語から夢を奪い、幻想を無に還していく。
……だが、それが何だと言うのだ。物語は語られ、紡がれ続け、祈りを止めることはきっと永遠に訪れない。そうであれば良かった。だがそうはならなかった。
彼らは炎と暴力で大半を破壊した。
「……このまま全てが失われていくのかな」
「このままならばな。いずれ砂に埋もれて誰も見つけられなくなる」
「なぁ、姫さんとサフィルスを奪還したら、ルベウスを解放しに行くんだろ。そうしたら、俺は調査チームを組んで『星の民』の自治区に行けないか提案する。三国から学者を集めてさ。彼らが遺したものを見つけたいんだ。――もし良かったらさ、旦那も一緒に行かないか？」

信仰と発展は共存できる――変光星の輝きを眺めながら、そんな思いを抱いたのは随分と昔のことだ。もう、その時使っていた数式さえ思い出せない。

けれども――

「約束はできない。この戦いが終わるまで、俺が生きているとも限らないからな。でも――その時にもし俺がそこにいたら、その時は同行させて欲しい」

「……うん。待ってるぜ。現地コーディネイターさんよ」

フィーアは時々難しい言い回しを使う。気取りたい年頃なのか、それともその聡明さ故か。どちらもである気がした。何にせよ彼と話しているのは楽しい。弟ができたような気分だ。

二杯目のお茶を注ぎながら、「……でさ、こっちが本題なんだけど」とフィーアは話を振ってきた。先程のも充分、本題に相応しいような話題であったが。フィーアの瞳は真剣そのもので、少女めいた佇まいが鳴りを潜める程であった。

「この魔道書は雷の力を持っているだろう。雷っていうのは、今こそ原理が分かって自然現象という認識になったけど――昔は、そうじゃなかった」

「ああ。それらは得体の知れない、怪奇現象のひとつだった。人々はそれを恐れ、敬った。そういった畏敬の概念を魔道書にしたのが、この『ドナスターク』だ。そこまでは知っているよ」

「知ってるなら話は早いぜ。旦那さ、この魔道書に『対』になる存在があるとか、何か聞いてない？　最適化の最中に気付いたんだけど、この魔道書、別の『何か』が僅かに混線してるんだ。考えてみればさ、これだけ強力で価値のあるものがーーそう、女王様の宝剣ベトリアに並ぶくらいの逸品が、ただ一つ、存在理由もなしにあるなんて、不自然かと思って」

シャーロックは既に薄れつつある故郷の記憶を浚った。

「……心当たりは無いことはない。もし、そうなのだとしたら――」

7 幕幕間

「ベラ・リリン」の一員として過ごす日々は、大変なこともあるが苦痛ではない。何より給料が良い。祖父がいなくなってから引き取られた孤児院に時々赴いては、少し良い菓子を振る舞えるくらいには余裕がある。コレーは今日も仕事を終えて、孤児院へと足を運んでいた。歩くと少し遠いが、普段から鎧を着込んで槍を振り回しているコレーにとっては、大した道のりではない。

閑散としている帝都の大通りを抜けて、森の遊歩道へ足を踏み入れた。冬の近付いた森は薄茶けた色合いで、落葉して隙間の空いた木々の中を冷たい風が通り抜けている。

「……およ？」

遊歩道の真ん中に猫がいた。猫はしばらくこちらを見ていたが、やがて菓子の匂いにつられたのかこちらに歩み寄って来る。

「お前が食えるようなモンはねーぞ、ごめんな」

人慣れしているのか、逃げるどころか脚に頭を擦り付けてくる。首輪はしていない、真っ黒な猫だ。

真っ黒な——そこでやっと、コレーはその異変に気付いた。

まるで、猫の形に黒く空間を切り取ったような。その空間も、一転の陰影もなく、ただ光を通さない黒、漆黒よりもさらに強い黒に塗りつぶされているのだ。それなのに毛の感触はちゃんとある。

どうしてこんなものを自分は『猫』だと認識した？

冷や汗が背中を伝い落ちた。〝それ〟から一刻も早く目を反らしたい。だが目を反らしたら〝それ〟は何かをしてくるかもしれない。両腕で抱えた菓子の袋が微かな音を立てた。〝それ〟がこちらを見上げる。

「ベラドンナ」

知っている声がした。紫紺水晶の角と、少し褐色がかかった肌の女——アンネマリウが横道から姿を現す。〝それ〟は彼女の姿に気付くと、コレーには興味を失ったのか彼女の方へと向かった。〝それ〟

はアンネマリウの足元の影に飛び込むと、影と同化したのか姿が見えなくなってしまった。
「ごめんなさいねコレー。驚かせてしまったわね。この子ったらずいぶんと遠くまで散歩に出ていたみたいで」
「アンネマリウ様……あの、今のは」
「ああ――貴女は初めて見るのかしら？　私の魔道書よ」
「魔道書？」
　彼女は小脇に抱えた魔道書をコレーに見せた。
「この子はベラドンナ――私はそう呼んでる。最初に触れた時、猫みたいな手触りだと思ったから、昔飼っていた猫の名前をつけてあげたの。私が故郷から持って来れた唯一の物品よ。でもこれが何なのかは良く分からないわ。内乱の時に、書庫の一番奥に大事そうにしまわれてたから持って来たのだけれど、今となってはもう誰もこの子のことを知らないの。
　――これは推測だけど。おそらくこの子は人によって作られたモノよ。そうじゃなきゃ、こんなに可愛い猫の形をしていないでしょう？」
「そう、ですか――」
　大丈夫なんすかそれ。
　そう言いたかったが、言ったところでどうにもならない気がするので黙っておいた。アンネマリウには懐いているようだし、今まで何もなかったのだから、これからもそうであると願いたい。
「……そうだ、丁度良かったわコレー」
　アンネマリウは女性にしては低めの声を持つ。その声色が妖艶さを引き立てて、時々ぞっとするような色香を感じさせる。彼女はコレーの元へ歩み寄り、吐息を感じるほど近くまで顔を近づけて来た。
「聞きたいことがあるの、貴女の忠誠はどこにあって？」
　試されている、と思った。下手な答えを返せば、その得体のしれない魔道書が牙を剥くかもしれない。彼女とて伊達に皇女の親衛隊帳をやっている訳ではない。瞬きの間に自分など消してしまえるだろう。一度鎮まった筈の冷や汗が再び噴き出すのを感じながら、コレー

は言った。
「――皇女様であります、アンネマリウ様」
「本当？」
「我が祖父・パーシアスに誓って」
「……そう――そう。良くってよ、嗚呼――ベラドンナが気に入った子を消さずに済んだわ。良かったわねベラドンナ。ふふふ……」
冷や汗は止まるどころか酷くなった。そんなコレーを知ってか知らずか、満足気にアンネマリウは微笑むと、耳元で彼女は囁いた。
「貴女も秘密を共有しましょう。籠の鳥を逃がすことを考えているの。可哀想な籠の鳥――――私達の皇女様を。」

gardenquartz

共通歴２６５年　冬

先王を亡くしてすぐの仕事が、こんな気の滅入るものであるとは。付き従う誰もがそう感じているだろう。ユーディトもその一人だ。一人で留守番は嫌だという妹は、何とか言いくるめて城に残してきた。そしてその判断は正しかった、と目の前の状況を目の当たりにして思わずにはいられなかった。

ルベウス国内で内乱があり、そこから船で逃れようとした者達がいた。しかし、船は砲撃を受けて沈んでしまった。人々を乗せたまま――此度の一件は大まかにそう聞いている。この時期は、ルベウス側からサフィルス側に向かって強い海流が流れる。それに船の残骸が乗ってここまで漂着してきたのだ。

生存者の確認が最優先、と母は命を下していた。一人でも多く救助せよ、と。だが、確認するまでもない――元々の船の大きさは定かではないが、それなりの体積があるものを、こんな風にバラバラにしてしまえるのだから、海に呑まれた者などひとたまりもない。流される前にことが済むだろう。既にルベウス側では海岸で遺体が見つかっていると聞いている。ましてや冬の荒れた海だ。仮にこちらまで流された者がいたとしても、これでは誰も生きてはいまい、と思わせるには充分だった。

「母様……」

思わず、隣に立つ母の袖を掴んだ。母は、すこし青ざめた顔をしていたが、唇を引き結んで海を睨んでいた。そして「先に馬車に戻りなさい」と告げた。

「……貴女も連れてくるべきではなかった。ごめんなさい」

何れ王になる者として学ぶように、とは母の弁だったが、ここにあるのはそんな言葉を覆す程の光景だったようだ。ユーディトは黙って頷くと、騎士に付き従われながら馬車へと歩みを進めた。生きた物

の気配がない冬の海は、波の音が絶えず聞こえるというのに、静寂を感じて仕方ない。厚い雲間からようやく差し込んだ陽光でさえも、この場を照らすには覚束ないと思えた。

ふと、その陽光を受けて光った何かが、ユーディトの視界の端で刹那、瞬いた。その方向に目をやれば、他と比べれば大きめの残骸が寄り集まり、砂の上に濃い影の塊を落としていた。

――その影の中に、人が俯せに倒れている。

ユーディトは駆け出した。付き添いの騎士達は驚いて一呼吸遅れたが、すぐに後を追って来た。

何よりまず目に付くのは、頭頂部から伸びた鹿のような角だ。淡い金色と紫色の混じった美しい鉱石で出来ている。先程光ったのはこれであるらしい。少し遅れて追いついた騎士達が警戒して、それぞれ武器を構えた。

警戒の眼差しの中、ユーディトはその伏した身体を仰臥させる。死体かもしれない、という嫌悪感は不思議と感じなかった。ただ、生きていて欲しいと。行かないでほしい、と。目の前で命の炎が消えていく悲しみと焦燥感、そしてなぜ奪われなければならないのかという、ささやかだが確かな憤りで、胸がいっぱいだった。

……まるで父を看取った時のように。

若い男だった。谷間に咲く山菫のような深い紫の髪に、褐色がかかった肌の色。サフィルスの者とは少し異なった面差しをしていた。触れた頬に温もりはない。氷のように冷たい。跪いて胸に耳を当て、祈るような気分で意識を研ぎ澄ます。あんなに静かだと思っていたのに、今は波の音がうるさくて仕方ない。どれぐらいそうしていたかは分からない。傾いだ視界に母のドレスに包まれた足が見えた頃、確かに心臓の鼓動を耳に感じた。頭を上げて母様、と呼べばそれで母は全てを察して指示を出す。にわかに周囲が慌ただしくなっていくのを横目に、ユーディトはその冷えた身体を抱き上げて、自らの体温を分け与えるように身を寄せた。

女王はフルーツサンドを頬張りながら、片手で羽ペンを走らせていた。
「行儀が悪いのは分かっています。でもちょっと見逃してちょうだい。これは今日中に片付けたいのです」
口止め料です、と彼女は残りを籠ごと差し出した。
「娘達が作りました。貴方、苺は好きですか？」
「ええ。故郷ではなかなか口にする機会がありませんでしたが」
「それは良かった。温室栽培のものが今年は良作なのです、後で食べるのですよ」
女王から何かを賜る機会などそうそうない。それがフルーツサンドであるのは多少締まらない気もするが。
「従騎士任命の儀に顔を出せなくてごめんなさい。どうしても外せない議事があって。滞りなく済みましたか？」
「はい。姫様はしっかりお務めされました。これよりは従騎士として、役目を果たさせていただきます」
「……あの子のことお願いね」
ペンを止め、どこか遠くを見ながら女王は呟いた。
「ユーディト様が見つけてくださるのが遅ければ、私は助からなかったと聞きました。恩義は、必ずや」
海に投げ出されて暫くは、近くにあった板切れに掴まっていたが途中から記憶がない。目覚めた時は数日が経っていて、サフィルス王城の医務室にいた。姫君は足繁く病室に顔を出し、自分が目覚めるのを待っていたという。
そんな経緯を耳にして驚いたのは記憶に新しい。王族と民との間には、もっと隔たりがあるものだと思っていた。
彼女の眼差しは次にこちらを見た。憂いを帯びて細められた紅い瞳と、緩やかに笑みを描く唇。美しい人だ。だが、寂しげに見える。その表情は、先王である夫を亡くし、他の者には任せられぬと自ら名乗りを挙げ、国を仕切ってきた女王のものではなく、一人の母親としてのもののように思えた。
「あの子は優しい子です。でも誰よりも激しい、炎のような子――だ

から一人にするのが心配なのです。どうか側にいてあげて。頼みましたよ、シャーロック」

女王は、姫の付けてくれた名前で呼んだ。まだ慣れない、だが悪くないと思っている。故郷を失い、家族が生きているかすらも分からない。全てを失ったに近いが、歩むべき道は開けていた。

――ここでなら、生きていける。